

の太平、吾人をして、再び行路難を賦せしめざらんとを。然りと雖も、猶未來の地を望むに、前程甚だ遙かなり。請ふ同舟の人は、氣長く航海に日月を消過すべし。孔子曰く、已に賢ると、蓋し圍碁管絃も、亦以て消日の助けとなるべきのみ。

余は維新已來、八年間の事實と、人心の變態とを論述し。之が原因結果を審かにし、以て國家將來の運命を卜定せんと欲せり。而して前數章に於て、其論脈を失し、誤て政理の談に流れ。恰も痴人の夢を説くが如く、航海日記を以て其筆を收む。今や更に方針を正し、則ち封建の昔日より流注し來りて今日眼前に葛藤せる人心の有様を論明し、其の將來に於て、世人と共に、國恩に報答する所以の道を講究するの一助となすべし。

幕府の世季より、漸次人心の變態を生ぜし由來を觀察するに。其の起因は、幕府の壓制の管に人心をして倦ましむるのみならず。其の太平修飾の政令は、當時甚だ苛刻を極めたりき。今之を神経病に譬ふ、其の見聞する所の者に、悉く疑心を生じ。常にみづから安んずること能はざる如く。自己の妄念を轉して、快活

の氣象を養ふことを知らず。只に天下の紛擾を來し、諸侯の異謀を生ぜんことを恐れ。其の亂緒ともなるべき事は、大小となく威壓して、一々絶滅せんと欲す。其の勢二百年の久きを積み、漸々増長して、文政天保の間に極まり。自己みづから、天下と共に疲困して、遂に爲すこと能はざるに至る。然り而して、幕政已に失し、人心已に背くと雖も。未だ外縁の、此の鬱滯を啓發すべきもの無きが故に。依然として歲月を涉り。嘉永安政の間に及て、外國の事難と共に、漸く天下の活氣を生じ。恰も風力の波浪を誘起するが如く、徐々に動搖を進めて。遂に海上一面の狂瀾となれり。蓋し外夷を惡み賤みて、禽獸視するは、和漢の學風にして、其の我國を以て、世界の最上文明國となすは、從來の國俗なれば。學者は勿論民間の有志なる者も、奮て一身の危殆を忘れ、鎖國攘夷の論を主張せり。爾來種々の關係を變し、遂に勤王佐幕の二論黨に結局すと雖も。皆是れ當時勢の止むべからざるに由るものにして。今之が實情を點檢し來れば、全く多年鬱屈の人心時に激發して。遂に封建壓制の境界を脱出せしものと云ふべし。

余は爾來王政維新の八年間に於ける歴史に由り、以て今日の人心を觀察し、此の

一大現象の性質及び情爲を點檢するに。元來最初變屈の一念、之れが原動力となりて。此の人心を激發奮起せしめしが故に。終始此心を遺傳し、人々他の抑制を脱し、吾れ取て代るべしと云ふ氣合を含み。乃ち彼我相抗して、苟も相下らざ。其中おのづから向背を相分ち、怨親を相爲し、變化出沒して種々の因縁因果となり。一勝一敗、一起一倒殆ど人をして、是れ何等の故たるかを疑惑せしむるに至る。されば今日吾人の眼前に横はりたる、此の一大現象の中に。無量無數の因果を含藏して、將來の禍福をなすもの有るが故に。余と同感の士は、宜しく巨眼を開き、細心に注意し。其由る所を觀、其安ずる所を察して、之が觀察を誤ること無かるべし。

余が所謂今日眼前に横はりたる一大現象とは、其の事物の形迹を指して、之を指名するに非ず。則ち人々の意氣感情を惹き起し來る勢力の實跡を言ふなり。故に今直ちに、事物の一端を擧て、是を將來に於て、國家の禍福をなす者なると論斷すること能はず。蓋し吾人は、現に此一大現象の中に墮在して、此の形勢と共に推移し、此の作業と共に流轉し。決して此の因果を脱出して、獨りみづから立

つこと能はず。只に立つこと能はざるのみならず。天下と共に相呼應して、日々禍福を爲し。其の因果の種子を將來に向て蕃殖せり。而して此の一大現象に支配せられて。千變万化動搖極り無きの中に消長する者は。乃ち制度なり、法令なり、學術なり、教法なり。及び嗷々たる世上の物議密々たる黨家の口耳に附着せる政論なり。人あり難じて曰く、此數事は、即ち是れ吾人が眼前に横はりたる一大現象にして、此外別に現象なる者無し。今子が謂ふ所の者は、おのづから天下の大勢のみ。天下の大勢を以て、一大現象と云ふは、豈奇僻の論に非ざるかと。余之に對て曰く、是れ大に然らず。凡そ天地の理必ず物ありて、而して後勢あり。勢は物の運動力のみ。故に古人は、之を一概に天下の形勢と云ふ。余は之を一大現象と云ふ。天下は物なり、天下其物の形勢なり。然るに世人天下を以て漠然たる天下となし、形勢を以て風雨雷霆天時の看をなす。是以て其天下の何物たるを知らず、其形勢の由來する所を知らず、吾れ人其中に出頭没頭して、人世の禍福治亂の因起する所以を戒愼せず。故に朝となく野となく、上下諸共に手に應じ足に任せて、知らず識らず謂ふ所の天下の形勢に隨逐し。未だ嘗

て一人の頭を回らして、此一大現象を看破するもの有ることなし。今夫れ政度の正しからざるは、之を正うして止まんのみ。法令の適せざるは、之を適せしめて止まんのみ。學術の精ならざるは、之を精にして止まんのみ。天下の人々、各自己れの堪ふる所能する所に自適すれば、又何の大勢と論じ、形勢と論ずるの要あらんや。當に知るべし、天下は一大現象なり。天下の人心に、葛藤せる一大因果なり。此外別に天下なるもの無く、形勢なるもの無く、之を離れては、世間事物の消長する謂れ無きことを。

今此眼前に羅列せる影像は乃ち、國家の實象に非ず。他に一大因果ありて、其中に無量無數の因縁を含藏することを知らば、茲に其原因を既往に反求して、其の將來に於ける禍福の結果を卜定せざるを得ず。然れども此事たる、實に至難中の至難なり。何となれば、此一大現象中の、無量無數の小種子は、時と處とに於て、其の意趣を異にし、順と逆との境に於て、其の發生の有様を變ずるが故に。一々其の將來の結果を指定する事は、云何なる神聖の人と雖も、決して能はざるなり。況や余が如き、凡智の管見を以て、妄に臆度せんと欲するに於てをや。さ

れば此の一大現象中に於て、特に既往の歴史に起因し。今や一轉して將來の大葛藤を生ずべきものを擧げ、之に評論を加へ。以て國家の爲に千慮の一得に供ふべし。

彼の封建の世季に於て、一回國事を論議し、國事を顛覆せし意氣を、人心に感覺せしめしより。爾來世運の變遷する、國歩の推移するに従ひ、漸く其根株を培養し。其今日に在て、大勢に關係せる者。一々枚擧するに遑ある無し。就中現今に於て、漸く萌芽を發露し。將來の因縁成迹の云何に由て、尤も國家に大關係あるものは、即ち民權説にして。其中仔細に點檢する時は、又種々の生因ありて、決して其意思方向を同うせず。今之を大別して、上下の二流とし。其性質情爲を辯明し、以て世運進動の如何を審かにすべし。

其上流の民權説を主持するものは、皆悉く老練の士君子なり。今此の士君子の説を聞くに、民權を貴重し、人民をして、奴隸根性を去らしむるは、即ち國家獨立の基礎なり、國家獨立の精神なり。如何となれば、國家をして、人民の權利を重んじ、以て政令を布き。人民をして、各自に權利を盡さしめ。以て氣力を振起し、其生

産を繁殖し天下比戸封すべきの域に、此の國運を進むるに非ざれば。決して我が國家の獨立を保つべき道あること無しと。乃ち此簡短なる立説は、彼れ士君子の愛國の實情より發せしものなるか故に。ちのづから神人をも感格して、漸く國家の地軸に根株を下し。將來必ず繁殖滋蔓すべきこと疑なし。されば國家の重任を負ふものは勿論、眞實に國家の幸福を希望する者は、此の立論に、猜忌の情を挿み。以て萌芽を挫折すること無く、却て此論脈をして、共に俱に中正の地に誘導し。彼れ小人の假て以て國害を招くの旌章たらしむこと勿れ。書に云く、天烝民を生ず、物あれば則ありと。又曰く、民は親むべし、下すべからずと。彼の士君子の立説は、所謂民權を以て、乃ち人類の禽獸夷狄に異なる所以の大本となすが故に。恰も封建の世に於て、武門一赫に其の門地を重んずるの意と、其觀念を同し。以爲く我が天皇陛下は人王なり、人にして貴ければ、人王固より尊し、人にして卑しければ、人王も亦陋し。ゆゑに民權を貴重するは、即ち天皇陛下の盛徳を四表に光被する所以なりと。甚だ嚴正の道理を懷抱せり。ゆゑに若し強て此の立説を挫折せんと欲する時は、勢此の士君子をして、不満の意を生

せしめ。從て彼の放縱無頼の小人をして、其罅隙を窺ひ。引て以て國害を誘起せしむるに至る。しかのみならず、此説たる封建の末期に起りし論黨の如く、其の人を同しして、一變一化一起一滅するが如きものに非ず。後來必ず今に續て任運と増進し。時に一張一弛、其影像の變態あるも、必ずや甲乙相受けて、其の論旨の根本を變ずること無かるべし。これを物に譬ふれば、國民の髓を油とし、智慧精神を燈心とし、以て民權の火を點付せしが如し。故に此の國家の有らん限りは、因縁して、此の氣性は必ず不滅の者とならん。

斯く民權説の、國家の地軸に根株を下したるは。或は國家獨立の基礎にして。將來の幸福を、其中に含藏すべしと雖も。余は今容易に、之を大雅に上し、明治の聖世を頌すること能はざるなり。何となれば、先進の誘導其宜しきを失し。人民の智徳、其自信に堪ふることに能はず。却て爲に品行の無頼、思想の放逸を招き。彼の民權の二字を假て、國家の秩序を破り、政令の範圍を犯し、黨をなし、類をなし、恰も飢者の食に就くが如く、時も處も耻ぢ畏れず、雷同附和して、狂奔するに至らば。必ず國家不測の大難を醸し、其の獨立を失ひ、其の災害を來すの一大原因と

なればなり。吁乎民權の説たる、一跌すれば、必ず君民の不和を生じ。再跌すれば、必ず國家の争亂を起し。而して其の問題たる、動もすれば放縱無頼の手に落ち、其の玩弄に歸するを如何せん。意ふに反亂不軌を謀るに、何ぞ名なきを憂へん。恐くは後世の暴民に、名義を興ふるものは、蓋し此の民權の説ならん。此故に民權の説を以て、無智の小人を鼓動し。自由の理を假て、無頼の子弟を奮激す。譬へば悍馬の將に逸せんとす、又鼓して狂奔せしむるが如く。果ては國家と共に、奔命に斃れんとす。吁乎之を誘導して、端正着實の地に歩せしむるものは、天下其れ誰れが任にか歸す。顧ふに其朝に在ては、政堂に立て、輔弼の任に膺り、天下の大權を執行する所の諸公は、蓋し其人なり。其野に在ては、文學に従事し、言論著書、以て世論物議の是非利害を判別し、一般の國民を抱持して、文明に漸進せしめんと欲するの士君子は、蓋し其人なり。此の二人の者をして、一朝其術を失せしむるときは、天下滔々、遂に歸する所を知らず。其下流の民權説を主張する一類は、彼の明治六年の冬に於て退職せし、舊參議諸氏の建言に胚胎し。漸く今日に至りて、一種の萌芽を生じ、其の聲息を顯はすに

至れり。然れども彼の諸氏は、畢竟民選議院の問題を、世上に提出せし者にして、之を急激なる民權家の外縁なり、誘導者なりと云ふは可なり。決して此の一類を、生育哺乳せしものと云ふべからず。蓋し此の一流の民權家たる、其の起因固より一ならず。就中其の根柢となりて、尤も此發生に關係ある者は、即ち明治初年以來の物情是なり。天下皆曰ふ、明治の政府は、一二強藩の建立せしものなりと。是を以てみづから屈して容れられざるの思をなし。鬱々不平の氣を蓄へて、快活自適の分なく。恰も幕府の專制を脱して、又更に三藩の專制に遭ふの觀念を生せり。而して彼の維新の功を負ふて、權路に進むものも、意氣軒昂、自然に他を壓するの勢あり。故に朝廷常に此の物情の平和を致して、各々其所を得せしめんと欲し。舊罪を捨て、舊惡を忘れ、一能に譽ある者も必ず進め、一藝に名ある者も必ず用ひ、言路を開き、下情を通し、只管此の屈快の氣を伸ぶると雖も。之を右に救へば左に潰え、之を前に除けば後に起り、遂に此の人心不満の意を醫すること能はず。益々世人をして、我が才あるも世と合せず、彼が智あるも時と背くの憤慨を發せしむ。而して此の鬱々の念、嗷々の聲は、今日全く一變一化して。

悉く此の下流民權説に合同すること、恰も傀儡師の一機を轉し終て、種々の人形を其の筐裡に收むるが如し。余は此の筐裡を目して、一鬼一佛、怨親平等の觀を爲し。其の將來に於ける禍福吉凶の如きは、偏に機關師の力量に任すべし。余は此論を終るに臨み、一言以て世の先進者に告んとす。曰く、今日國家の運勢は是れ果して所謂文明開化の域に進むべき方位に在りと云ふべきか。彼の封建の世に行はれし産業及び生活の束縛を解きて。其の自由の權利は、全く人民の掌中に歸せり。是に於てか兎を牧する者あり、蓄たぐを耕す者あり、死を牧し蓄を耕すとは當時都下の流行之を以て營業とするの風あり故に諷刺して之を言ふなり。各自々在に業を營み、生を遂ぐることを得ると雖も。茲に其情態を審按すれば、即ち目前の利を逐ふて、父祖相續の身代を失ひ。一時の計に急にして、永年資生の産業を棄つる者、比々皆然らざるは無し。故に債主は追て門に市をなし、身代限り比戸封ずべし。父は其の子に通れ、子は其父に通れ。親族兄弟朋友故舊相互に情を絶ち、義を棄て、只利是れ争ふ。其法廷訟訴の繁昌なるは、古今未聞の秋と云ふべし。是れ此の有様は、果して真正なる文明開化の現象か、余は甚だ惑なきこと能はず。且つ彼の言論著書の自由の如きは、只に人

の短を説き、人の非を鳴らし、人の惡を許くを是れ勉め。其非毀の言罵詈の聲、嗷々として天下に滿てり。是れ實に彼我の憤悲、自他の怨恨を生起するの道にして。遂に一國人民の不和を醸し出すの一大禍源なり。斯る現象を取り輯めて、茲に之を大觀するに、是れ決して國家幸福の瑞相にあらず。則ち天下相牽て、向の所謂嶮惡危難の地に、國歩を進むるの謂ひなり。若し然らば、其の未だ甚しからざるに及びて、宜しく之が方位を正し、之が進路を更め。徒に後人をして、智者ありと雖も、其後を能する能はざるの嘆を發せしむること勿るべし。是れ即ち今日に在て、先進誘導者の責任なり。

時事談 四

第四編

述懷論

余は元來一兵卒のみ、戈を負ひ銃を肩にして、戰場に向ふ時は、敢て人後に在るべ

しとも覺えず。されど政を議し文を講ずるは、嘗て學ひし事もなく、又其器にもあらず。然るに前編に載する所の國勢因果論てふものは、全く一部の政治書に異ならず。抑も是れ何の經歷及び文學に由りて然るか。其然る所以の者は、今日に至りて、余と雖も自から怪しむ所なり。回顧するに、余か此の世の中に生れ出しより、第一吾か心に感銘せしは神佛の威徳なり。第二には、人生の薄福。第三には、皇國の尊嚴。第四には、尊皇の大義是なり。而して是等吾か心に感銘せし事柄は、おのづと性情となりて、知らず識らず發達し。其齡二十歳の頃は、取集めて工夫觀察すること、はなりぬ。其第一の心よりして、天地間の不思議を發明せんと念ひ。其第二の心よりして、人類相互の造業より致す所の禍害を除きて、天與の福分を享受せんと念ひ。其第三の心よりして、何とかして、我皇國の危難を救ひて、無窮の獨立を保たんと念ひ。其第四の心よりして、君民の大義名分を正して、人類無上の果報を全うせんと念ひ。此四心は、余か胸中の一塊となりて。常に憂あるか如く、失ふ所あるか如く、不平不満あるか如く、時に發憤し時に鬱滯して、夢寐に懷に忘るゝ事能はさりき。願ふに此の性情か、早晚となく發達

して、遂に國勢因果論を著すに至りし事と思はる。

國勢因果論を著し、より以來は、國事上に一定の見識ありて、竊に自任し。時を計り分に應じて、國家の禍源となるべきものを觀察し。徐々に其の根本を退治すべしと心に期せり。乃ち明治八年は、初めて元老院大審院の創設ありし年に、余は時に元老院の議官に任せらる。次の國勢因果論は此時の著なり。此年の冬、又も朝鮮の事件

差し起りて、此度は必らず開戦となるべき程の有様なりき。余は中將に進み、大輔を兼任す。其の九年は、前原一誠等の反亂あり。其の十年は、鹿兒島私學校黨の大亂あり。此際余は、當時目前に生ずる國難に、微力を致しつゝありて。私心竊かに西南の事件を以て、存亡の機とし、第二の維新とし。此一件の落着せざる間は、假令如何なる事をなすとも、水上の泡の如く、勞して功なしと思惟せり。故に八年より十一年迄、殆ど滿三年の間は、口を開きて國事の是非を言はず。乃ち以爲らく、幸に天皇陛下の盛徳明威に頼りて、平定に至らば。其時こそ畢生の力を盡し、先輩に忠告して、從來の惡習を一洗し。眞誠に天下の臣民舉て、皇恩に沐浴するやうに致すべけれど、一向内心に決定す。故に其の十年の役の如きは、余

は神佛に祈願し、心身を投じ、肝膽を摧き、余が能力の及はざる所を盡し。天下の功を二分して。其一を保つべしとまで、竊かに自任せり。當時又以爲らく、平定の後、我言の用ひられん事を期する時は、種々の事情の爲に、此大事を誤るべし。及かず陛下の爲に、忠義を致すは、今日限りと覺悟し。只剛正を持して、此大任に當り。決して他の猜忌媚嫉をも、顧みる勿らんにはと。故に此の争亂の平定するに及ては、病を以て退職の意を申し、其儘京攝間に身を養ふことゝなしぬ。然れども朝恩寛大、其の不敬を宥されて、其情願は容れられず。宜しく春暖を俟て歸京すべしとの恩命に由り。即ち十一年二月の下旬を以て歸京し、征伐事務の落着を復命せり。

歸京の後、余は竊に意見を進めんと計りしに。果せる哉、新に戦勝の威を加へ、天下の事復憂ふべき事なき有様なれば。余が説の行はるべきにあらず。一層厳しく檢束して、政府の威權を立つるの時期に投せしが故に。余は遂に事の成らざるを知り、決然退ひて、先志を全うせんと欲し、再び退職の義を請願せり。是即ち王法論を著はして、余が微志を天下に告ぐる事となりし所以の來歴なり。故

に王法論は、其の十一年の起稿にして、十三年春を以て脱稿せり。是れ政論上に於ける余か著述の第二にして、第一は國勢因、果論を云ふ。世間に發表せる第一の書なり。抑も余か退職の意を決せしは、故内務卿大久保氏の遭難前に在りて。其意を僚友に托し、京攝旅行の暇を得て、五月下旬に東京を發す。其七月近衛兵暴擧の事あり、延て陸軍部内に紛議を生ず。余は猶參謀部長の職にあるを以て、屢々歸京の命を受け、遂に上諭をも蒙ることゝなり。病を忍び情を忍びて、同年十月の下旬に歸京し。職務に従事すること暫時にして、其紛議の事件を落着す。時に岩倉故右府公、竊に余を招き、懇勸に問て曰く、足下當時の國事に就て、意見ありと聞く。余願はくは之を聞かん。意ふに吾等今日陛下を奉じて、此の武藏野の原に來り、斯る有様にて有らんことは、臣子の分、誠に安ぜざる所なり。今日いかにしても國政を整理し、國民を安集して、陛下無窮の大業を、目出度成就せずんは有るべからず。足下良謀あらば、腹心を披て之を告げよ。若し余か意に合せは、決して之を等閑に付せずと。余か曰く、天下を治めんと欲せば、先づ政府みづからを治むべし。政府みづからを治めて、而して天下治まらざれば。其の治まらざる所

以を察し、一々其情を得て之を治む。是れ天下を治むるの術なり。竊に今日政府の有様を察するに、恰も正體なき人のみづから煩悶苦痛するが如し。天下は元來無事なるも、其禍は常に蕭牆の中に起れり。抑も古昔王政の世は勿論、縱令徳川氏の政を爲す時と雖も、みづから之が體裁を具へ、決して今日の人ありて任なく、任ありて責なきが如きにあらず。然るに方今の識者を以て稱せらるゝもの、動もすれば輒ち東洋專制政治の短所を説く。夫れ物は一利一害あり、其短所のみ論ずれば、おのづから短所もあるべし。然れども專制政治てふ者は、尤も精密なる政體にして、耳目鼻口四肢五體、悉く具足して、嚴然たる一大丈夫の如し。君臣共に、同時に狂亂するに非れば、未だ曾て天下を亂りし例無し。然るに今や此東洋先聖の法を用ひす。只時々の都合を以て、其制度を變換し、興廢常なし。然る所以の者は、將來西洋に倣ひて、立憲政と爲すか故に、其れ迄は萬事假設なりと云ふに在るべし。今東洋流は、用ふるに足らずとして、採用せず。西洋流は、容易に出來べきにあらずとして、採用せず。彼も取らず、此も守らず。只當路の人の、分別取捨に任せて行ふ時は、是全く人ありて制なく、權ありて、任なし。斯る無

法の事は、假令蠻夷の俗と雖も、土を保ち人を養ふ者の爲さざる所なり。況や天皇南面の位を正して、親しく政を知し、召す堂々たる帝國の政堂に於てをや。決して一日も、此儘に爲し置くべきにあらず。若し因循に過ぎ去りて、整理すると能はざれば、弊害百出して、國家の事亦爲すべからざるに至らん。公曰く、然らば則ち之を如何して可なる。余が曰く、是れ理を盡し、義を正して、之を治むれば、誠に易々たるのみ。抑も彼の西洋流と稱するは、立憲政の謂ひなるべし。願ふに立憲政の實は、民選議院を開き、立法を翼賛せしめ、國家經費の當否を謀議せしむるに過ぎず。一口に言はば、政治上要務の參贊人なり。此の參贊人に、國家を舉げて譲り渡すと云はば、吾が知る所に非ず。然らざれば、假令後々は西洋流に爲すとも、一國の政府は、一國の政府たるべき體裁を立て。彼の民選議院なきとも、國を保ち民を安んずるに足るの制を定めざるべからず。而して其上に立憲して、民選の議院を設け、西洋の長所を採らば、是實に雙美と謂ふべし。故に今日民選議院なきが故に、止むを得ず斯る有様なりとの口實を去て、速に朝廷不磨の大典を定め、以て守職の臣を正すに如かず。願ふに明治八年に於て、明かに

天下に詔ありて、元老院の設置あり。然るに當時の規模は、漸く失し。今日は、殆ど曠官間職の有様となれり。先づ宜く此の元老院の權限を擴め、以て議政府となし。人を選び員を限りて、大任に當らしめ。而して國家大小の事、悉く茲に審議し、詔勅律令を定むべし。又其中を部して、一部を彈正部となし、一部を會計検査部と爲し、一部を制度律令部となし。以て大政を理して、官吏放恣の弊を塞ぐべし。其の國家の大事を議する時は、必ず天皇親臨在らせられて、其の得失を聖聽し賜ふときは、政治の規模茲に定まり。彼の私門に出入して、天下の大事を謀議するの弊を除くに足る。則ち此の根本一たび立て、他は從て整理の緒に就くべしと。公曰く此議余も亦尙に之を思ふ。足下の知人にして、此議を拒む者は無きか。余が曰く、不肖近日力を盡し精を發して、此事に周旋す、大概異論なし。公曰く、然らば余みづから此事に任ずべし。議政の一部は、余みづから其任に當りて可なりと。余大に喜び、公を謝辭す。然るに此事成るに及びて、當時有力の政治家の爲に拒まる。余實に憤慨に堪へず、是より後は、亦力を國事に致すに心無し。是れ余が明治十一年間の實歴なり。

顧みるに余は元來軍人を以て出身せし者なり。故に王政維新已來、専ら軍事にのみ盡力して。此帝國の軍事を統一するに至らば、始めて王政維新の實効を見るべしと信じ。危險を犯し、誹謗の衝に方り、只管軍事の改正に従事せり。以爲く此軍事統一の後、は、武道を以て國民を教育し。天下の人民をして、悉く封建時代の武士の如き性質を具へしめ。以て外國の難に當り、我國家の獨立を全うすべしと。然るに何ぞ計らん、文明開化てふ風の吹廻はしにより、天下一般に騒ぎ立て。無二無三に、西洋流と稱し。一時に俗を破り、風を變じ、人心轉た浮薄に流れ。其の甚しきは、楠公を權助に比する者さへあるに至る。且政府上の方針も、おのづから此傾きありて、暫時の間に、士氣を挫折し。禮義廉耻地を拂ふの有様なれば、余は竊に之を憂へ。明治六年春夏の交、遂に一策を建て、之を西郷隆盛氏に説く。此策の同意者、今日猶三五人は存在せり。其説に曰く、嘗て聞く文武兩道は、車の兩輪の如しと。苟も此の地球上に國を建る以上は、無論偏廢すべからずと雖も。我國今日の有様は、其文武とも改造の運に在るなり。故に一時に兩道を進むる事は、國力に限りありて、出來難し。されば孰か我國の獨立を認むるに、速かに且確かなる一方

を撰び。力を此一方に盡して先國家の根本を固め置き。然る後餘力を伸して他の一方を進むるに及かず。今余が考案には文教は多少の年代を重ね、人心を開發し、智識徳行を琢磨して。一國の品位を進むるものなるが故に。今日斯る國勢の陵夷を挽回して、外國の覬覦を絶たんには。遠水近火の譬の如く、到底間に合はざるなり。故に今日の計は、斷然武政を布きて、天下柔弱輕佻の氣風を一變し。國家の獨立を全うする爲には、外國と一戰するの覺悟を取るを以て上計とす。是れ國を興すの早道なり。大凡古今内外の歴史に徴するに、人心惰弱に流れ、廉耻地を拂ひて、日々に衰勢に赴き。外は他國の侮を來し、内は愛國敵愾の氣を失ひて、危殆極る國家は。之を救ふに武政を以てするの外、決して他の術あることなし。今や文明開化と稱し、米を母とし、佛を父とし、妄に俗を移し、風を易へ、傲奢淫蕩、衣服を金玉にし、飲食を醇醴美肉にす、是れ皆弱士惰夫の國家を誤るものゝみ。されば今に及て、早く此大計を定め。以て國家の進路を改めざれば、後臍を噬むとも及ぶことなし。時機失ふべからず。之を決行するの時機は、大使歸朝前に在り。何となれば、大使歸朝の後には、おのづから大使一行の意見あり

て、必ず此策の反對に出づべし。若し然る時は、廟堂の大紛議となり。到底吾輩等の盡力を以て、遂げ得べき事に非ず。今此武政を立つるの方案は、先づ全國の租税を三分して、兎に角其二分を陸海軍に費す事と定め。而して已に士族の常職を解きしものを、従前に引戻し。全國の士族を配して、悉く六管鎮臺の直轄となし。嚴格の法律を立て、之を制裁し。丁年以上四五十歳迄の男子は、残らず常備豫備の兩軍に編すべし。而して一家に一人も現役に服すべき男子なき時は、情實を按し、或は年限を限り、其祿を没して除族し。又平民の武事を好む者は、其才藝器量を驗し、舉て士族と爲し。其同族の榮譽と、士氣とを失はざるやうに、訓導獎勵すべし。而して全國一般の平民は、屯田の法に倣ひ、處々に軍團を置き。男子の役に堪ふる者を、冬春の候に擧げて、悉く徵集訓練し。以て護國軍となし。全國男子の風教は、所謂武士道を以て陶冶すべし。而して政府は、不必用の官省を悉く廢し。質素儉約を旨として、甚しく言は、茅屋破壁の内に、公務を辨ずと云ふ有様に、痛く節減を加へ。其左右大臣中の一人は、必ず大將を以て之に任じ。親しく、天皇陛下の命を受けて、海陸の大權を收め。以て此武政を統一すべし。

此方略を行ふには、信賞必罰。政府に大權を握りて、他に假借することなく。國家根本の固定するまでは、決して退屈すべからずと云ふに在り。西郷氏曰く、貴説一々同意せり。併しながら大使歸朝の前に於て、之を執行することは、出来難し。何となれば、大使出發の際、大臣參議各、誓言して曰く、大使歸朝に至るまでは、止むこと能はざる事件の外は、決して改革するを得ずと。故に今此誓言に背きて、斯る大事を執行する時は、其過失を此方に引き、却て後害を招くに至ればなり。及かず大使歸朝の後を待て、堂々と此策を建て。若し異議あらば、其時斷然吾取て之を執行するにはと。余が曰く、然らば先生一身を以て、此事に任せらるゝや。大使歸朝の後に在ては、余輩の盡力は到底無益なり。只此方針一定せば、死力を出して従事すべしと。西郷氏曰く、僕みづから之を任せり、決して疑念すること勿れ。只此改革を遂げて、第一着には、必ず朝鮮を伐ずんばあるべからずと。余が曰く、此改革は随分大事件なり。之を整理するには、少くも一二年間の日子を費すべし。内政整理の上は、其は兎も角もなるべしと、相約して去る。其秋大使の一行、前後を隔て、悉く歸朝す。余は竊に此事の落着は如何、西郷氏

は如何なる手段を以て、内閣に發議すべきやと窺ふうち。其の十月病氣に因り、箱根の温泉に湯治す。然るに東京より、異變を報し來るに由り、急ぎ歸京せしに。最早事落着し、西郷氏は退職して、已に故國に立去りし後なりき。余は之を聞き、歎息して以て爲く、征韓の一問題を以て、閣議を争ひしは、氏の誤なりと。然れども今日より、當時の事情を追想するに。征韓を問題として、先づ目的を定め置き。其目的を以て、内政を改革するの密意に出しなるべし、是亦當時に取つての一策なり。余は此一改革にて、禍を轉じ福となし。當時の紛紜を一掃し、以て快活の氣を養ひ、閣議の災を除き。國家の大本を安立せん事を期せしに、萬事全く水泡に歸し。次て佐賀の反亂となり、臺灣の事件となり。支離滅裂、天下の事又爲すべからず。されども余は、猶王政維新の大業を、何とかして守護し奉り。上宸襟を安んじ、下蒼生の艱難、天下の危急を救ひたき志の止みがたく。遂に國勢因果論てふものを書して、竊かに吾志を遣り。是れよりは國政を平易になして、人心の鬱屈を伸へ。天下一般に、天皇の盛徳に沐浴するやうに盡力せんことを期せり。是れ十一年の結果を生ぜし所以にして、亦是れ一種の因果論と云ふべし。

余は萬法の不思議を感じて、之が眞際源底を發明せんと欲せしより。特に性理の説を好みて、之を工夫すること日夜に怠らず。終に人心の所變因果の理趣を見ること、火熱水潤を見るが如く、明かに信じて疑はず。是れ即ち國勢因果論を著述せし時の力量なり。爾後加々之が工夫を凝らし、講究を積み。内外の經典に正し、諸子百家の雜説に參して、遂に一家の學を成就し。古今内外に通じて、斯道理の誤らざるを決定し。更に立言せしものは、即ち王法論なり。其一卷十章は、天地の廣大を究めて、人心の奥妙に入り。疎にして漏さず、密にして幽ならず。百世聖人を俟ちて、決して吾言を疑はざるを知るなり。且此論を著す時に當ては、儒佛の學は泥土の如く。全く天下に棄てられて、一人の齒牙に掛くるものなく。西洋流の理窟は、稍々勞を得て、人心を支配する有様なるが故に。將來の世を觀見し、其の名を取て、之を正路に導き。以て翻譯的の學問より生ずる大害を塞がんと欲せり。故に理を性情に正し、義理を道德に歸して。法憲國家自主自由君權民權等の目を立て。一一之れが義理の歸着を示し、我國人をして、正當の觀念を保たしめんことを勉めたりき。抑も學問上道理の研窮は、普通人類に通

ずべく、東洋の道理、西洋の道理と、道理に東西の別あるべき道理はなし。只學者の觀察上に、得未得の分ありて。或は邪僻に流れ、正路を失するものあるに由り。種々の異説紛起して、勝劣を争ふと雖も。其眞實の道理は、道理として常に吾人の目前、事々物々の上に顯露して。曾て古今の異、東西の別あることなし。されば人類の上に立つる道理は、即ち人類の性情を土臺として。之が本末を分ち、之が關係得失等を説明せしものに外ならず。但其理窟の付け方は、彼れ學者の觀察思量に由りて、種々に分別せらるゝものなり。故に東洋學者の説にも、誤りあるべく。西洋學者の説にも、誤あるべし。今之が正邪を甄別せんと欲せば。現在目前に顯露せる此一物を押へて、分明に取り糺すの外、決して別に好工夫あることなし。乃ち余は余がみづから疑ふ所を、一一物に格し。自他内外、及び去來今の三際に照し。又古人の論説に參して、余が智能を盡し。以て立言せしものは、此の王法論一卷なり。余が不文を顧みず、世事紛雜の中に於て、斯る迂濶の事業を企てしは、又茲に一の觀念あり。蓋し人生の常態として、意氣相張り。上下みづから得意の時は、人々知らず識らず帝の則に従ひて。生を遂げ、情を慰する

と雖も。今日我國の有様の如きは、内外上下相窒塞して、且くも物情を神ぶること能はざるなり。故に人心に鬱滯して、種々の妄念を生じ。何かよき道理もあらば、之を主張して、一時の憤を遣り、意を達せんと欲するは、自然の數なり。されば此際に、如何程盡力するとも。大體の落着を立て、道理の歸着を明にし、以て力を國家に致すに非ざれば。世は時と處によりて、勝手々々の意地を主張し、以て道理となし。其極は人生の大害を生ずるに至るべし。今夫れ婢僕相集りて、厨下に一大口論を生ず。必ず條理を解き、是非を辨じ、各々理を執て相屈せず。言論往復の後、其一方の理路窮する時、即ち敗北となり。不滿ながら他に屈從す。されば人類の常態は、みづから道理と信ずれば、他に對して堂々と、我意を張るの力を生じ。其道理が、不道理と落着する時、早晩となく、其我意も去りて、平易の情に復するものなり。而して此反應には、吾れ道理なりと信ずることを、他より壓制せらるゝ時は、匹夫匹婦も、大に憤懣を生じ。其甚しきは、身命をも忘れ、相抗するものに至る。是れ余が、此の人類の國を爲す所以の普通の道理を正して、之れを天下に告げ。其の上下の觀念を、正當に治め。以て國家太平の一助とな

さんと欲せし所以なり。

余は専ら東洋の道學を研窮し、古昔聖賢の發明して、後世に傳へしものに、力を得ること尤も多く。就中人類の上に現はるゝ都ての關係を、悉く道德の範圍に收めたるは、余が深く信じて疑はざる所なり。今其大要を言はゞ、人の禽獸に異なる所以の者は、人の道德の、禽獸に異なる所以のものあればなり。若し人にして、人たる道德なきときは、此人たるものは、全く動物の一種として、禽獸と異なる所なく。只其の形體の聊か相違あるは、是れ則ち馬牛犬豕の相違ある者と、其の比例を同うするのみ。決して之を以て、禽獸の類を脱して、人間と稱することを得ざるなり。夫れ禽獸の道は、弱肉強食を以て、當然となす。假令人々相食み相犯して、父子夫婦の倫なきも。之れを不是とし、無道として、論ずべき原則あることなく。乃ち獸奔禽逸、作すが儘、成るが儘を以て、道理となすの外なし。是故に人は、必ず人の道德ありて、始めて人となし。此の道德を土臺として、是非も生じ、善惡も生ずるが故に。人間に現はるゝ一切の關係は、舉て此道德の範圍を以て差排すべしと、決定せる一大事は、是れなり。

人類の道德を研究するには、其の目的を眞實に定めざれば、理非顛倒して、實に人類の大害となるのみならず、自己一分にも通ぜざる非法の意思を生ずるなり。蓋し人類の道德は、人類其物の道德にして、決して人類外より求め來るべきものに非ず。又天地よりも君父よりも命ぜられて、此事あるに非ず。全く人々の心に存して、且くも離るべからず。所謂離るべきは、人の道德に非ざるなり。されば人類の道德は、人類に限りて、其性情に存するなり。故に此の性情の正しきを撰びて、道德の原則となし。一切の關係を差排し。自他共に此性情を遂ぐる様に擴むるを以て、道德の範圍とす。其の性情とは、性は、靜にして變ぜざるを云ひ。情は、動きて物に應ずると云ふ。即ち喜怒哀樂愛惡欲等なり。而して此情は、如何に變化するも、人心の根性は、決して變ずることなく。智愚賢不肖老幼婦女均しく、人心の大體を具するを性と云ふ。一口に言はば、一心の體用を分て、性情の二つに説くものなり。人あり説を作して曰く、人心性情の正を以て、道德の原則となす時は、惡意惡心も、性情の一なるべし。何となれば、是れ正に非ずとして、取除くべき所以を知らずと。是論は、向の所謂成るが儘になすの説なり。

譬へば、身に病を生ずる時。是れ病に非ず、吾身の用なりと云はば、其身を喪ふが如く。今人心の情失より、心病を生ずる時。是れ性情の一なりと云ひて正さば、れば、則ち必ず人心を喪ふ。人心を喪へば、無論人類の道德は、壞るゝことゝ知るべし。元來成るが儘の論を立つるには、決して學問も、工夫も、研究も、致すに及ばず。道德不道德、敢て論ずる限に非ず。只出た儘に打捨置きて、其儘を道理とすれば、其れにて事足るべし。されば、理非を分ち、道不道を論ずるは、此の眼前に在るが儘出た儘に就て、本末を立て、是非利害を分別して、身心を修め、國家を治め、以て人の人たる所以の道を盡さんと欲してなり。假令一心に現はるればとて、夢は夢なり、現は現なり。夢も現も、一樣に思ひなして、人に對し、世に向ひて、公事口論を言ひ張るは、狂亂の人と云ふべし。斯く言はば、或者の如きは、狂亂も亦人の性情なりと云ふなるべし。此等は論外の沙汰として、捨置て可なり。而して今茲に情失と斷定すべき、彼の惡意惡心は、果して如何なるかを研究するに、其根原、全く七情中の欲情より生起するものなり。而して此欲情が熾になる時、此物が一心の主となりて、他の喜怒哀樂愛惡等を使ふ事となる。斯る變

態を以て性情の正とする時は。欲が人類の性情なり、欲が人類道德の原則なりと云ふに一決すべし。此の一決は、則ち彼の禽獸道の原則と異なる所なく。即ち人間を破滅するの道なり。管に人間を破滅するのみならず。人類の性情を破滅するの立論なり。道理に於て、且くも許すべからざる妄説なり。何となれば、人心發情の一端、即ち七つあるもの、其の一を以て、一心の主と定め。他は悉く之が奴僕なり、従者なりと云はゞ。恰も眼耳鼻舌の中に就て、舌が一身の主宰にして。其の眼耳鼻は、臣僕なり、家來なりと云ふが如し。天地は處を易へ、日月は西より出るの時あるも。斯る道理は、決して立たざるなり。是故に人心性情の有様を觀見して、道德の原則を立つるには。みづから自己を省察し、又人々の上に照して、人心の極致を盡し。自他平等に有する性に復して、情を治むるを本とすべし。決して七情の一端を擧げて、理屈押しに押し付け、以て眞實々際の徳を壞ること無かるべし。且つ人類の實に禽獸に異なる所以は、悲智の二徳を具ふるに在り。悲とは、悲み憐れむ心を云ふ。智とは、善惡邪正利害得失を知り、己を知り他を知り、過去現在未來を知りて、因縁の順逆を明むるを云ふなり。此の

悲智の二徳は、人類平等に具足して、決して其性を貳せず。只其智の狭き、悲の卑きは有るべし。故に教育を施して、此の悲智を十分に進むるを。文明開化の事業となす。

人類性情の正は、悲智の二徳に過るものなし。故に人は人なり、心は人心なり。此人心に、悲智の二徳を具へ、みづから主となりて、喜怒哀樂愛惡欲を生起する故に。人類相應の法は、決して欲と欲との相應に非ずして。全然人心の相應なり、即ち悲智二徳の相應なり。喜怒哀樂愛惡欲の七情の相應なり。此の相應が、一切に相應して、悻らざるを、道德と云ふ。一身に在りては、一身に相應し。一家に在りては、一家に相應し。一國に在りては、一國に相應し。親疎内外種々の差別に相應して、自他の性情を害せざるを、道德と云ふ。若し相應せざれば、一身に就ては、一身を害し。一家に就ては、一家を破り。一國に就ては、一國を亡ぼす。一身一家一國を破滅するは、即ち人類を亡滅するものなり。是故に人類性情の正を持して、徳を保ち、其徳の上に顯はるゝものを、人間と名づく。即ち家あり、國あり、五倫五常ありて、整然として、紊れざる、之を文明と云ひ、開化と云ふ。政治法律

風俗習慣悉く此道德の範圍内に非ざるはなし。何ぞや、此數者は、悉く人類の性情より現はるゝ人類の關係なればなり。但殖産興業財務等の如き、人と人との間に生ぜざる問題は、又其關係事物の性情を審にし、以て之が利害得失を論究すべし。然りと雖も、之が爲に、人の性情を紊り、道德に悖るとは、之を節し之を儉して、用捨する所なからざるへからず。所謂利用厚生の道は、人欲に順するが故に。人を利せんと欲して、却て人を害し。己を利せんと欲して、己を害するとあればなり。余は此の道德の理を信して、一念疑はず。故に王法論は、此の道德を人間の土臺として、立論せしものなり。若し此の土臺にして破滅すれば、其儘禽獸の一類にして、無論君民父子等の倫は、無きものと觀念せり。人類の道德は、人類の性情を以て顯はるゝとは、前段已に之を論述す。而して人類の理想を正當に導くが爲に、又茲に學問上の問題として、研究すべきは、天地の道理、即ち眞理を明らかにすること是なり。此の天地の道理、即ち眞理とは、即ち天地間の現象を總括し、人類は勿論、禽獸、蟲、魚より、草木、水土の如き、凡そ天地間にありとあらゆる一切を引くるめて、之が法則を發明し、以て自然天然の道理を決

定するを云ふなり。此道理の研究に就ては、古來より種々の論説あれど。結局の落着は甚だ六ヶ敷問題にして、遂に自得とか自悟とか云ふとになりて。只聖賢の人にして、其眞際を實證すべしと云ふの外なし。併しながら、此道理の落着せざる所以は、種々困難なる因由ありと雖も、其主たる原因は、古今學者の心に生ずる最初の一念。尤も之が妨害となるなり。其故は、萬物を其の在りの儘に見て、工夫を下すこと能はず。又理を一理に歸して、是れ眞理なりと言はんと欲すればなり。此二様の觀念は、總ての學者が、天地の理を研究せんと欲する時。必ず先づ起る、自分勝手の注文なり。故に此注文を以て、恰も小兒が芭蕉の皮を剥きて、其心を尋ぬるが如く。在形を段々に拆きて、終に有とも無とも片付かぬ、微妙なる處へ、みづから己か觀念を押し込み。無に往けば、有に支へられ。有を取れば、又其有を邪魔になして。右に理を付け、左に説を付けて。みづから其心の落着するまで、捨り廻すと雖も。遂に最前の注文通りに、萬理を總括して、一理に歸すること能はず。されば西洋にても、古今の學者達が、幾萬となく、出代りて詮索するも、今に及て分明ならざる由なり。余は常に以爲く、萬物を一物として、

其眞理を知るに足らば。先づ萬物中の一物を究明するに及かず。其一物とは何ぞや、吾が此一心なり。此一心は萬物中の一物にして、萬物の總相手となるものなり。若し天地の間に、二種の眞理なきに於ては。一物の理が、一切萬物の理なり。故に一物を明らむる時、天地萬物の理を同時に明らむることを得べし。又萬理を一理にして、其の眞理を知るに足らば。則ち生死の理を明らむるに及かず。蓋し生死の理は一條なり、決して多岐あるにあらず。亦是手近き道理にして、目前に此事あり。又空無にして、眞理を知るに足らば。則ち虚空を明らめ見るべし。是れ何の仔細ぞ、是れ何の現象ぞと。余は故に知る觀面に明らむると能はざれば、一物となしても、明らむること能はず。一理となしても、明らむること能はず。空無になしても、明らむること能はざるは。天地の道理、即ち眞理なり。故に今日學者の、廣大らしく理窟を唱へ立つるも、悉く彼れと此れとの關係を解釋するまでにして。決して天地の眞理など、云ふことは、遠くして遠し。卑近に云はゞ、水が凍りて氷となり。風が吹て塵が起り。火を失して、火事となると云ふが如き、目の子勘定に過ぎず。されども日月星辰などの關係有様を推

測して云ふ時は、如何にも廣大無邊に聞え。又顯微鏡にて探がす如き物體の關係有様を推測して、説き立つるときは、如何にも微妙至極に聞え。天地萬物の大作用を臆測して、其の離合成壞の理を解けば、只、不思議の力と思はるゝなり。是れ皆一理あることなれど、天地の道理、杯とは申され難し。余は却て古今の學者達が種々の思慮分別を生ぜし其力量は、何れの處より來り、又何れの處に去り、今日は何れの處に窟宅せるかと、是のみ甚だ心配せらるゝとなり。みづから疑はずして、妄りに天地を疑ひ。みづから知らずして、妄りに萬物を知らんと欲す。意ふに天地萬物も、斯る亡魂に取り付かれたるは、迷惑の限りなるべし。此等の荒ましを會得して、西洋流の理窟も、大概に見こなすべし。然らざれば、種々の亡魂に誘はれて、都表もなき窟宅に墮在することあるべし。孟軻氏曰く、其の然る所以を知らずして然るものは、天なりと。此の天と云ふは、天然自然のことにして。此の天然自然の理を指して、天地の道理とは云ふなり。されば其の然る所以は、且く差し措き、只其の然るを見て、是れ天地の道理なりとし。以て人々の理想を、正當に保つべきこと、尤も肝要なり。火の熱き、水の濡ふ

四時の循環する、人獸の生死する、草木の榮枯する等を、大概に知見して。其上は人類の上に現はるゝ、道德を知らば、其れにて事足るべし。近來は人の智慧分別が、妄に動き出し。各々みづら其の然る所以の一分を思ひ付き、天然の法則と稱し。以て此の人間世に加へ。其の法則と思ふ定木に當てはめて、改革せんと欲す。是れ或は文學上の一進歩なるべしと雖も、之に附隨して生ずる大害は、亦た甚し。其は彼れ天然の法則と認むるものは、或る場合に現はるゝとにして。其の場合に在りては、法則とも立つべし。然れども其場合の同じからざる時は、當に法則と立たざるのみか。却て其法則に反對せる天然の法則あればなり。故に場合、或る事情に現はるゝ有様を、天則として。總ての場合、總ての事情を支配せんと欲する時は。是れ則ち大邪見と云ふ者にして、其人間を災害すると、魚を學びて水に入り。獸を學びて裸躰となるより、甚し。乃ち優勝劣敗の説の如く、苟も一國を爲し、人倫を保ち、人々の幸福を、平等に維持する場合に於ては、此説決して天則とも眞理とも立つべきものに非ず。看よ親子夫婦の間に、何の優勝劣敗、生存競争の道理がある。君民位を定め、法を制し、律を立て、一國の平和を保

つ。是れ何の優勝劣敗、生存競争の道理かある。若し優勝劣敗、生存競争を以て、天理とし、天則とし。一切に及ぼす時は、一家一國の道理は、全く天則に背き、天理に戻るが故に。一家一國を破滅して、天理天則に應ずるを當然となすべし。天地間人類の性法として、豈に斯理あらんや。故にかゝる説を以て、天理とし、天則として、人に教ふるときは。自然に人心に此の氣質を含み、動もすれば、人に打勝つを道理とするの我意を増長せしむ。又彼の人權自由説の如き、元來人はからくり人形に非ず。各一匹の人間として、みづから主となり、みづから善惡の業を造り、みづから其果報を受くべきは、當然なり。みづから主となりて、善惡の果報を受く。又みづから撰びて、道德に由るべきは、當然なり。假令君父の命と雖も、決して之を奪ふと能はず。之を奪へば、人類を滅却するのみ。故に曰く、天烝民を生ず、物あれば則あり、民の彝を秉る、斯の懿徳を好むと。然るに近時西洋より傳來の人權自由説の如きは、みづから己れに復することを知らず。徒に之を世法に求め、一切の因果を撥無して、自儘の意思を主張するを以て、自由の義と思ひ僻めるが如し。是亦方角違ひに、天理天則を推し及ぼすの害なり。余は嘗て此

事あらんことを恐れ、王法論の第四編に、自主自由の正義を解釋して、疊々數百言を重ぬ。抑も自主と云ふは、躰にして自由と云ふは用なり。放ち自主の躰具は、りて自由の用を生ずるものにして。決して其の躰の具足せざる自由の義あることなし。彼の童蒙の時の如く、學齡の期の如く、自主たるべき性を具ふるも。未だ其躰の満足せざる時は、從て自由の分も満足せず。其躰の成就する程に、自由の分成就して。茲に人たるべき一大義務を生ず。故に王法論に云ふ、諸の法は己を主として以て存す、故に自主と謂ふ、諸の法は己に由て以て生ず、故に自由と謂ふと。諸の法とは、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の倫、善惡、邪正の行、尊卑、禍福の果等を謂ふ。即ち此の數者は、盡く己ありて存する者にして、己れに由て生ず。其の己れに由て生ずるが故に、己に之が善惡、是非、去就を取捨するをも、自由と云ふのみ。故に又曰く、自主なるものは、身心の主にして、而して彼我の性法なり。自由なるものは、世間の義にして、而して自他の常情なりと。自主を以て、彼我の性法と云ひ。自由を以て、自他の常情と云ふ所以のものは、人我ともにみづから主たるが故に、相犯すと勿れ。自他ともにみづから由るが故に、相紊ること勿れ。

各々みづから性を盡し、情を盡して、天命を保つべし。是れ人の禽獸に異にして、天地萬物の靈たる所以なりと、反覆論明するものなり。是れ何ぞ今日國家國事の問題に、主張すべき道理ならんや。

余は十有餘年前、己に今日の如き天理、天則等の説の爲に、人心の理想を惑亂するとあるを憂ひ。爲に肺肝を傾け、一々之が義理を正し、以て天下に告げしと雖も、遂に其功を見ること能はず。却て當權家の猜忌する所と爲り。民權者流を以て、指目せらるゝに至れり。然れども明には天皇の照鑑あり、幽には神明の記識ありて。今日猶大義名分の大躰を失せず。此の完全なる立憲政の下に、臣民たるの職分を盡くすことを得るは、亦聊か吾志に報ゆるに足る。只余が今日悲むに堪へざるものは、王法論第三編、及び第七編の後半に於て論ぜし朋黨の弊、議員撰擧の害、是れなり。是れ當時人心の幾微を察し、萬一を憂へて論述せし者にして、只管國家を思ふの婆心に過ぎざりき。然るに其豫言遂に違はず、今や現實に此の有様を見るに至る。其の朋黨を論ずる文に曰く、

今ヤ則チ然ラズ、利ヲ同ウシテ朋ヲナシ。欲ヲ同ウシテ黨ヲナシ。朋黨比周

シテ其ノ言行ヲ紊リ其ノ道德ヲ捨テ徒ニ君民ノ權利律令ノ當否ヲ論シ以テ治國經世ノ要道ト爲ス。其ノ邦家ヲ誤ラザルハ蓋シ亦幸ナリ。夫レ人心ハ面ノ如シ好惡スル所ノモノ同ジカラズ。各々自ラ其ノ是トスル所ノモノヲ是トシ其ノ非トスル所ノモノヲ非トシ是非紛然トシテ歸宿スル所ナシ。況ヤ名利ノ心ヲ挾テ彼此相ヒ軋轢シ雄辯利口ヲ以テ其私ヲ濟スヲヤ。右論左説、鷄々擾々猶鬼畜ノ嘯集スルガ如ク。而シテ主義ノ同ジカラザル三親モ其和ヲ失ヒ。意見ノ合セザル九族モ仇讐ノ如シ。其ノ極ヤ一國ヲ擧テ爭論ノ府ト爲シ。一世ヲ擧テ博瞻ノ場ト爲ス。是ノ如クニシテ天下ノ安寧ヲ保テ國家ノ福祥ヲ致サント欲スルハ難イカナ。原文漢

其議員撰擧の害を論する文に曰く、
或ハ曰ク方今天下ノ人文猶ホ草昧ニ屬ス。率ネ皆ナ國ノ治亂政ノ得失ヲ以テコレヲ度外ニ措キ致テ喜戚ヲ其ノ心ニ加ヘズ。則チ曰ク天下自ラ其ノ入アリ吾ガ知ル所ニ非ルナリト。其ノ禍ヲ蒙リ害ヲ受ケ一家離散シ九族飢渴スルニ及テ猶ホ曰ク命ナリト。遂ニ亂臣賊子ノ鋒鏑ニ斃レ而シテ覺悟セザ

ル者滔々皆是レナリ。縱ヒ斯ノ民ヲシテ參政ノ職ニ任セシムルモ唯ダ賢ヲ推シ能ヲ進メ君德ヲ輔翼セザルノミナラス。必ズヤ右阿左顧依違雷同シテ動モスレハ輒チ奸猾ノ誤ル所ト爲ル。而シテ其ノ賢達ト稱スル者モ亦術ヲ以テ人心ヲ結ビ。名聞ヲ竊ミ私議ヲ納レ。利達ヲ謀ルニ過ギズ。其ノ世ヲ害シ政ヲ亂ルノ弊勝ケテ言フ可ンヤ。遊説スル者アリ、讒誣スル者アリ、蜚語スル者アリ、飛書スル者アリ、黨ヲ植テ相ヒ攻メ同朋相ヒ援ケ。其ノ究リ天下國家ヲ外ニスルニ至テ。而シテ利害顧ミズ得失問ハズ人事紛亂シテ猶ホ群盜ノ趙壁ヲ爭ヒ兇賊ノ莫耶ヲ弄スルガ如クナラン。此ノ如クニシテ猶天下ノ事理ニ應ズト爲サバ是レモ亦迂濶ノ論ノミ。曰ク若シ果シテ然ルモノアラバ是レ則チ一國ノ人民自ラ其ノ國ヲ亡ホスナリ。聖人位ニ在リト雖モ其レ之ヲ加何セン乎。原文漢

道理の觀念ハ能く人の意思を制し又能く人の意思を動かして、自省自覺、自作自立せしむるに尤も至大至強の力量あり。故に余か王法論の編述も假令今日に功なしと雖も必ず他年の後に功あるべし。所謂人多ければ天に勝ち、天定て人

に勝つの理なり。されば今其名分第一の冒頭に立言せし天地平等萬物一躰の語を解釋して、句讀の一助となし、以て此道を修むる人の爲めに、彼の邪觀を塞ぐの一端に供ふべし。夫れ平等とは、差別に對して立つる所の語なり。一躰とは萬物の別躰上を觀見して、平等の理性を證する所の語なり。故に曰く、是れ吾が平等の法身なりと。此身と云ふは、躰を云ふなり。故に法身とは、猶ほ理躰と云ふが如し。此の道理は、本論に於て、十分説明しあれば、今は單に平等の義を解すべし。抑も平等とは、差別に對する名なり。故に決して差別を破滅する語にはあらず。乃ち吾が一身は、平等なりと云ふ時。其差別の相即ち眼耳鼻舌四支五躰を潰ぶして、平等を立るに非ず。其の差別は、差別の儘にして、其の上に平等の理あるを云ふなり。元來天地萬物其の物々の上に、千差萬別の現象あるが故に、差別の名あり。若し始めより一切事物に差別の相なければ、平等と云ふことも、不平等と云ふことも、畢竟立たぬ義なり。又平等と云ふ語は、或る差別の上を、此の方より無差別に視る時に遣ふ語なり。譬へば親の諸子を視るが如く、其の慈愛に於て、無差別なるが故に、諸子を平等に慈愛すると云ふを得る。何れにし

ても、差別を其儘にして、平等の義ありと知るべし。猶ほ親の慈愛は平等にして、兄弟姉妹は、其の儘に差別するが如し。嘗て論者ありて、此の名分篇中の語に、均く是れ人なり、豈に君民の別、尊卑の等ありて、以て其名分を異にせんやと云ふを取て、之を解釋して曰く、是れ平等を原則に立つるものなりと云へり。是れ甚だ不當の解なり。此の論者は、王法論一卷の立論を解すること能はず。都て前後の文を外したる説のみ多し。抑も均く是れ人なりとは、同じ人類なりと云ふ語なり。是れ平等の理を説くものに非ず、只當然を云ふなり。次に同じ人類と云へば、君民尊卑の名も別も無かるべきに、其の有る所以は、則ち人類の道德であると云ふ文意なり。之れを反覆して云へば、人の人たる道德がなければ、君民もなく、父子もなく、其の儘禽獸であると云ふ意なり。此れ決して平等の理を説きしものに非ず。又差別の理を説きしものにも非ず。若し此處に平等の理を立つれば、君民父子ともに同じ人なり、故に人情は同一なり。故に君民父子の差別を以て、人情を紊るは、甚だ悪しきことなりと云ふを得べし。元來此の名分一篇の立論が、平等にして差別、差別にして平等、此の道理が名分なり、道德なりと云

ふに外ならず。されば平等差別と云ふことは、實に大切此上なきことにして、此理此心なければ、決して人間と云ふべからず。即ち禽獸の類と云ふべきのみ。當今西洋より到來せる平等論は、大概差別を破滅することに用ひる様なれども。是れは惡平等と名けて、目も鼻も潰すととなる。蓋し差別の理を破るは、猶平等の理を破るが如し。全く一種の邪説なり。因果を撥無して倫理をも破滅するに至る恐るべし。

時事談終

時事談跋

これの時事談はわが師の君の時事に感じて談じたまひしふみなり。そもく、今の勢は古にいはゆる天柱折け地維缺ぐるのありさまにて、凡そ國家の上にあらはれたる道は、政事なり文學なり宗教なり道德なり、皆毀ひ傷られざる物なし。かゝる

時機に感じて、談じたまひし言の葉なれば、政事文學宗教道德などの治具を悉くそなへて、遺すところなきぞ。うべもく、理なりける。余は曾て人の心のうつろひ易はり亂れあらぶるありさまを、寫眞鏡にて寫し取らんわざのなりもせば、いみじうすさまじき姿ぞあらはれいでんと思ひたりしが、今此の書をうけて讀むに、是れなん明治よりこのかた、うつろひ易はり亂れあらぶる我が國のありさまを、いとく、さやかに寫し出でたる寫眞にはありける。古の人言へることあり。それ人水を鏡とせば、面の容を見ん。人を鏡とせば、事の吉凶を知らんと。あれ世の政事文學宗教道德などに従事せん人たちよ。此の時事談を鏡として、おのが手もとを照らし看ば、なすわざのよしやあしやは、いと明らかに知られなん。殊に國勢因果論のとき

は、長く明治の歴史となり。後世の龜鑑として。かの天柱地維を
たすけ補はんたづきともなるべき節の多ければ。それが嬉しさ
の餘りにかくなん。

明治廿四年六月

門人 川合清丸誌

玉椿のはし書

此の書は。過る廿八年の夏。余伊豆山莊に避暑せし頃。徒然のあ
まり。書付け侍りしを。大道社の何某が持ち行きて。其の叢誌に
掲載せしものなり。近日病間に其を思ひ出で。其の草稿を川
合子に求め得て。また窃かに點檢するに。固より一時の心遣り
に。書捨てし言草なれば。熟あり未熟あり。就中蛇足とも見ゆる
は。削り去り。更に活字版に付し。故舊門人の間に撒きちらし。歲
暮年始の音問に代ふ。實朝公の歌に。

千早振伊豆のお山の玉椿。八千代ふるとも色はかはらじ。
これに因みて。書の名とはなしぬ。

八千代經て色もかはらぬ玉椿。我が大君の御世に咲くべき。
明治甲辰と云ふ年の十二月。誕生を祝ふ日に。熱海の釣月庵に

しるす。

不識道人

玉椿

第二段

人生れて而して後に吾が身あるを知る、父母あるを知る、世界あるを知る、天地萬物あるを知る、恰も頓に一鏡面を開くが如し。乃ち吾が身を主として、物に對し吾が心を主として、愛憎是非の見を起す。夜となく晝となく、違順の二境に、出入往來して、須臾も休息の時なし。先聖之を悲み、爲に法を説き道を教へ。其顛倒の情を救ひ、以て本性に復らしむ。論に曰、法衆生心。經に曰、衆生之心猶如大地。と。隱顯起滅すること、波浪の如く、泡沫の如く、雲霧の如く、是ぞと取止むべきものなきも、此の衆生心の外に一法なし。されば此の起滅を見る、此の隱顯を見る、正しく是の心を見るなり。吾が身あるを知る、父母あるを知る、世界あるを知る、天地萬物あるを知る、正しく是の心の光明なり。是の心の光影なり。此の自心の光影に轉ぜらるゝが爲に、顛倒の情を生ず。乃ち是の心、是の光明と共に通徹して、

第二段

自身他身自界他界を照破し。隱顯なく、起滅なく、能照なく、所照なく、洞然として一異なき、之を見性と名く。雪竇曾て南泉一株花を頌して、此の間の消息を通ず。聞見覺知非一一山河不在鏡中。觀霜天月落、夜將半、誰共澄潭照影寒。或人教禪の別を問ふ。吾之に答て曰く、教はいろはにほへと也。禪も、いろはにほへと也。但教は、色は匂へど、説く。禪は、一寸先は闇の夜、論語讀の論語知らず、針の目ぞから天規く、二階から目藥佛の顔も三度、下手の長談義、等と説く。是れその異なる所以なり。

いろはたとへ

(い)一寸先は闇の夜。(ろ)論語讀の論語知らず。(は)針の目ぞから天規く。(に)二階から目藥。(ほ)佛の顔も三度。(へ)下手の長談義。(と)豆腐に鏡。(ち)塵も積れば山となる。(り)論言汗の如し。(ぬ)糠に釘。(る)類を以て集る。(を)鬼も十八蛇も七つ。(わ)笑ふ門には福來る。(か)蛙のつらに水。(よ)夜目遠目傘の中。(た)立て板に水。(れ)稲木で腹を切る。(そ)袖の振合も他生の縁。(つ)月夜に釜を抜く。(ね)猫に小判。(な)なす時の閻魔顔。(ら)來年の事を言へば鬼が笑ふ。(む)馬の耳に風。(う)氏より

第三段

育ち。(る)鯛の頭も信仰から。(の)鑿といへば槌。(ち)負ふた子に教へられて淺瀬を渡る。(く)臭い物に蠅がたかる。(や)闇夜に鐵砲。(ま)譯かぬ種ははえぬ。(け)藝は身を助ける。(ふ)武士は喰ねど高楊枝。(こ)これに懲りよ道齋坊。(え)椽の下の舞。(て)寺から里へ。(あ)足もとから鳥がたつ。(さ)竿の先の鈴。(き)鬼神に横道なし。(ゆ)幽靈の滾風。(め)目くらの垣覗き。(み)身は身て通る。(し)しはん坊の柿のさね。(え)縁と月日。(ひ)瓢たんから駒が出る。(も)餅は餅屋。(せ)栴檀は二葉より香ばし。(す)雀百までをどり忘れぬ。是れ吾が兒童たりし時、歌留多にて教をうけしもの。

吾曾て禪林消息なる一書を著はし、自から一偈を題して曰く。瓦礫放光無佛處、真金失色瞎驢邊、爲君更下一隻手、前後三々載鐵船、或人之が解をなして曰く。瓦礫放光無佛處とは、烏なき里の蝙蝠と云ふ意也。真金失色瞎驢邊とは、猫に小判と云ふ意也。吾此の解を、いかにもをかしく覺えて、適々或禪師と對話の次で、此事を語り出で。世の聰明利智の人は、妙に道理を説く者なり、と云ひて笑ひければ。其の禪師眞面目になり、いかにも宗意を得たりと云ふ。吾此の應答に、興

第四段

味も醒て、兎角の言葉なし。餘りに淺ましければ。且くありて、雪竇の頰古に、師願、左右云、這裏還有祖師麼、自云、有、喚來、與老僧洗脚と。是れ烏なき里の蝙蝠にや。斯ては中々に、佛心宗單傳の旨とも覺え侍らずと云へば。禪師も詞なく、不興氣に出て去れり。此の頃其の例し思ひ出で。

雲門云、藥病相治、盡大地是藥、那箇是自己。

得庵代語曰、鬼も十八蛇も七つ。又下一轉語曰、猫に小判。

雲門曰、十五日已前不問、汝十五日已後、道將一句來、自代云、日日是好日、得庵別曰、七顛八倒、又下一轉語曰、佛の顔も三度。

雲門以拄杖示衆云、拄杖子化爲龍、吞却乾坤了也、山河大地、甚處得來、得庵著語云、枯木て腹を切る。

雲門示衆云、古佛與露柱相交、是第幾機、自代云、南山起雲、北山下雨、得庵別曰、袖の振合も他生の縁、又下一轉語云、鑿と言へば槌。

禪家の常談に云く、佛法と世間と別異なし。法は法位に住して、柳は本來緑なり、花は本來紅なり。塵々圓成、箇々放光、長者長法身、短者短法身、面前背後一切の法、

法として如ならざるなく。咳唾掉臂も亦是れ此の神通解脱門なりと。吾敢て此の言を不是とは言はず。されど一向箇様に説き去ることは、金口の所得已に善を盡し美を盡す。乃教者の所談も亦皆之を極則とせり。只彼教者は、禪者の如く、崑崙に棗を呑み、大口を打開て放言せざるのみ。雲門云、藥病相治、盡大地是藥、那箇是自己と。夫れ生死は病なり、涅槃は藥なり。煩惱は病なり、菩提は藥なり。衆生は病なり、佛は藥なり。是藥病相對の謂なり。しかるに涅槃病は、生死藥之を救ふ。菩提病は、煩惱藥之を救ふ。佛病は、衆生藥之を救ふ。是を以て藥病相治、則盡大地是藥なり。他の雲門、此の盡大地を撮來り、之を汝の面前に抛向す。而して此の藥を受くる者は何物ぞと、推問するなり。此の古則を、須仔細に吟味すべし。法は法位に住するも藥なり。柳は綠花は紅も藥なり。圓成も藥。放光も藥。長短も藥。法身も藥。肉身も藥。神通解脱。盡く是藥にして、自己にあらず。所以に云く、那箇是自己と。此の一句に參徹して、須大口を開くべし。古人道ふ、參得一句透、千句萬句一時透と。蓋し此等の句を云ふなり。文殊一日、今善財去採藥、曰、不是藥者採將來、善財徧採、無不是藥、却來白雲、無不是藥者、文殊曰、

第五段

是藥者、採將來、善財乃拈一枝草、度與文殊、文殊提起、示衆曰、此藥亦能殺人、亦能活人と。吾今殺活の機を、怪まず。但徧く採將來るに、是藥ならざるなきを疑ふ。百丈云、一切語言文字、俱皆宛轉歸自己、雲門云、拄杖子是浪、許汝七縱八橫、盡大地是浪、徧頭出頭、沒得庵云、我今日猶病、恁麼道理、君問之、拄杖子、瞎。俳諧師芭蕉翁は、參禪見性の人なり。其の投機の句に云く、古池や蛙飛こむ水の音と。正しく手應あり、只未力量の足らざるを見る。其の最後の句は、更に奇特の所あり。木曾殿と背中合せの寒さかな。參禪見性は、此の境界に透徹して、始めて他の點檢を免るゝを得べし。吾曾て翁の肖像に賛して曰く、浮て居る蛙のつらの憎さかな。芭蕉翁の俳句は、都て那の一機を受用す。故に脱然として、句々悉く常流を超ゆ。此の者流に在りては、古今第一等の人なり。蚤虱馬の尿する枕もと。

夏草や兵者ともが夢の跡。

無残やな甲の下のきりくす。

初時雨猿も小籠をほしげなり。

荒海や佐渡に横たふ天の川。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。

吟誦し去れば、玄妙言ふべからず。觸處に身を現じ、句々骨に徹し髓に透る。復
一點の塵想を著けず。辨道の眼英靈の資ありて、曾て此の道に辛苦し盡すにあ
らずむば、焉ぞ能く茲に至らむ。吾從來此の趣味を愛し、時に臨み一句すること
あり。然れども遂に脱洒ならず。

第六段

面白きものは、天地のなりかたち。笑しきものは、吾が身の影法師。悲しきもの
は、生死の境。哀れなるものは、後世知らぬ人。偽りなきものは、花鳥。すが
しきものは、露。騒がしきものは、戀猫。甲斐なきものは、思ひ。尊げなるものは、
僧の讀經。兎にも角にも有がたきものは、神佛なり。
其の始をなすは神なり、其の終をなすは人なり。其の始を知り、其の終を知りて、

第七段

之が教を垂るゝは佛なり。夫れ一心は、天地の始にして。父祖は、人の始なり。
神明此の間に在し、精靈長に之に寓す。統を垂れ身を分ち、萬歳萬々歳、猶今日に
異ならず。人たるもの、其の徳を損せず、其の形を毀はず、一器の水を、一器に傳へ
て謬らざる、之を道と云ふ。されば人道の外に、佛道なし。隨縁應機、世諦流布す。
只是れ此の事の爲なり。徒に様をなし、摸をなし、世間の卑俗に雷同し、以て無礙
自在と稱す。如是は、悉く外魔の眷屬のみ。

第八段

歐學は智に似て、頗無智なる所あり。所謂真理を論究すると稱し、或る極端の觀
念を以て、事物の現象を揣摩し、其の一分の理を擴充し、以て異見を出すを能事と
す。元來天地の間に、真理なるもの有るべき筈なし。又非真理なるもの、有るべ
き筈なし。真理非真理、俱に論究すべきものなく。而して古往今來、之を論究證
索して、互に偏辟の見を立つるは、畢竟人間の一大不覺なり。之を一大無明と名
く。先聖之を悲しみ、爲に法を説て。之が迷妄を破り、之が智見を開發す。曰く、
説法不有、又不無、以因縁故、諸法生、無我無造、無受者、善惡之業亦不亡と。夫れ法は
不可説なり、眞實無妄にして、一切衆生の妄想に同ぜず。乃、水は水にして眞實、火

第九段

は火にして眞實、天地萬物は、天地萬物にして。其の儘眞實なり、無妄なり。此の眞實無妄に相違して、思量分別し、言論作業を起す、之を非法と名く。此の非法を正すが爲に、止むを得ず、不可説の法を説く。故に曰く、法すら猶捨つべし。何ぞ況や非法をやと。されば法非法、眞實不眞實畢竟して言はゞ、俱に思量分別の影事のみ。若夫れ心境相應して、函蓋の合するが如く、中間一點の影事なければ、居然として此の事を辨ずべし。然らざれば、假令天を翔り地を潜り、幽顯の二界に出入し、恒河沙數の思慮分別を逞うするも、所謂夢中の有無。迷中の是非のみ。只に自他心身の禍害を招き、人間世界の惡果報を増長するに過ぎず。何某の博士と云ふ人あり、説を作して曰く、因果の理は、只自然界にのみ存す。佛法の所謂善因善果、惡因惡果の説は、虛妄なり。其の故云何となれば、善惡の差別は、人間道德上の談なり。人間道德上の談は、人間交際の都合により、人爲を以て規定せらる。是故に、古今其の時を異にし、彼此其の國土を同うせざれば、其の善と稱する所のもの、善にあらず。其の惡と名くる所のもの、惡にあらず。善惡其の道を異にし、禍福其の分を同うせず。斯る不實不定のものにして、豈に生を變

じ死を易へて、因果一定の天則あらむやと。願ふに此の人は、道德の名を聞知して、未だ曾て道德を講究せざるなるべし。今此の人の爲に、道德の體用を説明し、以て開發省悟せしむるは容易ならず。只姑く其の所論に對して、善惡の本因を明かにせむ。

抑、善惡を差別するは、人爲にあらず。即ち人の通性なり。其の善事惡事を指定するは、或は時所に由り、或は文野に由り、或は智愚に由りて、畫一ならず。然れども古往今來、國土の内外を問はず、其人の文野を問はず、苟も人間の形體を具足して、此の天地間に生存するものは、悉く善の善たる、惡の惡たるを識別せざるは無し。例へば苦樂の如し、又淨穢の如し。乃ち苦を苦とし、樂を樂とするは、人々必しも、其の時所事物を同一にせず。其の時所事物を同一にせざるが爲に、苦樂は人爲なり、虛妄なりと言ふべからず。其の淨穢の義も、亦同じ。王侯の淨穢と、乞食非人の淨穢と、聖賢の苦樂と、匹夫匹婦の苦樂と、其の趣を異にし、其の撰を同うせざるものあらむ。されど其の苦樂は、即ち眞の苦樂なり。其の淨穢は、即ち眞の淨穢なり。所謂善惡の義も、此の理に等し。人苟も智あれば、必ず善惡を甄

別す。其の智愈明かにして、其の善惡を見ること愈深遠廣大なり。之に反して、善惡を混亂し、是非を顛倒し、不實虛妄の念を長ずれば。其の反應として、自心を蒙昧ならしめ。即ち智分を失ひ、福因を損し、遂に餓鬼畜生に生を變ず。因果歷々、一も相違せず。是れ眞の「天則」なり。

是非善惡を差別して、みづから情欲を制するは、只人たるもの、生得智分あるが故なり。禽獸の如きは、其の心愚蒙、其の機陋劣なるが故に、智性發揮せず。唯情に任せ、欲に順じて、其の生を遂ぐ。此れ人爲にして、然るにあらず。彼れ禽爲獸爲にして、然るにあらず。即ち因果自然の法なり。或人の曰く、是非善惡を差別するは、全く人の私心なり。人々己が利害を主として、是非善惡の意見を起し、以てみづから專にせむと欲す。故に其の差排の彼れ禽獸にまで、平等の正理を及ぼさざるのみならず。彼此都て争訟の有様をなせり。されば人爲中の尤も確實ならざるもの、相違多きものは。乃ち是非善惡の説なり。是非善惡の見なり。是れ蓋し人の私心の轉變にして、亦是れ情欲の類のみと。此の説も猶用の一致ならざるが爲に、其の體をも無みする者なり。

第十段

抑、人の境遇一ならず。其の心に感覺受納する諸法も、亦隨て一ならず。加之賦性の賢愚千差ありて、智境に萬別を見るは、所謂可憐なる衆生界の有様なり。故に先聖之を悲み、十界の相を示し、以て之に教ふ。要するに、人には是非善惡を識別するの智慧あるが故に、教法も、其の功用をなすなり。苟も人には是非善惡を識別するの智慧あれば、即ち其の智境に、正しき是非善惡の事相なからむや。先聖の教法は、蓋し之を顯明するなり。

臺灣反民征討の事あり。此の間の消息、虛實相交へて、中外の新聞に傳ふ。都て人事の變悲慘の極に非ざるはなし。就中情迫て讀むに堪へざる者は、孫氏の婦秀容なるもの、其の姉に寄するの書牘なり。愚妹秀容、瀝血上書、美容賢姉、維次敬懇者、愚妹命生不辰、痛先夫之殉難、悲慘何可勝言、本欲捨却殘軀、從先夫於地下、細思夫仇未報、嗣續繁懷、死亦尙遺無窮之憾、况張孫兩姓、世代簪纓、將門之後、焉有棄仇而不報之理、且先夫爲國爲民、而盡節、愚妹又安敢輕義而忘仇、雖不敢效、邵姬之遺風、惟有竭忠誠、而盡苦志、刻已素服從軍、招集先夫舊部、並招新勇、數營誓除倭寇、以雪夫仇、惟是兵兇戰危、事機難卜、古云、百行以孝爲先、其最要者、莫若存嗣、以繼夫宗、今命老僕

楊明六乳媪周張氏挈帶兩豚兒來蘇到口望賢婦念骨肉之情同胞之義安爲看顧使先夫宗嗣有存不獨愚妹感德難忘即孫氏沒存均皆感佩愚妹此行若能遂志掃盡倭氣夫仇報復則子母重逢或當有日倘然力不從心惟有付之一死以繼先夫之志於本月十八日已經身臨行伍與衆誓師勞苦相加百端交迫語云成敗由天凡事只管盡其人力泣血臨書數言不盡五月念日。

我が國の新開此の文字を以て概ね漢人虚構として之を傳ふ。然れども真情纏綿文意切實未だ必ずしも偽作として視るべからざるもの有り。蓋し婦道としては稍矯激に失し中庸に過ぐるに似たり。是を以て眞偽の疑ひおのづから此の間に生ず。されど家亡び國亡ぶの時に際しては悲憤の餘り斯る烈女を出すこと間々あるべし。吾が家に明末倭寇に大倉城を守りし無名氏の書牘を藏す之を讀む時は道義の心に感じておのづから肩背の悚然たるを覺ゆ。嗟呼兵凶器戰不祥なり。故なく之を用ふるは。不仁焉より甚しきはなし。

大倉城書牘

屢接來信恐我兵敗身死不知人生自有定數惡滋味苦些也有受用處苦海中未必

不是極樂國也讀書孝親無道父母之憂便是常々聚首矣何必一堂同聚我兒千言萬語絮々叨々只是教我回衙何風雲氣少兒女情多倭賊流毒多少百姓不得安家爾老子領兵不能誅討賊枕裏草此其時也安能作楚囚對爾等相泣閨閣中也此後時事不知如何幸而承平父子享太平之福期做好人不幸而有意外之變只有臣死忠妻死節子死孝咬定牙關大家成就一箇是而已汝母子以此言告之不必多話

四月初四日。大倉城西燈下伏枕書。

大倉城は江西省蘇州府に屬すること明一統志に見えたり。然れども此の書年紀を記せざる故に誰人の書たる終に知るべからず。

第十一段

碧巖集百則の公案中尤も商量し難きは龍牙の西來意なり。宋の虛堂禪師曾て此の事を論ず。然れども竟に要領を得ず故を以て後學往々是不足の間に迷ふ。龍牙問翠微如何是祖師西來意微云與我過禪板來牙過禪板與翠微微接得便打牙云打即任打要且無祖師西來意牙又問臨濟如何是祖師西來意濟云與我過蒲團來牙取蒲團過與臨濟濟接得便打牙云打即任打要無祖師西來意

如今の禪家概ね龍牙を貶して死水裡に滯るとなす。是は大なる誤なり。龍牙

元來中々の達者なり、乃ち翠微臨濟の二老宿に見え、便宜を得て、勘過するの意あり。翠微臨濟は、此の本分の宗師。彼が口を開て祖師意を問ふを待たず、早く來風を望みて、龍蛇を辨ず。故に禪板蒲團を與へて、彼をして恣に技量を呈せしむ。龍牙一隻眼を具す、恰も鐵牛の獅子吼を聽くが如く、一向に動著せず。却て杓柄を二老宿に過與し、後に於て半身を現じ、便云ふ、打即任、打要且、無祖師西來意と。看よ、彼が尋常禪客の作畧を用ひぬ所に、却て一段の技量あるを。故に黃龍新云。龍牙驅耕夫之牛、奪飢人之食と。如今の人之を見誤るは、全く雪竇の頰を見誤るより來る。雪竇の頰に云く。

龍牙山裏龍無眼、死水何曾振古風、禪板蒲團不能用、只應分付與盧公。

雪竇天資靈才あり、出沒卷舒、縱横の機を具す。故に翠微臨濟の大膽無敵なる振舞を見て、傍より龍牙の爲に、齒を切てもどかしく思ひ。取るべき時に取らざれば、千歳も遭ひがたしと。ゆゑに曰く、臨濟翠微、只解放、不解收、我當時如作龍牙。待伊索蒲團、禪板拈起、劈面便擲と。雪竇の作略は、擊石火の如く、閃電光に似たり。さすがの臨濟翠微の二老宿も、斯かる風韻漢に出逢ふては、手を出す所なし。臨

濟亦曾て黃檗を打つ、頂上に眼あり。此の活機用を具するに非ずんば、決定して古風を振ふに足らぬ。故に云ふ、龍牙山裏龍無眼、死水何曾振古風と。臨濟翠微、只放行の利を解す。龍牙たるもの、一向に把住して、二老宿をして、出頭の地なからしむべし。然るに便々として杓柄を與へ、却て彼れをして、坐ながら四天下を領せしむ。是れ龍無眼と云ふ所以なり。五祖戒云、和尚得恁麼而長と。抑、禪板蒲團は、禪家常用の具なり。此を是れ自由に用ひ得ること能はず、只應分付與盧公と。是れ此の頰の大體なり。然るに雪竇も、亦只之を取るの利を見て、之を捨つるの得たるを解せず。故に龍牙は亦必曰はむ、禪板蒲團を用ふるが家風なれば、其は汝が用ふるに任ず。要且、無祖師西來意と。雪竇早く龍牙底を看破す。故に又曰く、這老漢也、未得勦絕、復成一頰。

盧公付了、亦何惡、坐倚休、將繼祖燈、堪對暮雲、歸未合、遠山無限、碧層々。

得庵著語曰、勘破了也。又曰、是即是、只是、只是、無祖師西來意。

蝦吏の人は、神をカモイと云ふとぞ。モイは、ミの延びたるなるべし。神と云ふ意味の名は、國の東西、人の文野を問はず、必ず之れあり。而して其の名

第十二段
第十三段

ある其の物は、乃ち大威力あり、大功力ありて、幽顯二界を我が物として、此の人間に對して、嚴しく禍福をなすものなりとは、又是れ太古より等流し來りし人間の感情思念なるに似たり。時に聰明利智のもの、此の間に出來り。恣に觀察を下し、恰も目に見るが如く、其の象を説き、其の心を説き。以て其の人に教ふ。其の説たる、各々國土の因縁、及び其の民人の所知量に應じ。又或は爲にする所ありて、之が説を作すが故に。其の立説の意義、各家相反し。遂に神の名に於て、一大争鬪を引起し、彼此相殺戮戕害し、以て其の奉ずる所に忠とするに至れり。此等激烈なる殘狀は、中古亞細亞の西端に起り、延て西歐に及ぼし、久しく其の暴横を極む。今や東亞諸國に、其の害毒を致さむとす。

神の名に假託せし立教は、此の世界を通じて、其の種類頗る多し。されど一切時、一切所、一切物に、利益ありて、禍害なき大公至平の説は、甚だ稀なり。且つ彼の立教の所詮は、不可思議の功力を、無上に誇張するに歸して。其の言の支離滅裂なるに頓着せず。若し他人の正理を推して、之を是非するものあれば。乃ち曰く、是れ人の私意私見のみ。人智を以て、神智を測るべからずと。今時彼等末流の

所業は、斯の民を帥ゐて、所謂不可思議の迷室に誘ひ、朦朧たる幽冥の中に投じ。神の威嚴を假りて恣に驅使す。其の害たる、只に人の靈智を昧却するのみならず、動もすれば倫理を亡し、人の家國を破滅するに至る。されば聰明の士、其の誣妄を看破し、其の害毒を除かむと欲し、之が救正の術を講ずと雖も。所謂不可思議分際を、是非曲直すべき基礎なきが爲に、往々其の功を奏すること能はず。今や其の論陣を一轉し、彼が根據を顛覆し、以て此の人間を、高明の地に誘出せむと欲す。是れ歐洲に在りて、近古より發達せる哲學無神説等の學説なり。

掉棒打月、隔靴搔痒、哲學無神説も、亦未だ性海を倒翻し、人間の感情を一掃し、以て彼れ神教海を涸渴せしむること能はず。彼等猶傲然救世使者と稱し、曰く、現世には災害を禳ひ、福利を下し。未來には、冥界無量の苦難を救ふと。乃ち人間の常情たる、禍福生死幽顯等の疑懼の思念に付込み、今や一層其の説を誇張せり。されば哲學無神説も、其の目的は卓偉なるも、所謂遠水近火の比にして。是の際普通人間の惑溺を救ふべき方便にあらず。抑々有神無神の是非は、且く之を措き。元來神道の解釋にして、此の人間の道德に一致すれば。此の人間は、此の人

間の常情に適順して、直に正理に歸入することを得べし。之に反し、其の解釋の此の人間の道徳に戻るものあれば、則ち家に不孝の子を生じ、國に不忠の臣を生じ。邪見増長して、此の人間を破滅し。生を轉ぜず、死を易へず、其の身其の儘鬼畜の種類に化せしむ。然らば則ち神道必しも人間に害あらず、只其の解釋の正邪云何に在るのみ。

第十四段

史記孔子世家曰、吳伐越、隋會稽、得骨節、專車、吳使使問仲尼、骨何者、最大、仲尼曰、禹致羣神於會稽山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨專車、此爲大矣、誰爲神、仲尼曰、山川之神、足以綱紀天下、其守爲神、社稷爲公侯、皆屬於王者とあり。彼の上の太古は、威徳尊嚴なる者を、汎稱して神とす。此の文に徴するに、人を以て神と稱せしことも亦明なり。都て吾國神代の趣と、ちのづから相似たり。

第十五段

或人問て曰く、佛説は無神説にあらずやと。吾之に對て曰く、佛は無我無人と説く。我もなく人もなければ、則ち神もなく佛もなし。是萬法唯心の所談なり。此の萬法唯心の妙理に悟入すれば、神人不二の本際を究む。神人不二の本際を究むるものは、能く有無を知る。能く有無を知る者は、又能く非有非無を知る。

雲門云、拄杖子化爲龍、吞却乾坤了也。山河大地、甚處得來と。此の一句に參徹して、始めて此の事を商量すべし。

第十六段

或人臨命終の爲にとて、書を求む。吾筆を採りて書して曰く、善を思へば善人となる、惡を思へば惡人となる。酒を思へば酒呑となるが如く、佛を念へば成佛す。人の分別は、惡なるものなり。善惡吉凶など云ふこと、尋常事物の外より出て來る様に思ひ。又仁義の名を聞けば、是れ仁なり、是れ義なりと名づくべき、格段の行ひでもある様に思ふ。古の學者達も、或は此の心持ありしにや。其の書に記

第十七段

せしものに、往々此の意を含むを見る。故に孔子も、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣と云へり。抑々天地の間に、吉凶もなく、善惡もなし。只人物の上に、此の事あり。夫れ人生れて、茲に此の身あり。此の身を保つ爲に、一切の人事あり。自他等しく、此の身を保つ所以の道を同うするが故に。人間の禍福吉凶、是非善惡、悉く一理なり、一轍なり。然るに此の人を救ふが爲に、彼の人を害し。此の事を成就せむが爲に、彼の事を破る。是を以て一理の理にして相戻り、一轍の轍にして相侵す。是れ此の人間大同分の中に、又ちのづから其の類を異にし、其の情を同うせ

ざるものありて、此の累を生ず。則ち人間の禍福吉凶、是非善惡熾然として異をなし。遂に聖智を待つに非ざれば、其の歸宿する所を知らざるに至る。善惡は人に加へて、禍福は我が身に加はる。故に禍福善惡は、往來の義にして、則ち人の所行なり。人事紛雜の間に在りて、其の善を撰び、其の福を求めて、其の道を過らざるは、親疎内外、輕重大小の因縁に相應して、其の取捨を決すればなり。乃ち其の親を救ひ、其の内を重じ、其の大を全うし、其の重に隨ふ等なり。然りと雖も、善惡相乗除せず、禍福必異同あり。此の人を救ひ、彼の人を害し。此の事を成し、彼の事を敗る。此れ善にして彼れ惡、此れ吉にして彼れ凶、善惡其の趣を異にし、吉凶其の形を同うせず。是れ決定の義なり。されば善事の爲にする惡事も、惡事は即ち惡事なり。吉事の爲にする凶事も、凶事は即ち凶事なり。故に古聖人の、此の場合に相遇するや、其の取捨を慮り、戒慎恐懼、決して苟もせず。萬止むを得ざるも、猶避くべきの道を求め、みづから主となりては、小分の惡をも侵すことなし。佛曰、以善心殺惡人、以惡心殺蟻子、其罪輕と。罪なしとは言はず、只是れ相比して輕し。後世は、人に智目なきが爲に、事物相關の理に暗く。善

第十八段

惡禍福の常に隨ふを知らず。故に其の取捨踈略にして、所謂直情徑行の俗に移り。夷狄禽獸と、殆ど其の道を同うす。可嘆の至りなり。麻谷振錫の因縁は、頗る見難く、會し難く。古今多少の人、只章敬南泉の放行把住に氣を吞まれ、往々にして商量を誤る。抑々此の則は、麻谷の働さより、看破して至らざれば。章敬南泉及び雪竇の働さも、只是れ一場の戲論に似たり。麻谷持錫、到章敬、遊禪床、三匝、振錫一下、卓然而立、敬云、是々雪竇著語曰、錯麻谷又到南泉、遊禪床、三匝、振錫一下、卓然而立、泉云、不是、不是、雪竇著語曰、錯麻谷當時云、章敬道是、和尚爲什麼、道不是、泉云、章敬即是、汝不是、此是風力、所轉終成敗壞。章敬南泉は、本分の宗師なり。放把擒縱は、彼が日用の三昧のみ。要は只麻谷振錫の所に力を着て、此の一大事因縁を見るべし。麻谷一條の杖を提げ來て、禪海を攪亂し、羴龍を驚動す。波浪湧起して、滔天の勢あり。麻谷以て便宜を得るとなし、更に此の事の爲に、軀命を惜まず。赤手を伸べて、羴龍の領下を攫む。曰く、章敬道是、和尚爲什麼、道不是と。參禪問法も、茲に到て徹根徹髓と云ふべし。如今多少の人、誤り會して云ふ。麻谷他の、是不是の言に轉ぜられて、自己の脚跟を失

すと。何の交渉かあらむ。古人堂に法は是不是を離ると知らざらむや。麻谷當時云、章敬道是和尚爲什麼道不是と。是れ客を引て客に對し。己れみづからは是不是の葛藤を脱して、一方に地步を占むるの作略なり。南泉は本分の宗師みづから大眼目を具す。早く麻谷の身を轉ずるを識破し、ヒタと把住して曰ふ章敬即是汝、不是と。遂に云ふ、此是風力所轉終成敗壞と。さすがの麻谷も茲に至りて、身を出すの地なし。雪峯云、三世諸佛向火焰裡轉大法輪、雲門云、火焰爲三世諸佛說法、三世諸佛立地聽之と。親しく此の事に徹底して、此等の古則を商量すべし。

麻谷一條の杖を振り舞して、大波瀾を起す。雪竇兩錯を下して、之を静め、之を平ぐ。此錯彼錯甚力を費さず。此の中の消息、雪竇獨之を會し。雪竇獨之を愛す。故に頌に曰く。

此錯彼錯、切忌拈卻、四海浪平、百川潮落、古策風高、十二門門々有路空、蕭索非蕭索、作者好求無病藥。

雪竇以爲、此彼の兩錯で、斯る大波瀾も收る。されば此の兩錯が、天下太平を致す

第十九段

一概なり。決して拈却することなかれ。乃古策風高、十二門。一時に豁開して、是不是の用捨なく。往來進退、共に自由自在なりと。是即是。只是れ雪竇一向太平を貪り、却てみづから無事界裡に蕭索を嘆ず。此錯彼錯、是れ何の榜樣ぞ。作者をして、強て無病の藥を求めしめむよりは。直に此兩錯を拈却して、恣に錫杖を振り舞さしむるに及かず。

昔婆子あり、或る禪師に問ふて、云く、吾等女性にして、根機下劣なるものも、成佛の因縁はこれあり侍るにやと。禪師慇懃に諭して云く、金剛經に、應無所住、而生其心と云ふことあり。此の心を會得すれば、成佛作祖も亦疑ひなしと。婆子是の語を聞き、大に喜び、去て、日夜に參究す。大麥小麥、二升五合。大麥小麥、二升五合と。着衣喫飯、大小便利の間も、暫も口に絶せず。一朝忽然として大悟す。

第二十段

今歲^{明治十八年}氣候不順にして、梅天に雨なく、土用に晴天なし。しかのみならず、冷氣肌を侵し。足を褰み衣を重ねて、盛夏を過ぐ。吾生來未だ曾て斯る例しを知らず。古き人の語り傳へに聞く、其の昔天保年間、斯る事ありて、殺物實らず。其の年、其の翌年と、續く大飢饉にて、無數の人命を失ひしことありとぞ。今日は

四通八達、便利を極めたる御代なれば。有餘不足相補ふて、如何なる山間僻地も人の餓死する程の患ひはなかるべし。されど猶萬一の爲にとて、白川樂翁公の物せられたる退閑雜記中の一條を茲に記す。

朝鮮にて著す、忠州救荒切要に、松葉を食ふ法あり。其れに云ふ、松の葉は、食物にして、命を延るものなり。松葉を摘み取り、之を臼にて舂けば、汁出て侍るを、その糟をとりあげて、日に晒し、再舂きくだきて、末となして置くべし。食むとするとき、穀末米にも限らず、麥、蕎麥の根の類、精に用ゐべきものの四合を水に押し交て、薄き粘の様になし。是を四つにわけ、先そのひとつ分の粘を呑み、腸胃を潤ほし。その次に、二つ分を一つにして、かの松葉末四合いれて、和してくらひ。終りに残る一つ分の粘をのむべし。是を用ふれば、米穀のかゆのみくひしよりも、氣力をまし侍るなり。若し大便秘閉する事あらば、麻の實を三つほど喰ふべし。救荒第一のものなりといへり。

又同書に、飢饉の慘狀を記されたり。人の世に、斯る例しありと思へば、畏ろしく又哀れなり。

天明癸卯の年、淺間山燒いて、多くの人死亡したる、其數を知らず。みな人の知る所なれば、略しぬ。其年凶作なりしが、奥羽二州、ことに甚しく、餓死するもの多かりしとぞ。そのうち奥羽のはてへゆきたるもの、言ひし、八百軒もあなる町、わづかに三十七八軒ものこりて、其餘はみな死はてぬ。通行せし道を見わたして、向ふにみゆる村は、家づくりも大きければ、泊りぬべきとおもひて、行に。煙たつ家は、一軒もなく。みな壁くづれ、障子破れて、いとあれに荒たり。うかゞひみれば、寇のあたりは、觸體のいくつもあむなり。夫よりして行みち、にどくろうのいくつとなく、草のなかにみゆるぞ、淺ましき。馬ひく者のいふ、われは伯父のやしなひうけてければ、我のみぞ、人をば喰侍らずして、いきのこりたりと。自負のさまして、言ひしとぞ。人の肉くらひて、生のこりたるものは、ことにまれなり。すでに犬一疋を、五百錢八百錢にもとめ。鼠など、五十錢にかひたり。世に尊ぶ器をもて、一合の米にかへぬる事だに成がたかりしとぞ。人死すれば、喰けれども、餓死せしものは、たふるゝと、肉くされて、くひがたし。たゞ餓てありく人を、うちころし。寄合て、その肉を切とり。鹽などに

して、たくはへ置きしとぞ。其内にもひとり農夫隣家へ行てわが妻子餓死せる中に、男子ひとり生のこれるが、二三日も過ば死べし。死するをみるものびざれば、うちころしてむとおもへど。さすがたへがたく覺ゆるに、ころしたまは、其肉をわけてくらふべしと計ひけるにぞ。隣夫も悦びて、かの子をうちころしぬ。農夫見ぬたるが、我子をころすくせ事よとて、斧もて隣夫をころし。計畧によりて、ふたりの肉をもとめけるとて、庖丁して、鹽などにたくはへ置ける。かうやうなる事、さくにもしのびず。只其頃は、人のものを奪ひ、又は家をやきかすむる事などは、あしき事といふものなかりしとぞ。此に書ところ、は百分が一にして、かいつくすべき事には非ず。ある一領にて、二十萬人も死せしなど、其頃言ひしとぞきこえし。いと淺間しき事にて、此事語りつたふるも、等閑に成ぬるころ、又此わざはひは來るべし。相かまへて、此事わするまじきなり。

或人云く、饑饉にて人の餓死するは、春の半ばより、夏のはじめころなり。此の間二三十日間も助け救ふの方便あれば、乃ち夏作ものゝ中に、何なりとも喰ふべ

第二十一段

きものいて來て、死地を免るゝなりと。おもふに、是は、凶歳の輕重にもよることなるべし。

寒山拾得は、其人あるに非ず。閻丘胤なる者斯る偉人を假設して、自己の所作を傳へしものなりと云ふ人あり。此の説大に誤れり。抑、寒山の詩は、峻嚴にして高潔。拾得の詩は、朴實にして沈深。是れおのづから其人に適ふ。而して拾得は、文字の運用、之を寒山に比するに、拙劣なり。拙劣なれども、拾得は、おのづから拾得の得力あり。寒山は、古今内外の典籍に通じ、其の詩は、不用意にして、實際實情を吐露す。共に假設などする者の、企及する所にあらず。今寒山詩中に就て、十餘首を抄録す。吟誦し去れば、今猶其の嚴勵の面を見るが如し。

人間寒山道、寒山路不通。夏天水未釋、日出霧朦朧。似我何由屈、與君心不同。君心若似我、還得到其中。

手筆太縱橫、身才極瓌璋。生爲有限身、死作無名鬼。自古如此多、君今爭奈何。可來自雲裡、教爾紫芝歌。

欲得安身處、寒山可長保。微風吹幽松、近聽滌滌好。下有斑白人、喃喃讀黃老。十年歸

不得忘却來時道。

兩龜乘轎車。蒸出路頭戲。一叢從傍來。苦死欲求寄。不載爽人情。始被沈累彈。指不可論行。恩卻遭刺。

一向寒山坐。淹留三十年。昨來訪親友。太平入黃泉。漸滅如殘燭。長流似逝川。今朝對孤影。不覺淚雙懸。

田舍多桑園。牛犢滿。旋轍昔信有。因果頑皮早晚烈。眼看消磨盡。當頭各自活。紙袴瓦作禪。到頭凍餓殺。

賢士不貪婪。癡人好鑿麥。地占他家竹園。皆我者。努膊覓錢財。切齒驅奴馬。須看郭門外。巖々松柏下。

推尋世間事。子細總皆知。凡事莫容易。盡愛討便宜。護即弊成好。毀即是成非。故知難濫口。背向總由伊。冷暖我自量。不信奴唇皮。

貧贖欠一尺。富狗剩三寸。若分貧不平。中半富與困。始取贖飽足。却令狗飢頓。為汝熟思量。令我也愁悶。

雍容美少年。博覽諸經史。盡號曰先生。皆稱為學士。未能得官職。不解乘。未相冬披破。

布衫。蓋是書誤已。

養女畏大多。已生須訓誘。捺頭遣小心。鞭背令緘口。未解乘機杆。那堪事業。箠張婆語。驢駒汝大不如母。

報汝修道者。進求虛勞神。人有精靈物。無守復無文。呼時歷々應。隱處不居存。可嗔善保護。勿令有點痕。

寒山子の來歴及び姓氏は當時已に人の知れるものなし。其の詩中に道ふ所を以て之を考ふるに隱士にして僧にあらず。其の天台山の寒巖に棲居せしは老年の事なるべし。曾て夢に我が家に還るの詩あり。昨夜夢還家。見婦機中織。棧棧如有思。聲梭似無力。呼之廻面視。悅復不相識。應是別多年。鬢毛非舊色と。又一住寒山萬事休。更無雜念。挂心頭。閑於石壁。題詩句。任運還同不繫舟と。以て在家居士たりしこと知るべし。其の寒巖に住せし後も。諸方に放浪して。殆ど居住を定めざりしなるべし。憶得二十年。徐步國清歸。國清寺中人。盡道寒山癡。との詩あり。又甚長壽せしものと見ゆ。其の詩に曰く。老病殘年百有餘。面黃頭白好山居。布裘攤質。隨緣過。豈羨人間巧。樣模心神用。盡為名利。百種貪婪進。已軀浮世。幻化如燈燼。家內埋。

身是有無。

第二十二段

良禪客一鐵破三關の則は、宗師家往々商量を誤る。是れ全く關中主と云ふ言句に、拘泥するが爲なり。關中主、是れ何の繫驢概ぞ。餘り大切がると、彼の拄杖子が、傍より腹を抱へて、呵々大笑すべし。

良禪客問、欽山一鐵破三關時如何。山云、放出關中主看。良云、恁麼則知過。必改。山云、更待何時。良云、好箭放不著。所在便出。山云、且來關梨。良回首。山把住云、一鐵破三關。即且止。試與欽山發箭看。良擬議。山打七棒云、且聽這漢疑三十年。

良禪客の働きは、有放有收、有始有終、毫末も破綻なし。末後擬議の處は尤勘辨しがたし。回悟の評に、末後可惜許、弓折箭盡と。此は是れ抑揚の論のみ。良禪客決して弓折るゝに非ず、箭盡るに非ず。已に是れ好箭放不著、所在されば弓箭を收めて、欽山の舉動云何と見るなり。山把住云、一鐵破三關、即且止、試與欽山發箭看と。是れ何等の嘆息ぞ。吾當時若し良禪客と作らば、一踏に踏倒せむのみ。されど力を出して、猿人形の首を討つは、決して高名手柄に非ず。故に良禪客は、一向前功を收めて。彼が最後の惡態には、相手にならぬなり。山打七棒云、且聽

這漢疑三十年と。茲に至て欽山僅に前敗を贖ひ、關中の主となり得たり。雪竇彼が無佛の處に、無頓着に獨尊を稱するを愛す。又良禪客の放箭的々分明なるを愛す。故に頌に云く、

與君放出關中主、放箭之徒莫辨。函取箇眼、今耳必聾、捨箇耳、今目雙瞽。可憐一鐵破三關的々分明、箭後路君不見。玄沙有言、今大丈夫先、天爲心祖。

欽山元來大機用なし、されど古今無敵の剛者なり。關中の主を放り出して、直に死活を競ふ。故に言句上、悉鋒を犯し手を傷く。彼が更待何時と言ふが如き、尤無理無態なり。力量に任せて、他を壓倒す。彼曾て何不道、非無位眞人と云ひし當時の舊態、其の儘を呈露す。故に良禪客は、箭筋も知らぬ和尚なりと、緩々地に戰を收めて云く、好箭放不著、所在と。されど此の公案は、猶未了なり。故に山云、且來關梨。良回首、是れおのづから然らざるを得ず。然るに、如今の禪流、此の間に是非の評を下し、良の回首を以て過失となす。斯かる事が過失ならば、喫茶喫飯も過失なるべし。兎角虛頭の禪家、徒に機先を競ひ。天に先じ心の祖となる杯と、青雲の上を見つめて、脚跟下に事の生するを知らず。是を以て動もすれば古

第二十三段

則に對し見當違の評論を試む。之を要するに優劣勝敗を以て此の古則を判斷すべからず。但良禪客の如き戰の名人も、欽山と云ふ無頓着の和尚には、終に一着を輸する所あるを見るべし。山打七棒云、且聽這漢疑三十年得芥著語曰、綸言汗の如し。又曰、盲蛇人を噛む。

杜甫の詩に曰く、翻手爲雲覆手雨、紛々輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土。是れ世を憤るの言なり。彼の管鮑の如きは、古も稀に見る所、豈今人のみ棄如土と道はむや。故に管仲の言に曰く、生我者父母、知我者鮑子也。古今を通じて、其の交友を得るの難き知るべきのみ。吾竊に以爲らく、分財利多、自與謀事而更窮困、三仕三見逐、是乃小人の所行にして、君子の賤む所なり。但鮑叔なるもの、彼れ管中の大器たるを知る。譬へば世の伯樂の千里の馬を視て、其の槽櫪の間に駢死せむことを悲むに似たり。其の貧困の間に於ける一得一失の如きは、始より意に介せざるのみ。されば大賢も、時を得ざれば、或貧或愚或怯なることあり。只幸に一人の鮑叔ありて、彼が志を知る。況や凡庸の才を以て、此の世智辛き世海をこぎ渡るをや。其の志、其の所作共に陋劣の限りなるべし。然るに

第二十四段

之を身に反せずして、妄に鮑叔を呼び世を憤り人を責む。誠に不覺の至なりと雖も、亦是れ古今凡夫の常情なるべし。晏子の傳に、石父曰、吾聞君子誦於不知己而信於知己者、方吾在縲紲中、彼不知我也、夫子既以感寤而贖我、是知己、知己而無禮不知、在縲紲之中、是れ激語なり。然れども、ものづから至理あり。畢竟じて言はゞ、交友の情味、淡如水に如かず。

他方世界は、吾之を知らず。此の世界には、滿分の善人なく、又滿分の惡人なし。大概或時は善をなし、或時は惡をなす。其の愛憎好惡の情のまゝに、羈絆されて、善惡其の人を異にするが如きは、通常凡夫の荒ましなり。されば古賢人も、其の罪を惡みて、其の人を惡まずと言へり。愛苦貧苦病苦死苦等の種々の苦惱に驅り立てられて、心ならぬ惡事を思ひ企て。其の點才あるは、巧者に立ち廻り。鈍惡なるは、忽ち法網に罹る。之を大經するに、彼此共に可憐の衆生なり。其の惡を惡として、之を戒め之を罪するは、世を治め人を正すの道なれば、是非もなし。されば其の實情より言へば、人の目に餘る惡事をなすものは、大概不器用者の仕事なるべし。増上寺行誠上人は、道にて乞食非人に出合ひし時は、必禮拜して過

第二十五段

しとぞ。或人之を怪みて、其の仔細を尋ね問ひければ。上人云く、彼等は、朝夕飢に迫れども、火付盜賊をなさず、能忍辱して、乞食非人を分とす、有りがたき事なりと。此の上人は、萬事めて度こゝろざしの人なり。

戰場に臨み、死生を決するは、唯一念なり。決して二念あることなし。若し二念を續ぐ時は、却て初一念を動じて、半死半生の途に迷ひ。順逆の境に致されて、必ず立脚の地を失ふべし。されば得失是非を、一時に放下し來て、身を大死底より突き出し。第一人となりて働く時は、前後左右、悉我が指顧に歸し。難なく易なく、順なく逆なく、洒々落々とし、縦横自在なり。古人の問答商量のづから此機を受用す。故に脱然として、復に凡量を超え、與奪逆順、會て一點の擬議を容れず。雲門問、僧近離甚處、僧曰、西禪門云、西禪近日有何言句、僧展兩手、門打一掌、僧云、某甲話在、門却展兩手、僧無語、門便打、此の話の落處は、且措く。但雲門の作略を看よ、決して多岐に涉らず。尋常茶に逢ふて茶を喫し、飯に逢ふて飯を喫すると一般なり。雪竇頌して曰く、虎頭虎尾一時收、凛々威風四百州と。源に透り底に徹して、舉足下足、直に天を翻し地を覆すの大力量を具するにあらざるよりは、此の事決

第二十六段

して行はるべからず。豈に唯一機一境の得失ならむや。如今の禪流、戰は死地なるを知らず。動もすれば畧を論じ、謀を説き、意根下に領會して、妄に機境を制せむと欲す。面白くをかしき妄想を盡き出して、以て佛法禪道に當つ。其の耻を知らざるの甚しき、外道勝他の見にも劣れり。

風外和尚は、洞宗の老宿なり。曾て碧巖百則を提唱し、其の講録耳林鈔を留めて、世に行ふ。吾之を一閱するに、大體を得て、仔細を悉さず。往々緊要の處に於て、古人の意を誤る。其の馬大師不安の則の如き、都て差過し了れり。風師曰く、雪竇も馬祖が公子の様に誇つて、日而佛月而佛と云はれる處を、五帝三皇は何物ぞと抑へた處は、二十年來曾苦辛と。是れ一場の嘸語、何の交渉かあらむ。

抑、雪竇の此の頌は、抑揚の意なし。字々句々盡血滴々なり。其の禪月大師の公子行の句を用ふるも、所謂斷章取義の法にして、其の因縁を引き用ひたるにあらず。要するにさすがの老漢も、此の古則には、一向眼目の透徹せざりしを見る。耳林鈔を荒まし點檢するに、萬篇一律に見こなしたる趣あり。又己が悟りに引付て、程よく安排するの癖あり。風外老漢は、老漢の悟り相應に、茶も喫し飯も喫

して、一生の佛事を無事に成辨せしなるべし。されど後進初機、此等の書を見て、益を求む。恐らくは達磨の一宗、地を拂ふて絶滅すべし。道悟漸源、弔孝の則に、霜云、洪波浩渺、白浪滔天、覓什麼先師靈骨との語あり。風外提唱して云く、霜云、洪波浩渺云々。是本來無一物、何處惹塵埃と云ふ意也と。是れ決して然らず。洪波浩渺、白浪滔天は、正しく洪波浩渺、白浪滔天なり。惟るに禪海従本來、底もなく邊もなし。波浪涌起して、二六時中、地を捲き天を拍つ。東湧西沒、西湧東沒、中湧邊沒、邊湧中沒。されば石霜彼の漸源の働きを抑へて、我が這裡、直に洪波浩渺、白浪滔天じや。そんな死人が居るもの乎と云ふ意なり。洪波浩渺、白浪滔天の語、實に石霜の力量なり。故に雪竇着語曰、蒼天蒼天と。但賊賊を知る。風外老漢、此の間の消息に通ぜず。動もすれば無一物を持出し、碧巖百則を程よく調理し、以て兒孫の飢渴に充つ。洞宗の振はざる蓋、一朝一夕の故にあらず。洞山の五位は、最初に正偏二位を互換して、正中偏、偏中正と立つ。學者を此の位に接して、正中に偏あり、偏中に正あるを證悟せしむ。所謂水上の胡蘆子の如し。正を窮むれば偏となり、偏を窮むれば正となる。されば學者分際に在て、猶正偏

第二十七段

を待對して見るの嫌あり。元來待對の法、之を偏位と名く。而して正位は絶對を云ふなり。學者をして、此の微細の見病を斷ぜしむるが爲に、更に唯正位を立て、正中來と名く。唯偏位を立て、偏中至と名く。此の二位、實に五位中二重の要關なり。末後兼中到の一位を置て、之を結歸す。然るに今日曹洞臨濟二宗の所傳、共に偏中至を以て、兼中至と稱す。兼中は、正偏二位を兼ねるの名なり。夫れ正位は、出世間と云ふに同じく。偏位は、世間と云ふに同じ。世間出世間道を修し盡す以上は、之を兼ねて、天堂地獄に身を出すは、最後の関機境、即ち悲智の三昧なり。故に洞山は、兼中到の一位を置て、之を示すも。已に是れ牛頭を按して、草を喫せしむるの醜態あり。况や至と云ひ到と云ひ、頭上に頭を加へて、一段の奇觀を呈すべけじや。白隱禪師の明眼なるも、猶此の事を誤る。是れ全く正偏を以て、待對と見るの過なり。洞山偏中至の頌に曰く、偏中至、兩刃交鋒、不須避、好手還同、火裏蓮、宛然自有、衝天氣と。兩刃交鋒とは、唯偏位を云ふなり。兩々相對して、猶水火の如し。是れ偏位の偏位たる所以にして、正位には曾て此の事なし。然るに兼中至を稱する者は、兩刃を以て、正偏の二位に當て、之を解す。斯くて

は、正偏の理致に戻るのみならず。好手還マシ同シ火裏シ蓮ニ宛ト然ル自有ク衝キ天氣トと云ふに至
て、必ず其の説の窮するを見む。
佛法の名字は、おのづから佛法の差排あり。然るに唐宋以來、動もすれば、儒書中
相似の名字を持ち來りて、之に配當す。即ち正偏を以て、周易陰陽乾坤の二位に
配當し、遂に洞山の五位を以て、重離六爻之を疊て五となる等の説をなすに至る。
是れ隨宜説法としては、仔細なけれども。之を以て宗學となすは、甚だ不可なり。
夫れ周易の陰陽乾坤は、猶寒暑のごとく、晝夜の如く、相待對して、推移する現象を
云ふなり。佛法の正偏は、或は心源枝派を云ひ、絶對待對を云ひ、平等差別を云ふ。
心源を離れて枝派なく、絶對を離れて待對なく、平等を離れて差別なく、即チ一偏に
滯住する理なきが故に。乾坤晝夜の推移に比して、未熟の學者を接得するは、一
應の手段なるべし。然るに比喻に誤られて、反て本義を失し。正偏二位を以て、
待對の觀を爲すは、以ての外の僻事なり。抑、寒暑は陰陽なるべし、されば無寒暑
は、無陰陽なるべし。此の無陰陽は正位にして、陰陽は、其に偏位なり。佛法元
來正偏に出入の義ありと雖も、偏位に推移の義なし。其の之あるは、無常轉變、生

滅遷流の義のみ。されば外典を引て、佛法を解するは、畢竟じて理致を盡くす能
はず。是れ近く喩を取る、仁の方に過ぎず。故に佛法は、必ず佛法を以て解すべ
し。然らざれば、漸く流れて、遂に途轍もなき誤りとなるべし。
陰曆七月十六日は、吾が父の忌日なり。其の身まかりたまひしは、我がことしの
齡に同じ。此の夜は月すみわたりにて、感殊にふかし。
佛達みな居ならぶや、盆の月。

玉 椿 終

兒戀草

伊豆國加茂郡に古き社あり、伊豆山神社と稱へ奉る。其鎮坐まします土地を、伊豆山村といふ。吾が村莊のある所なり。村に兒戀の森の舊跡あり、今は地形もかはりて、一木もなし。里の古老のいふ、大楠とて、そのうつ洞の中、蠶廿疊も敷き並ぶる程の楠樹あり。四十年はかり以前に、焼けてうせぬ。其他楠、松、銀杏の樹など十抱も二十抱もあるが、幾本となく生ひ茂りてありしを。明治の御代のはじめの比、盡く切り倒したりとなむ。此森の舊地に、清水湧き出づ、花水と名づく。此處の里人の汲井なり。願ふに兒戀は、古々井の呼名ならむか。井の名に縁りて、森の名となり。森の名によりて、杜鵑の名所となりしより、遂に兒戀と書き傳へしなるべし。そはともあれ、この名の珍らしくをかしければ、子を思ふ思ひ草の數々、よしなしことを書き付けて、其文の名となしぬ。明治三十四年、きさらぎ初の七日、得庵記す。

手にて携へ、足にて行く、何の爲めに携へ、何の爲に行くとならば。則ち人の事を

第二段

とり運び、人の道をふみ行ふのみ。抑も身を修め、家を齊へ、各々其職分を盡すこととは。上天子より、下は庶人に至るまで、かはることなし。就中人の婦たるものは、殊に齊家を以て、天職となすなり。夫は一家の大事外事を齊へ、婦は一家の小事内事をととのふ。内外大小、相和し相合して、天地の徳正しく、其化育子孫に及ぶなり。

第二段

祖先の祭を嚴にして、報本反始の心を失はず。父母に孝養して、其大恩に酬ゆるは、即ち家を立て、世を繼ぐ所以なり。されば子孫を思ふ心を移して、祖先を思ひ、子孫を愛するの心を移して、父母を敬すべし。此心一貫して、血脈不斷なるを、仁心と名づく。故に曰く、仁は人也。人の婦たるものは、其夫を助けて、此道を守り。其夫にかはりて、此事を行ふべし。

第三段

古今聖賢の教に、女子は徳を濫り、道に遠ざかるを以て、殊に戒を加へたり。これ他の故あるにあらず。女性は、總じて智慧淺く、貪欲深きが爲めなり。其心卑し、故に虚飾を好む、甚しきは、産を破り、生を傷ひて、名聞を事とす。飲食衣服は、上品に見倣ひて、常に不足を感じ。心術行儀は、下品に比して、みづから足れりとす。

第四段

思慮^シおぼろげにして、虚言多く、實情なし。徒然草に曰く。
 女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚しく、物の理を知らず。たゞまよひの方に、心もはやくうつり。詞もたくみに、くるしからぬ事をも、問ふときはいはず。用意あるかと思れば、又あさましき事まで、とはすがたりに言ひ出す。深くたばかり、かざれる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その事あとよりあらはるゝを知らず。すなほならずして、つたなきものは、女なり。とあり。世の賢女はしらず。通途の女性は、古今を通じて、かゝるあらましなり。慎しむべく、戒しむべし。

王侯も人なり、匹夫匹婦も人なり。福祿同じからずといへど、人の徳人の道に、兩般なし。各、其分限に應じて、受用すれば、衣食おのづから餘りあり。十善法語の、不貪欲戒に、世の人暴飲過食して、生を傷ひ命を失ふものは、比々たり。飢餓凍餒して、死するものは、萬人中に一二を數ふべからずといへり。これ誠に實語なり。偶々不幸にして、乞食非人と成り果るものありと雖も。是等も大概は、放恣無頼にして、職をつとめず、業を勉めざるものゝ果報なり。

第五段

王侯も、自ら其徳を徳とせず、其福を福とせず、求めて厭かざれば。苦悶煩惱止むことなかるべし。古歌に、
 樂しみは夕顔棚の下すゞみ、男はてゝれ女は二布して。
 其體は賤しげなれど、其心に名聞を慕はず、區々容體を繕はず。わが廬を愛し、吾食を甘しとして、行其外を願はざる。匹夫匹婦にして、其樂しみ王侯に過ぎたり。論語に、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂と。孔夫子も贊し給ふ。又衣敝緇袍、與衣狐貉者立、而不耻者、其由也與、又曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲と。齊の晏子は、一狐裘三十年。若し疏衣疏食を以て、耻となさば、聖人賢人、斯く稱し給ふ謂れなし。孟子曰、飽食暖衣、逸居而無教、近於禽獸と。されば人は、徒に富貴に居るべからず。貴くして徳なく、富みて禮なくば、人にあらず。禽獸の類に近しとなり。

慳貪の念を去り、無心にして心を生ずれば、情想正しく、魂神安く平かなり。抑も人は、天地の間に生れて。天を頂き、地に住す。日月出沒し、晝夜交代し、四時推移し。生死相繼ぎ、老幼相倚る。尊卑位を定め、男女其徳を徳とす。譬へば鏡の蓋

第六段

を開くが如く、無心にして、我心を開くときは、敢て思慮分別を逞しくするに及ばず。人間の果報は、一念の上に分明なり。之を想と名づく、此想の上に心を起す、これを情と名づく。喜怒哀樂等なり。聖人賢人佛菩薩も、此想に別なく、此情にかはりなし。西行の歌に、

捨はてゝ身はなきものとおもへども、雪の降る日は寒くこそあれ。

又

心なき身にも哀れはしられけり、鴨立澤の秋の夕暮。

契沖の歌に、

焼と見て火宅の門は出しかど、烟絶えては住む方もなし。

但凡夫小人は、我執深く、貪愛の一念熾なるが爲めに、此心自然の情想を取り失ひ、恰も自盡に眼を見張りて、夢みるが如く。富貴者はおのづから富貴の想をなして、驕慢の心を生じ、貧賤者はおのづから貧賤の想をなして、卑劣の心を生ず。才藝あるもの、文學あるもの、各々自心に執し、人にたくらべ。勝劣の一念をとめて想となす。此等悉く人間の果報を失ひ、得失人我の境に、別々の夢想をなす

第七段

と雖も。其本を推し、其源を窮むれば、所謂貪愛の心之が主となるなり。若し夫れ桃源の片ほとり、七家村裏に生をうけて。人と競ひ、人と争ひ、人にまざるの要なきときは、富貴貧賤も、想となり來らず。才學機智も、用ふるに所なけん。而して人間の天然は、茲に完かるべし。されば通常凡夫の有様は、相交りて相競ひ、相奪ひて自ら利し、群居して相傷ふものに似たり。此理を能く辨へて、深く天地神祇の恩徳を感じ、聖賢佛陀の教を守り、人我貪愛の心を調伏する時は、情想正しく、魂神安く平かにして。一家の中、常に桃源の春に異ならず。

士夫外に職に勤めて、祿を求む。婦人内に在りて、奢り、心に任せて之を濫費す。これ易の所謂雷澤歸妹の象なり。其上爻を窮むれば、家を破り、徳を棄つ。人生の大禍、これより甚だしきはなし。

第八段

衣食住の三つは、人の依りて以て生存する所以のものなり。就中食を重とし、衣と住とは之に次ぐ。是故に、婦人の職は、専ら庖厨の事に勉むべし。住居は、一回之を設くれば、修葺して、十年二十年を保つに足る。衣服は、一回之を設くれば、洗濯して、三年五年を保つに足る。但飲食は、一日三回、必ず之を調ふ。身を養ひ、命

を繋ぐ、これより急なるはなし。人若し食を廢することを得れば、人事の八九を減じ。清淨寡欲にして、恰も神仙の如くなるべし。されば飲食は、人生の急務、一生の大事なり。之あるが爲めに勞し、之あるが爲に勤む。然るに家を守り、内を齊ふるを以て職とする婦人にして、之を鹵莽にす。其甚しきは、婢僕にうち任せ、て顧みず。斯の如きは、無頼の子弟の、其家に禍するよりは、その害更に甚し。かゝる婦人の癖として、一向ら華美の風を慕ひ。外聞を粧ひ容體を飾り。動もすれば不足をその夫に訴ふ。これ人の婦にあらず、人の母にあらず、全く一種の妖怪なるべし。所謂金毛九尾の狐の遺孽ならんか。

富貴と稱し、貧賤と呼ぶも、富者必ずしも貴からず、貧者必ずしも賤しからず。元來貧富は、只財の多寡を言ふのみ。貴賤の如きは、徳と位とによりて稱せらる。其位に、人爵天爵の別あり。徳に長幼の分、君子小人の別あり。故に朝廷には、位を尙ひ。郷黨には、齒を尙ぶ。貧富を以て、禮を定め、序を立つること、古今會てあることなし。後世人の徳衰へ、一向ら華を競ひ、奢を好み、貪欲の心日に増長して、上下滔々、其天分を知らず。是を以て世家の族も、貧を憂へて、自ら卑しむ。偏に

第九段

利得を計りて、賤業汚職を嫌はず。家風を下し、祖先を辱しめ、人間にまた羞耻の事あるを知らず。如此の惡俗類風は、獨り婦人の過にあらずといへども。其の從來する所を窮むれば、乃ち十中の八九は、婦人の徳行これが原因となるなり。今舉げつらひて言へば。

祖先の徳を思はざる事。

家系を重んぜざる事。

禮義の正しからざる事。

家庭を不潔にする事。

儉約を守らざる事。

萬物は一家に備はるを知らず。却て門外を望みて、他を羨む事。

此等は、通途女性の拙き心様なり。此心様を以て、一家内を取まかなひ行かば。其子孫はいふに及ばず、たとひ一見識ある士夫といへども、浸潤の餘り、漸く賤劣の心を生じて。士君子たるの行を失ふに至るべし。孟子曰、行之而不著焉、習矣而不察焉、終身由之、而不知其道者、衆也。日に三省して、行の正しからぬは、之を

第十段

改め。習のよからぬは、之を改め。みづから其道を撰びて、之に由るべき事なり。書曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖と。こゝに所謂聖とは極めて聰明利智の人を云ふなり。假令生れ得て聰明利智の人も、必ず意欲偏習の失あり。深思省察を缺ぐときは、物情を盡し、中庸を得る能はず。大學に格物致知を以て、修身齊家の本となすは、是が爲めなり。詩曰。天生烝民。有物有則と。物とは、人を言ひ。則とは、人の道を謂ふなり。

第十一段

此世間に貧賤薄福の人の多きを見て、父祖の功德を思ふべし。假令些少の福分たりとも、天より降るにあらず、地より湧くにあらず、皆悉く父祖勤勞の餘慶なり。乞食非人はあるか、たとひ驢胎馬胎に生を受くるとも、其不幸を訴ふる所なし。されば人倫の中に生を受けて、一家一族の中に鞠育せらる。我身不可思議の果報を喜び、父母の大恩を思ふべし。

第十二段

諺に曰く、女子は三界に家なしと。父母の家を出て、夫の家に歸す。常に其心に満たざる所あるが爲めに、一向ら一世一期の榮を貪り、日々に眼前の快樂を逐ふ。甚しきは、後世子孫の愛をも念とせず。祖先の徳家系の重んずべき、殆ど其

第十三段

感格に入らざるなり。誠に女子の天分未熟なるが爲めに、此事あり。彼聖人すら、意欲偏習の爲めに狂となる。返すくも克く思ひて、其徳行を修むべきなり。女子嫁して人の婦となる、其士夫を尊び敬ふの心ありて、おのづから其父祖をも尊敬するなり。其家門を重んじ、親族に厚き、皆悉く士夫を重んずるより始る。乃ち子々孫々の後を憂ふる事も、此心此操の定まりて、而して後の志なるべし。

第十四段

此徳行なき、之を匹夫匹婦と云ふ。匹夫匹婦とは、家なしと云ふに同じ。假令巨萬の黄金を積み、多數の婢僕を従ふるも。匹夫匹婦の道を行ふを以て、賤民となすなり。一家の中、おのづから尊卑長幼の序あり。其序の正しき、これ禮儀の由て行はるゝ所以なり。孔子曰。唯女子與小人爲難養也。近之則不孫、遠之則怨と。尊長を侮慢するを、不孫と云ふ。兎にも角にも、士夫に恭順にして、禮儀を紊らざる、是婦道の第一なり。

第十五段

士夫たるものは、出ては以て君に仕へ、人に接し、其職に勤め、其業を營む。言語應對の間、心神を勞すること極めて多し。退食歸家の後、威儀を畧し、身體を寛にして、氣を緩め、屈を伸べて、休養するも、亦是當然の事とす。婦人たるもの、従ひて

第十六段

以て禮なきときは、一家遂に無禮の郷となる。此無禮の化育を受くる子孫は、放縱自儘にして、殆ど禽獸の類と撰ぶ所なきに至るべし。されば修身齊家に志あるの士夫は、其家庭を嚴にし。抑制しても、此弊を長ぜしめず。如此は夫婦の不徳、人生の薄福、之より甚しきはなし。

倫理上の沙汰を別にして、人間貴賤の姿を言はゞ。總して不潔を以て、賤しきものとなすなり。身體の不潔、衣服の不潔、食物の不潔、居處の不潔、此不潔の有様に相應して。其心念も、陋劣不淨の習氣を長ず。乞食非人の不潔に頓着なく。禽獸蟲魚の不淨を求めて生を寄す。以て此事實を證すべし。湯盤銘曰、日日新又日新と。盤は沐浴の器なり。日日其身の不潔を去り、其心の塵垢をも洗濯すべしとなり。心地觀經に、母の十恩を説く、能理五根故とあり。乃ちその子の爲めに、眼耳鼻舌身の不淨を除きて、之を鞠育するの恩徳を云ふ。彼賤民の子女の、其面目の賤しげなるは、幼穉の時に、其不潔を除き遣らざるが爲なり。

美麗は有福の相にして、清淨は尊貴の姿なり。美麗を好むは、人に誇るの心あり、清淨を好むは、みづから慊くするなり。みづから慊くして樂しむは、人に誇りて

第十七段

樂しむと、其心術の高下、誠に霄壤の差あり。女子の性、あながちに不淨を好むと言ふにはあらず。只ひたすら、美麗を好み、人に銜ふの僻あるが爲めに、家居席常の事は、勞して所詮なく思ひなし。動もすれば、なほざりに安んじて、みづから其の陋態を知らざるに至る。

第十八段

美麗は、金銀珠玉、錦繡等を云ふ。之を求めて、必ずしも得べからず。清淨は、我分の所有を受用して、その塵垢を去り、其汚穢を除くを云ふなり。孟子曰、求則得之、舍則失之、是求有益於得也。求在我者也。求之有道、得之有命、是求無益於得也。求在外者也。美麗を好むと、清淨を好むと、其得失も亦以て知るべし。

第十九段

賤しげなるもの、○障子の紙の破れたる○壘の縁の剝ぐれたる○火鉢の灰の掻きちらしたる○火箸のゆがみたる○しだらなく物とりちらしたる○拭巾の垢じみたる○手拭の古びたる○白箸の汚れたる○食器の缺けたる○器に食物の盛りあまりたる。

第二十段

萬事に心つかひして、手持よければ、衣服器物も、思ひの外保つものなり。さるをしだらなく、手あらく取用ふれば、暫時の間に破れ損はれて、修覆することも、洗

二十一

濯する事も出来ぬやうになり。さりとして、なくては叶はぬものなれば、其儘にして所用を足す。其賤しげなる有様は、見る眼もわびしく。その心ばへさへ、おしはかられてあさまし。

神佛は、殊に不淨を惡み、穢を忌嫌はせ給ふなり。不潔の家に祭ることは、誠に勿體なき事なり。元來不淨は、賤しきばかりにあらず。禍を招き、諸の惡を長ず。明德を味まし、智分を失ひ、人として禽獸にも如かず。見よ、犬猫の類も、清淨の處を避けて、不淨の處に放尿す。之に由りて、知れ、清淨は、福德、諸善尊貴の基たり。其心を清淨にし、其身を清淨にし、その物事を清淨にする。これ日々の祈禱にして、天地神祇佛菩薩に對し、何よりの供養なり。孔子曰、丘之禱久矣。又曰、獲罪於天、無所禱也。と。不潔不淨は、罪を天に獲るの道と心得べきなり。

吾幼穉の時、母の教に曰く、厠には、厠を守護するの神あり。殊に不淨を惡み給ふ。故に厠を汚すものは、必ず神罰ありて、病を得ると。此言は、唯に童蒙を戒むる爲めのみにあらず。昔の人は、都てかく信じ。節分の夜は、此厠の神にも、燈明を奉るなり。孔子曰、不愧于屋漏と。かゝるやさしき心ばへにして、萬事に慎しみ深

第二十二段

三

第二十四段

かるべし。

一束の葉、一條の繩、一枚の紙、一縷の糸も、必ずその入用の程を計りて。其餘は、妄に遣ひ棄つべからず。抑も些少のものも、皆悉く人の勤勞の結果なれば。之を受くるの福分なきときは、たとひ片紙寸繩と雖も、我有にあらざるなり。ざるを容易に思ひなし、塵埃と共に取すて、かへりみざる。是みづから己が福分を棄つるなり。

我物を物として、之を愛すれば。一髪の微も、みだりに抜き棄つべからず。此心なきものは、身を傷ひ、家を破りて、猶悔ゆることを知らず。一念の迷、萬劫の禍となり。生々の處に、裸蟲の身を受く。現に世に貧賤薄福の人の、みづから己が物を賤しみて、他の物を羨み。動もすれば、天物を暴殄して、後の憂を顧みざる。是皆生々の處に、顛倒して心を用ひし餘習なり。元來一切衆生の有様は、心色の二法より、現はれ来る。是を五蘊と名づく。色と受と想と行と識との五つなり。色とは物なり、物あれば、此心に受納するを受といふ。受に依りて想あり、想に依りて行あり、行に依りて識あり。此受想行識を以て、凡夫の心となすなり。されば

物なければ、受なし。受なければ、心生ぜず。心生ぜざれば、一切の衆生なし。是において知れ、物は一切衆生の依法なることを。この依法に分あり、これを我有と名づく。夫れ蘊とは、蘊蓄積集の義なり。是故に物の蓄積するを、色蘊と名づく。近く喩へて言はゞ、身體も物の蓄積なり。其蓄積を失ふときは、身體も死滅に歸す。大凡山河大地日月星辰より、一介の微物に至るまで、悉くこの色蘊にあらずと云ふことなし。其蓄積を失ふときは、天地も壞滅に歸す。此理をよくよく辨へて、萬事を執り行ひ。吾物を受用して盡さざるを、儉約といふ。天地の恩徳を尊び、衆生の果報を恐れ、慎しむこと、儉約の道に過ぎたるはなし。

吾に古印一類あり、其篆文曰、留、有、餘、不、盡、之、功、以、還、造、化、留、有、餘、不、盡、之、祿、以、還、朝、廷、留、有、餘、不、盡、之、財、以、還、百、姓、留、有、餘、不、盡、之、福、以、還、子、孫、と。是れ誠に盛徳の言なり、されど之れを一心に約すれば、一の微物をも、妄に費さざるの一念のみ。

わが幼穉の時、食する毎に飯をこぼして、席にちらす、わが母教へて曰く、飯は人の命なり。汝一々拾ひて、更に戴きて之を食せよと。われ終身飲食に乏しからざるは、わが母の餘慶なり。

第二十五段

第二十六段

論語郷黨篇曰、食、不、厭、精、繪、不、厭、細。

食は飯なり、食の精なるは、則ち能く人を養ふ。繪の粗なるは、則ち能く人を害ふ。

食饘而餲、魚餒而肉敗、不食、色惡、不食、臭惡、不食、失饪、不食、不時、不食。

饘とは、飯の熱濕に傷るゝなり。餲とは、味の變ずるなり。魚の爛るゝを餒といふ、肉の腐るゝを敗といふ、色の惡き臭の惡きは、未だ敗れざるも、色臭の變ずるを云ふなり。饪とは、烹て成熟するの程なり。不時とは、五穀果實の未熟なるなり。此等は、皆以て人を傷ふ、故に不食となり。

割不正、不食、不得其醬、不食。

肉を割きて、方正ならざるものは、食はず。又肉を食ふには、醬を用ふ。其宜しきを失すれば、食せざるなり。

肉雖多、不使勝食氣、惟酒、無量、不及亂。

食は、殺類を以て主となす。故にたとひ肉多く用ふるも、殺類より勝たしめずとなり。惟酒は、人の爲めに歡を合す。故に分量なしと雖も、醉を以て度とな

し。禮容を亂り、氣血を亂るに至らしめずとなり。

沽酒市脯、不食。

沽市は買ふなり、店賣の飲食物を買ふをいふ。不潔不淨にして、或は人を傷ふを恐るゝなり。

不撤薑食。

薑は神明に通じ、穢惡を去る故に、不撤なり。

不多食。

度をばかりて、食り食ふべからずとなり。

此數語は、孔門の教なり。大聖孔夫子にして、其心を飲食の事に用ひ、其教の丁寧深切なる、と斯の如し。亦以て民命を重んじ、人事を慎しむ所以を知るべし。夫れ仁の術は、多方なりと雖も、人を養ふを以て大なりとなす。人を養ふの道、多方なりと雖も、食を供するを以て重しとなす。乃ち婦人内に居て、庖廚の事を主とす。心を配り、誠を致して、其道をさば。其功德は、士君子の君を輔け世を救ふと、更に異なるとなかるべし。

第二十七段

飯米は、中下品の精米を用ふべし。上米は粘着つよく、腸胃を勞し、却て養生に害あり。些少の麥を加へて炊ぐは、最もよしとす。

第二十八段

獸肉は、妄に食に供すべからず。從來我國にては、穢を忌みて食せず。明治以來西洋の風うつり、獸肉を以て、衛生滋養の隨一と爲す。されど販賣するもの、其好惡精粗を論ぜず。之を需用するもの、撰擇するの眼なく、調理するの方をしらず。爲めに不良の品を、失任して食す、却て生を傷ひ、人を害するの虞あり。或は老を養ひ、或は病後の食用の爲めに用ふるとならば、其市沽を吟味すべし。

第二十九段

古へ沽酒市脯を食せざるは、家に庖廚の設けなき賤民の、需めに供する商ものなれば。士君子の家には、用ひざるべし。今や世の開化につれて、上等の品を製するの家あり。酒の如きは、沽酒にあらざれば、求むべからず。然れども其製の善惡に疑ある、其調理の不潔に心置かるゝは、今も猶古の如し。されば古人の心を以て、今の事を行ひ。其品の撰擇を慎しむのみならず。店賣の食物は、成るべく用ひざるをよしとす。

第三十段

容易に煮焚して取食ひ、或は甘しとし、或は味なしとす、是極めて賤しきもの、仕

第三十一段

業なり。大凡食物は、調理鹽梅、その宜しきを得るときは、いかなるものも、味よきものなり。手数を厭はず、深切を盡して、之を調ふるときは、豆腐菜根も、上味として、王侯に供すべし。世に茶道なるものあり、頗る此事に精し。其道の人に就きて、之を習ふも、婦道の一なるべし。

庖厨に蓄へ置くべきものは、味噌、酢、醬油、鯉節、辛子、胡麻、干椎茸、黑豆、小豆、豌豆、天竺豆、海苔、若和布、燒狀、氷豆腐、昆布、大根の切ぼし、葛の粉、砂糖、魚のひもの漬物、類菓子、は干菓子をよしとす。總じて臭の悪しきもの、腐敗しやすきものは、蓄へ置くべからず。

邸内に、一二坪の餘地あらば、野菜を植うべし。其種類には、生姜、ちさ、唐辛子、しんきく、ひともし。夏季には、茄子、さうり。などを、一二株うゑて、花實の成るを愛し。天地生々の氣を感じ、野趣自然の情を養ふべし。これを培養するには、米のとぎ汁、又は人造肥料などいふ悪臭のなきものを用ふべし。

前栽には、四季をりくの花咲く草木を植ゑ置き、て神佛及び祖先に供し。又は活花の料となすべし。庭木として、形こび苦しげなるは、見るも佻しく、なくもがな

第三十二段

第三十三段

第三十四段

と思はるゝ。さればとて昔しよりあるものは、ほり捨つべきにあらず。性にまかして、己がまゝになしおけば、おのづと天然の姿にかへるものなり。梅、櫻桃の三種は、必ずあるべきなり。梅は一重櫻は八重をよしとす。一重櫻は、打ち詠むるにはよけれど、家にありては、心せつかれて、あはたゞし。薄色の桃は、何となく心やすき心地せらる、白桃は、いかに清淨潔白なり。柳の緑、春風に吹かるゝさ、花にもまさりて、さらにめでたし。海棠、李、杏、林檎、梨、玉椿、木蓮、木瓜、つじ、藤、山吹、小米、花小粉、圓花、蘇枋、花櫻、梅、花、薔、草、金、蓮、冬豆、の花などは、ことごとく春のものなり。夏のものには、山梔子、杜鵑、花、百合、紫、陽、花、天、門、冬、夏、菊、牡丹、芍、藥、杜若、芥子、繡線、花、時、計、草、未、央、柳、撫、子、紫、蘭、百、日、紅、玉、簪、花、釣、鐘、草、鸞、草、葵、水、引、慈、姑、河、骨、菖、蒲、秋のものには、木、槿、朝、貌、秋、海棠、桔、梗、藤、袴、女、郎、花、菊、野、菊、慈、苧、木、芙蓉、桂、おし、ろ、い、の、花、兜、菊、鷄、頭、刈、萱、紫、苑、我、木、香、蓼、蓼、は、河、蓼、を、よ、し、と、す。冬のものには、臘、梅、寒、椿、寒、菊、水、仙、茶、の、花、山、茶、花、寒、梅、そ、の、外、あ、り、た、き、も、の、は、松、竹、枇、杷、柚、の、木、無、花、果、山、椒、柘、榴、南、天、竺、雪、の、下、蕨、狗、脊、蕨、こ、う、じ。

前栽の花、後園の野菜もの、時によりて、知音の人に贈るは、中く心に、心やさしき

業なり。もらふ人もおもひつきせぬ心地すべし。總じて音物は安らかなるものをよしとす。食物などを贈るは、殊に用捨すべし。生魚、蒸菓子、は臭味損ひやすく。人を害するの虞れあり。但、炭、焚の料にとて、珍らしき品贈るはよし。名産土産など、他より到来のまゝなど言ひておくりたる、心遣ひのほど見えて、一入情ふかし。

第三十五段

見めをつくり、家にふさはしからぬ贈りものは。いかなる場合にも、すまじきことなり。又、此方より物おくれれば、彼方よりも心遣ひして返しするが禮なれば。彼是義理合ひて、財を散じ、苦勞を重ねる端ともなりぬべし。只時に應じて、禮義に叶ひ、交りのつきせぬほどをはかり、人情を盡すをよしとす。孔子曰、孰謂微生高直、或乞醯焉、乞諸其隣、而與之。深切ぶりて、なき袖をふるは、心もくるしく、餘所の見るめも、いたくし。只有りのまゝの志こそ、いつも變らてめてたかるべけれ。曲禮曰、貧者、不以貨財爲禮、老者、不以筋力爲禮。

第三十六段

富貴にして驕る人には、交るべからず。飲酒を好む人には、交るべからず。虚言する人には、交るべからず。出家法師には、交るべからず。賤劣の人には、交るべ

からず。貪欲深き人、瞋恚強き人、愚痴多き人、身世を輕んずる人、此等は、其交りに心すべし。禮を盡して、交りを求むべきは、貧にして、道を樂しむ人、勤儉なる人物の哀れを知る人、學をこのみ、信實ある人。孔子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得、知と親族以外の交りは、猶里を擇びて、焉に處るに異ならず。

第三十七段

富貴の人は、富貴の相あり。貧賤の人は、貧賤の相あり。道德ある人は、有徳の相あり。其善惡邪正は、勿論、仔細に言へば、其人の境遇と心術と、時々刻々、其形に現はれて、隠るゝことなし。況や、其言行に照る人を。且相互に愛憎の情、貪欲の心に、駢り使はるゝが爲めに、この眼前の事を見ず。平易の心を以て、これを撰ば、一々、誤ることなし。孔子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。

第三十八段

婢僕も一家に同居して、事を共にするものなれば、其人柄を撰ぶこと肝要なり。

第三十九段

婦人日々の行は、家事の外なし。故に、其婢僕を召使ふは、家事の手傳人と心得べし。必ず、己が氣儘に使役すべからず。其事を命ずるにも、言葉つかひを溫和にして、禮義あるべし。苟も男子の語勢をなすべからず。其事をかくせよ、其

物をかくなせなど言はず。かくしてくれよ、かくありたし、かくてはあしからんなど言ふべし。彼等の身の上を思ひやりて、萬事いたはり、往く先のためをもはかりて、世話すべし。これ皆人の主たるもの、當然のつとめなれば、相構へて恩にかくべからず。たとひ不調法なる事ありとも、さすがは、吾に従ひ使はるゝほどのものなれば、前世の果報つたなく、魯鈍に生れつきしものよと、勘辨すべし、ゆめ／＼不足の心を、生ずべからず。但目上を侮り、主人を蔑にし、己が働きぶりを誇り、さし出がましきは、教へなきもの、常なれど。かゝるものゝ、そのなすがまゝに任せ置かば。遂には禮義を亂り、萬の事を荒める方にのみとりまはし、家風を失ひ、一家のうち、賤民のありさまになりぬべし。かやうの者は、よく／＼言ひさとして。改めざる時は、速に暇を遣はすべし。殊に幼稚の子供あるうちは、此事最も大事なり。古き諺に、人多ければ累多し、又人を使へば心をつかふべしと。いかにも諺の通りなれば、人多く使ふよりは。成るべくみづから立ちたらしき家事を齊へるが、こゝろやすかるべし。

第四十段

普賢菩薩は、衆生濟度の爲め、人の奴婢となりて、薪水の勞を助け給ふと聞く。世

に忠實なる奴婢あるは、全く普賢菩薩の願行を成就するものなるべし。深く心に尊敬すべきことなり。

第四十二段

諸の善き事は、神佛の恵なり。諸の悪しき事は、人のしわざなり。

第四十二段

神佛に祈願するには、只無事を祈るべし。貪欲がましき事、愚痴がましき事は、却て己が罪を増長し、神佛の恵を失ふなり。

第四十三段

八卦占考、其他吉凶禍福に涉ることは、たとひ神佛に寄託して、眼前に奇靈驗あるとも。道を守り、正を持して、決して信をよすることなかれ。只仁を行へば福義を行へば吉と、一心に思ひ定めて、造次頓沛にも忘れざる、是れ大學の謂はゆる止るを知るなり。此心の決定と不決定とが、君子小人の境と知るべし。

第四十四段

人相手相などにて、其人の吉凶を占ふ法あり、これはさもあるべし。善をなせば、善人の相あらはれ、惡を思へば、惡人の相あらはるゝは、必定なり。兎にも角にも、身を慎しみ、徳を思へば、萬事吉ならざるはなし。

第四十五段

病に臥して、心をなやみ、苦しむものゝ爲めに。誠を盡して、神佛に祈願すれば、必ず驗あり。苦悶なきものには、驗なし。

第四十六段

世の人の、忌み憚ることは、その道理のたしかならざること、雖も、必ず犯すべからず。

第四十七段

孟子曰、萬物皆備於我矣と。之をおのれに求むれば、餘りあり、これを人に求むれば、足らず。是故に君子は、思ふこと其位を出でず。我道を道とし、我有を有とし、これを自得して、勤めて怠らざれば、則ちこれを左右に取りて、其源に逢ふなり。祖先を祭りて、其始の極りなきを思ひ。子孫を養ひて、其終の極りなきを思ひ。

第四十八段

天地神祇の恩徳を感じて、其福德の極りなきを思ひ。此無量無邊の境に心を置きて、吾道を行ふべし。

第四十九段

吾道は、吾分にあり。故に分を守り、分に安んじ、分を盡し、分に勤む、皆悉く吾道を行ふなり。禮も分に由りて定り、義も分に由りて生ず。廉耻品操も、分を知るに由りて知る。是故に己が分を知らざるものは、無道の人なり。孔子曰、君君、臣臣、父父子子と。夫婦兄弟、尊卑親疎、各々其分の如くして、わが誠を盡すべし。假令萬事に如才なき人も、一誠なければ、總ての行道を去る事遠し。

第五十段

吾に二頃の田あり、敢て他の田の廣狹沃瘠を念とせず。一向ら耕耘に勤め、樂し

第五十一段

みて、其果實の成熟をまつ。即ち此等の趣を以て、吾分を守り、吾分を盡すといふなり。今人察せず。動もすれば、此道を行ふを以て、陋となし。妄に非望を懷き、機智を弄し、詐術を逞くし。相奪ひて、以て開化の風となす。其世を亂り、人を害ふの有様は、誠に言ふに堪へざるものあり。

富と貴とは、人の欲する所なり、貧と賤とは、人の惡む所なり。吾あながちに其欲する所を捨て、その惡む所に安んずべしと云ふにあらず。但みづから其分を盡して、其惡む處を去るべきをいふのみ。孔子曰、富與貴、是人之所欲也、不以其道得之、不處也、貧與賤、是人之所惡也、不以其道得之、不去也と。又曰、貧而無怨、難、富而無驕、易と。其難易の沙汰は、しばらくこれを措き。かれ貧者は、みづから勤めずして、世を怨み。かれ富者は、みづから戒しめずして、人に驕る。人々其分を忘れて、其情を恣にするときは、遂に人間も人間の果報を失ひ、一種獐猛なる惡獸と化するに至るべし。されば此有様に鑑み、此道理を臆念して。苟にも世間の惡俗に倣ふべからず。

第五十二段

古來外國の人、我皇國を稱して、君子國と云ふ、其良風美俗を嘆賞するなり。明治

第五十三段

維新の後は、貴賤其序を失し、禮その節を亂り。加之歐米の惡俗を移し來りて、おぼろけに之に倣ひ、今やこの混亂の風俗となる。夫れ性善の説は、先哲の格言なり。今人あり、無禮を顧みず、不義を耻とせず、一向らぶのれを利するを以て徳とす。若し之に對して、無禮者不義者と言はば、即ち必ず怒りて且つ怨みむ。されば今人の過は、禮義の何者なるを知らざるにあり。決して古今其人を異にし、無禮不義を好むにあらざるなり。孔子曰、恭而無禮則勞、慎而無禮則意、勇而無禮則亂、直而無禮則絞。意は恐懼する貌なり、絞は急切なり、禮なしとは、禮を知らざるを云ふ、其恭と云ひ慎と云ひ、勇と云ひ、直と云ふ、皆人の生來の美德なれど。禮を知らざれば、風を亂り俗を害ふに至る。故に禮はみづから習ひて、以て子孫に教ふべし。歐風米俗と雖も、一概に惡しきにあらず。其善なるものは、謹直、勤勞、愛敬等の徳行を以て、其風俗を爲すがゆゑに。之に倣ふことは、自分勝手をのみ臆念するもの、能くすべきにあらず。抑も善を爲すを難んずるは、人の常情なり。此常情に任せ、各々己が都合よき事柄を立ひ立て、以て文明の風開化の俗と稱し。上下滔々、知らず識らず、彼國の弊風惡俗に移るなり。此事情を能く心得て、世間は

第五十四段

世間の有様となし。移らず違はず、和して以て其惡俗を避くべきなり。禮は嚴を貴ばず、和を貴ぶ。繁を貴ばず、簡を貴ぶ。人各々その身分に應じ、其事情に従ひ、節略して之を行ふべし。但己が氣隨に任せ、能ふべくして敢て勉めざるを、非禮の人と爲すなり。孔子曰、克己復禮爲仁。一日、克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。又曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。今人禮儀を以て、鐵格のごとく思ふは。放縱自儘にして、更に己に克つての工夫なきが爲めのみ。決して禮儀の繁嚴にして、行ひ難きにあらざるなり。孔門の顔子は、一簞の食一瓢の飲、陋巷に在りて、至りて貧しき人なり。然るに孔夫子の教を聞き、即ち曰く、回不敏なりと雖も、請ふ斯語を事とせんと。即ち如何なる有様にありても、人の行ひ得べきが禮儀なり。

第五十五段

其身貧しくして、酒を供すること能はざれば、茶を供すべし。茶を供すること能はざれば、湯を供すべし。湯を供すること能はざれば、水を供すべし。其身病みて、門に迎ふること能はざれば、戸に迎ふべし。戸に迎ふること能はざれば、室に迎ふべし。室に迎ふること能はざれば、人に頼りて懇懃を致せ。禮儀の大經を

學びて是を本とし。其行の寛嚴節略は其身分事情に應ずべし。孔子曰。麻冕禮也。今也純。儉吾從衆。拜下禮也。今拜乎上。泰也。雖違衆吾從下と。儉は儉約なり。泰は驕慢なり。其身分に應じて儉約とならば古禮に違ひて俗に従ふも非禮にあらず。驕慢は惡徳なり如何なる場合にも従ふべからず。程子曰。君子處世事之無害於義者從俗可也。害於義則不可從也と。此程子の言も心得置くべし。

婦人の子を産み之を育て之を教へて成人に至らしむるは至りて重き天職なり。若し其道を得ざれば其子生れて病弱醜陋或は夭折し或は成長するも無智昏昧にして是非善惡を辨せず。禮儀を無みし淫樂に耽り諸の惡行を長じて父母近親の累となり。天下國家の賊となる。此故に婦人懐胎の始より胎教の道あり。列女傳曰。古者婦人妊子寢不側坐不邊立不蹀不食邪味。割不正不食。席不正不坐。目不視邪色。耳不聽淫聲。夜則令。警誦詩道正事。如此則生子形容端正才過人矣と。善人を生むも惡人を生むも母氏胎教の時にあり。慎しまざるべけんや。

子に教ふる第一の心得は言と容となり。言は明瞭にして賤しからぬ様に教ふべし。容は端正にして禮法行儀に叶ふやうに教ふべし。黃鳥も音を學ぶを知

第五十六段

第五十七段

第五十八段

る野馬も法度を守るを知る。則ち人の父母たるものはみづから其身を修めて之を子に習はしむれば善に従はざるものなし。

幼穉の者は唯悲喜の情のみありて分別の心なし。故に之を稱譽して善に移せば喜び勇みて従ふものなり。其之を戒め懲すことは惡習の萌となる時にのみ行ふべく。決して己が喜怒の情に任せて叱責すべからず。詩曰。天生蒸民有物有則。民之秉彝好是懿徳と。童蒙の教は人となるの道を教ふるなり。即ち物を教へ物の名を教へ物の則を教ふべし。これ啓蒙の道なり。其才氣を助長し慧敏を求むるは子を傷ふの道のみ。易曰。童蒙求我。彼が問ふにまかせて啓發すれば漸く義理を辨ずるに至る。然るに父母の欲情を以て其子の利口才發を求む。これ童蒙の我に求むるに非ずしてわれ童蒙に求むるなり。如此んば彼の宋人の苗をぬくが如く枯死せざるもの殆ど稀なり。禮記内則曰。凡生子擇於諸母與可者必求其寛裕慈惠温良恭敬慎而寡言者使爲子師。

寛裕慈惠温良恭敬慎而寡言者は婦人の徳行なり。子師を撰び乳母を置くは

姑く之を措き。母氏の德行斯くありて其子を教へ導くに足るなり。
子能食食教以右手能言男唯女俞男鬻革女鬻絲。

能く食すれば右手に箸を取り左手に器を取ることを教ふ。能く言へば男には速にして正しく女には緩にして優しく教ふ。只唯俞のみを言ふにはあらず。

六年教之數與方名

數は一十百千萬なり方は東西南北なり數と方とは物其物の名にあらず。故に幼稚の時は曉りがたし。六年にして始めて教ふ。之を始めとし諸の動詞形容詞を教ふべし。小倉の百首を教ふる等は尤もよしとす。

七年男女不同席不共食

席はむしろと訓ず今の盥なり。坐蒲團などにも通ず。漸く禮儀に就かしむるなり。不共食とは器を別にして。配膳して食せしむるなり。

八年出入門戶及即席飲食必後長者始教之讓

八年には小學に入る。童子始めて外師に就く家庭の正しき門戶より出入せ

しむべし。席に就きて飲食すること必ず長者に後るゝは尊長を敬すること教ふるなり。是より以後は尊卑長幼の序を正しくして辭讓の道を教ふるなり。

九年教之數日

日を數へ月を數へ朔望を數へ春夏秋冬を數ふるなり。

十年出就外傳居宿於外學書計衣不帛襦袴禮帥初朝夕學幼儀請肄簡諒

十年までは男女ともに同じ。十年にして其教を別つ。此章は男子を言ふなり。

十年を幼といふ外傳は學を授くるの師なり。外に居宿して外傳に就くを云ふ。書計は書體を學び算術を學ぶを云ふ。襦袴は襦は上衣にして袴は下衣なり。共に絹帛を用ふべからず。冬は木綿夏は布を用ふべし。禮節は其初より教へらるゝ通りに従ひて朝夕油斷なく實行して長者に仕ふるの道を學ぶとなり。簡諒は簡要にして信實なるを云ふ。

十有三年學樂誦詩舞勺成童舞象學射御

樂は音楽なり詩は詩歌なり。我國にありては謠曲亂舞又は平家琵琶などをよしとす。樂に節あり以て言を發するに節あるを教ふるなり。舞にも節あり進退動作に節あるを教ふるなり。射に正鵠あり物に對し事に處して誠を盡して中庸を撰ぶことを教ふるなり。

二十而冠始學禮可以衣裘帛舞大夏惇行孝弟博學不教內而不出。

二十にして冠す成人の道なり。禮は五禮なり五禮とは吉凶軍賓嘉の禮をいふ。父母に孝を盡し兄長に弟を盡して成人の行を立つるなり。博學不教はみづから才徳を蓄ふるを主とし未熟を以て人を誤らんことを恐れて教へざるなり。

三十而有室始理男事博學無方孫友視志。

室は妻なり男事は田を受けて役に給するを云ふ。専ら業を勤むるを云ふなり。男子三十志定まり是非善惡を撰ぶの明あり。故に博學無方にして世故に通ずるの利あり。邪路に入るの恐れなきなり。

四十始仕方物出謀發慮道合則服從不可則去五十命爲大夫服官政七十致事。

第五十九段

四十を強と云ふ五十を艾と云ふ七十を老といふ。士君子の其君に仕へ其國を治め以て世を理し民を利することは一大事なり。故に四十成徳の時を俟て治めて仕ふ。孔子曰身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也。其家貧うして祿仕するものはおのづから別なり。人の母たる者は男子終生の徳行をも心得置き。其子の躁進して權勢利祿を希求するの弊を戒しめて其操行を亂らしむることなかれ。

魯公父文伯母。

公父文伯退朝朝其母其母方績文伯曰以歌之家而主猶績懼于季孫之怒也其以歌爲不能事主乎其母歎曰魯其亡乎使童子備官而未之聞邪居吾語女昔聖王之處民也擇瘠土而處之勞其民而用之故長王天下夫民勞則思思則善心生逸則淫淫則忘善忘善則惡心生沃土之民不材淫也瘠土之民莫不嚮義勞也是故天子大采朝日與三公九卿祖識地德日中考政與百官之政事師尹惟旅牧相宣序民事少采夕月與太史司載糾虔天刑日入監九御使潔奉禘郊之粢盛而後即安諸侯朝修天子之業命盡考其國職夕省其典刑夜儆百工使無惰淫而後即安卿大夫朝考其

職畫講其庶政。夕序其業。夜庀其事。而後即安。士朝而受業。晝而講貫。夕而習復。夜而計過。無憾而後即安。自庶人以下。明而動晦。而休無日以怠。王后親織玄紵。公侯之夫人。加之以紘。綰之。內子。爲大帶命婦。成祭服。列士之妻。加之。以朝服。自庶士以下。皆衣其夫。社而賦事。蒸而獻功。男女效績。愆則有辟。古之制也。君子勞心。小人勞力。先王之訓也。自上以下。誰敢淫心。舍力。今我寡也。爾又在下位。朝夕處事。猶恐忘先人之業。況有意惰。其何以避辟。吾冀而朝夕修我。曰必無廢先人。爾今日胡不自安。以是承君之官。余懼穆伯之絕祀也。

下禪尼

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝ事ありけるに。すゝけたる上障子の破ばかりを禪尼手づから小刀して。きり廻しつゝはられければ。兄の城介義景その日のけいめいして候ひけるが。給りてなにかし男にはらせ候はん。さやらの事に心得たる者に候ふと申されければ。其男尼が細工によも勝り侍らじとて。猶一間づゝはられるを。義景皆をはりかへ候はんは。遙にたやすく候ふべし。斑に候も。見若しくやと。重ねて申されければ。

常も後はさばくとはりかへんと思へども。今日ばかりは。わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して。用ふる事ぞと。若き人に見ならはせて。心つけんためなりと申されける。いとありがたかりけり。世を治むる道。儉約をもとゝす。女性なれども。聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を。子にてもたれける。誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

女子十年不出。姆教婉婉聽從。執麻枲。治絲繭。織紵組紃。學女事。以共衣服。觀於祭祀。納酒漿。籩豆。禮相助奠。

十年不出とは。女子十歳にして。門を出て。遊戯せざるを云ふ。其出入共に法度あり。必ず女師に従ふべし。姆は女師なり。婉とは。言語の柔順なるを云ふ。婉とは。容貌の柔順なるをいふ。聽とは。事々に受くる所あるを云ふ。従とは。尊長の命に従ひて。一も違なきを云ふ。即ち女徳を教ふる所以なり。麻枲を執るとは。麻を績ぐことなり。絲繭を治するとは。蠶を飼ひ。絲を取るなり。紵を織り。紃を組むとは。布帛を織り。衣服を縫裁する等のことを云ふ。是皆女事を教へ。人の婦となり。人の母となるものゝ徳を備へしむるなり。祭祀

は先祖を供養するなり。酒漿、籩豆、醢醢は、飲食物を祭具に盛りて、之を進むる事なり。禮相助、奠とは、長者を助けて祭の禮を補助するを云ふ。即ち先祖を祭祀するの禮を教ふる所以なり。此三教は、女子の専ら學ぶべき事を云ふ。其書計を學び、幼儀を學び、樂を學び、詩歌を學ぶ等は、男子に異なる事なし。女子に教ふるの樂は、歌琴、橫笛、琵琶、箏など可とす。三味線は、其音輕浮にして、鄭聲に近し。教ふべからず。

十有五年而笄。二十而嫁。有故二十三年而嫁。聘則爲妻。奔則爲妾。

聘は聘禮なり、奔は聘を待たずして、男子に従ふを云ふ。妻之爲言齊也とて、聘禮せられて、夫と敵體するを得る。天地の其徳を合するが如し。妾之爲言接也とて、君子に接見するを得て、之と敵體するを得ざるなり。

詩曰、氓之蚩蚩、抱布貿絲。匪來貿絲、即我謀送子。淇水至、于頓丘。匪我愆期、子無良媒。將子無怒、秋以爲期。乘彼坳垣、以望復關。不見復關、泣涕漣漣。既見復關、載笑載言。爾卜爾筮、體無咎言。以爾車來、以我賄遷。桑之未落、其葉沃若。子嗟嗚兮、無食桑葚。子嗟女兮、無與士耽。士之耽兮、猶可說也。女之耽兮、不可說也。桑之落矣、其黃而隕。自我

徂爾、三歲食貧。淇水湯々、漸車帷裳。女也不爽、士貳其行。士也罔極、二三其徳。三歲爲婦、靡室勞矣。夙興夜寐、靡有朝矣。言既遂矣、至于暴矣。兄弟不知、咥其笑矣。靜言思之、躬自悼矣。及爾偕老、老使我怨。淇則有岸、隰則有泮。總角之宴、言笑晏晏。信誓旦々、不思其反。反是不思、亦已焉哉。以て戒むべし。

曲禮曰、幼子常視母誼、必正、方不傾聽。

視は示すなり、猶教ふると云ふが如し。苟にも欺誑すべからざることを示すなり。正方とは、正しく一方に向ひ、身心をして端正ならしむるなり。傾聽とは、耳を傾けて聴くを云ふ、人に馴れて、敬を失ふを戒しむるなり。

内則曰、子事父母、雞初鳴、咸盥漱。櫛總、髮總、衣紳、左右佩用。衿纓、綦履、以適。父母舅姑之所及、所下氣怡聲、問衣煖寒、疾疴瘠癢、而敬抑搔之。出入則或先、或後、而敬扶持之。進盥少者奉槃、長者奉水、請沃盥。盥卒、授巾。問所欲、而敬進之。柔色以溫之。父母舅姑必嘗之、而後退。

男女未冠笄者、鷄初鳴、咸盥漱。櫛、拂髦、總角、衿纓、皆佩容臭、味爽而朝、問何食飲矣。若已食、則退。若未食、則佐長者視具。

凡內外鷄初鳴成盥漱衣服欵枕篋灑掃室堂及庭布席各從其事在父母舅姑之所有命之應唯敬對進退周旋慎齊升降出入揖遊不敢噦噫咳欠伸跛倚睥視不敢唾涕寒不敢襲襖不敢搔不有敬事不敢袒裼不涉不擗裳衣衾不見裏少事長賤事貴共帥時時是と同じ。

曲禮曰凡為人子之禮冬溫而夏清昏定而晨省出必告反必面所遊必有常所習必有業恒言不稱老。

曲禮曰凡為人子者居不主奧坐不中席行不中道立不中門食饗不爲饗祭祀不爲尸孟子曰徐行後長者謂之弟疾行先長者謂之不弟

曲禮曰見父之執不謂之進不敢進不謂之退不敢退不問不敢對

年長以倍則父事之十年以長則兄事之五年以長則肩隨之

尊客之前不叱狗讓食不唾三十四禮

聽於無聲視於無形不登高不臨深不苟訾不苟笑

曲禮曰父母存不許友以死

禮記曰父母在不敢有其身不敢私其財

內則曰子婦無私貨無私畜無私器不敢私假不敢私與

曲禮曰父召無諾先生召無諾唯而起

士相見禮曰凡與大人言始視而中視抱卒視而毋改衆皆若是若父則遊目毋上於面毋下於帶若不言立則視足坐則視膝

禮記曰父命呼唯而不諾手執業則投之食在口則吐之走而不趨親老出不易方復不過時親辨色容不盛此孝子之疏節也

曲禮曰父母有疾冠者不櫛行不翔言不惰琴瑟不御食肉不至變味飲酒不至變貌笑不至矧怒不至罵疾止復故

內則曰父母雖歿將爲善思貽父母命必果將爲不善思貽父母羞辱必不果

祭統曰父子之祭也必身親蒞之有故則使人可也

曲禮曰君子雖貧不粥祭器雖寒不衣祭服爲宮室不斬於丘木

王制曰大夫祭器不假祭器未成不造燕器

孔子曰父母生之續莫大焉君親臨之厚莫重焉是故不愛其親而愛他人者謂之悖德不敬其親而敬他人者謂之悖禮

第六十段

右の諸章は、男女成童の時より漸く習ひ。有室婚嫁の始より必ず行ふべき儀範なり。古制三十にして室あり、父子相續ぎ、其子の室ある時は、父母舅姑の年は六十以上七十なるべし。故に之に事ふるの道も、更に慇懃を盡すなり。禮法として書立つれば頗る繁苛なるに似たれども。これに習ひ、これを行ふときは、日常平易の道なり。畢竟は、誠實愛敬和睦の心を行に現はす事なれば。性情の正しき人は、學ばず習はずして、おのづから其行の此儀範に叶ふもの多し。但禮として教へ習へば、萬人が萬人ながら、之を行ふことを得る、これ修身齊家の道なり。

第六十一段

子を育ふには、幼稚の時より、其子の性質を察し、深く注意して教ふべし。愚なるが如きは、正直の質なり。智あるが如きは、輕薄の質なり。やがて欺誑の心を長ず。弟妹にして其兄姉に不弟なるは、成長の後、必ず不孝の子となる。母氏たるもの、やゝもすれば、この不弟の子を愛し。慧敏の子を喜び。助けて以て、其性癖を長ず。即ち子を書ひ、家を破るの道と心得べし。元來子弟を教育するは、父兄の任なりと雖も。其徳器の成ると否とは、悉く母た

第六十二段

第六十三段

るもの、輔導にあるなり。世の不孝の子の、其父母の戮となるを見るに。大概は、其母親のみづから恣にして、其子を慈育せず。又は一向らに愛着して、教戒することを知らず。俗に所謂捨て育ての結果にあらざるはなし。孔子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣。浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣。と。浸潤、膚受に移されざることは、君子の難する所なり。而して其子の、其母に於ける、即ち浸潤、膚受の甚しきもの。童蒙をして、其弊を受けざらしむるは、猶水に入りて溺れず、火に入りて焼けざるよりも難し。且つ父の其子に教ふるは、簡にして嚴なるを尙ぶ。若し繁細に涉るときは、教戒苛刻に失して、父子の親愛を損ふ。故に外は良師を撰びて、これに就かしめ。内は母氏の訓言を待ちて、始めて慈父の道を成す。孔子謂、伯魚曰、女爲周南、召南矣乎。人而不爲周南、召南、其猶正牆面而立也與。

第六十四段

陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立、鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩、無以言。鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭。曰、學禮乎。對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。聞斯二者、陳亢退而喜曰、問一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

第六十五段

伯魚は孔夫子の子なり。夫子の其子に於ける其教の簡なる亦以て察すべし。孟子曰、世俗所謂不孝者五、惰其四支、不顧父母之養、一不孝也、博奕好飲酒、不顧父母之養、二不孝也、好貨財、私妻子、不顧父母之養、三不孝也、從耳目之欲、以爲父母之戮、四不孝也、好勇鬪狠、以危父母、五不孝也、其四支を惰りて、業を勉めず。博奕飲酒を好み。貨財を貪り、耳目の欲を恣にし。又は勇を好みて、亂を爲す、是皆小人の甚しきもの。其父母に不孝なるは、姑く措き、人間にかゝる者の生れ來るは、誠に嘆かばしき限りなり。其禍を受くるものは、豈唯獨り父母のみならんや。人を傷ひ世を害し、其國家の憂となること、敵國外患よりも甚し。是皆その父母たるもの、其子に教へざる禍なり。元來眼耳鼻口四支五體の人間に類するを以て、満足なる人と思ふは、大なる過なるべし。鬼畜にも、眼耳あり、四支あり、其外形の聊か異なるを以て人と云はゞ、豺狼は羊豕に異なるを以て、おのづから神とも稱すべし。されば人は人の徳を備へ、人の心を存して、即ち人なり。眼耳鼻口四支を使ふ主にして、人の徳の全からざるは、外面人に似たる獸物のみ。是故に婦人懐胎の時、は男を念ぜず、女を念ぜず。唯其子の形の端正にして、六根具足し、四支五體の満

第六十六段

足ならんことを念ずべし。生産の後は、其心の端正にして。諸惡を去り、衆善に従ひ、人の徳を成就せんことを一向ら念ずべし。此母氏の一念徹底すれば、天下に不善の子なし。法華經普門品に、觀音の功德を説きて、念彼觀音、力刀刃斷々壞とあり。觀音菩薩は、慈悲の一念なり。この慈悲の一念を以て、一切衆生の心音を觀じて、之を救ひたまふ。能念の菩薩と、所念の衆生と、一心不亂の時、即ちこの不可思議の功德を現す。母氏の其子に於ける、全く此法門の神秘を、實地に修行する事と心得べし。佛說心地觀經報恩品は、人の臣子たるもの、朝夕奉讀すべき經なり。男子女子に限らず、成童の頃までに訓讀して、必ず教ふべし。われ十二歳の春の頃、父君の江府の役に従ふ。十三歳にして、父君身まかりたまひし。十七歳にして、戈を擔ひ軍に従ひ、亂世に成長す。氣を負ひ勇を好み、操行不軌、無禮を以てみづから慢じ、疎放を以て人に傲る。曾て人道人事の、何者たるを知らず。其幸にして、免れて今日あるは。八歳の頃より、十一歳まで、父君の我に教訓ありし遺徳なり。凡この三四年間に、孝經大學、及び論語三卷を學ぶ。父

君日々みづから句讀を授け。義理の會得し易きは、丁寧反覆解釋して、教訓ありしなり。其我心に記して忘れざる訓戒は、即ち遠境に遭遇し。或はみづから悔ゆる時、或はみづから怨む時、また或は無事に苦しむ時、忽然として想ひ出し。肅然と畏れ、心に耻ぢ、身に省みて。冷汗背をうるほす事あり。○十目所視、十手指其嚴乎。○小人間居、爲不善無所不至。○所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色。○日日新、又日新。○於止知其所止、可以人而不如鳥乎。○欲正其心者、先誠其意。○心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。○人莫知其子之惡、莫知其苗之碩。○如保赤子、心誠求之、雖不中、不遠矣。○所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。○好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身。○有朋自遠方來、不亦樂乎。○君子務本、本立而道生。○巧言令色、鮮矣仁。○吾日三省吾身。○過則勿憚改。○慎終追遠、民德歸厚矣。○詩三百、一言以蔽之、曰思無邪。○溫故而知新、可以爲師矣。○君子不器。○學而不思、則罔思而不學、則殆。○不知爲不知、是知也。○非其鬼而祭之、諂也。見義不爲無勇也。○禮與其奢也、寧儉。喪與其易也、寧戚。○其爭也君子。○獲罪於天、無所禱也。○成事不說、遂事不諫、既往不咎。○惟仁者能好人、能惡人。○造次必於是、顛沛必於是。○觀過

斯知仁。○朝聞道、夕死可矣。○士志於道、而耻惡衣惡食者、未足與議也。○參乎、吾道一以貫之。○君子喻於義、小人喻於利。○父母在不遠遊、必有方。○父母之年、不可不知也。○君子欲訥於言、而敏於行。○德不孤、必有隣。○事君數、斯辱矣。朋友數、斯疏矣。○道不行、乘桴浮海、從我者、其由與。○朽木不可雕也。○根也、慾焉、得剛。○其知可及也、其愚不可及也。○就謂微生高、直或乞醢焉、乞諸其隣、而與之。○巧言令色、足恭、左丘明耻之、丘亦耻之。○匿怨而友其人、左丘明耻之、丘亦耻之。○孟之反、不伐、奔而殿、將入門、策其馬、曰、非敢後也、馬不進也。○知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。○君子可逝也、不可陷也、可欺也、不可罔也。○身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。

右聖經の語は、即ち吾れ能く記憶して、忘れざるものなり。故に生長の後も、此心持を存して、甚しき邪念を生ぜず。就中十目所視、十手指其嚴乎、小人間居、爲不善、無所不至の二章は、全く吾防非止惡の心銘なりしなり。此一事は、吾みづから驗して、明にこれを知る。されば子孫を教ふるものは、必ず成童の頃までに、解し易く記憶し、易き聖教の語を選びて、之を授くべし。是暗夜の燈なり。護身の符

第六十七段

なり。吾他日汝の爲に撰びて之を授くべし。
 つれづれ草に曰く、若き時は血氣内にあまり心物にうごきて情欲多し。身をあやぶめてくだけやすきこと、珠を走らしむるに似たり。美麗をこのみて、實をつひやし、是を捨て、苦の袂にやつれ、勇める心さかりにして、物とあらそひ、心に耻ぢうらやみ、このむ所日々にさだまらず、色にふけり、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身を誤り、命をうしなへるためし、ねがはしくして、身のまたく久しからんことをば思はず、好けるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる、身をあやまつことは、わかき時のしわざなり。老ぬる人は精神おとろへ、淡くおろそかにして、感じ動く所なし、心おのづからしづかなれば、無益のわざをなさず、身をたすけて、愁なく、人のわづらひなからんことをおもふ、老て智のわかき時にまされること、若くして、かたちの老たるにまされるが如しと。吾既往を顧るに、其危きこと、誠にかくのごとし。性癖に任せて教へなければ、其身を過らざる稀なり。

兒戀草終

兒戀草の跋

このふみは、父のいたつきを熱海の里に養ふいとま。おのれのいまだ家ををさめ、子をやしなふ道にうときをあはれみ給ひて、いとも細やかに書つけて、おくり給ひしものなり。さればあしたに、をしへの道をふみまよはじと願ひ、夕べに、いつくしみのほどを、深く心にしめて、ひたすらつとめはげむべきにこそはあれ。かうとくしう、すり巻にして、世の人にみすべきにもあらざめるを、つねに隔なうかたらふ友だちの、いつか傳き、て、見まほしと切に乞るゝまゝ、書うつしてみせばやとおもへど、つたなき筆に、文のこゝろをうつしあやまらんも、いとかしこしと、父にこひゆるしを得て、いたにのほすことゝはなりぬ。そもく、人の一生の長途も、おなじ心の道つれあらば、ともに

相かたらひ相たすけて。うみつかるゝ事もあらず。此文見給は
ん人々は。かたみに婦女の道ふみならふ友となりて。我つたな
きをも捨てたまはで。いさめ導き給はん事を。かへすゞ願ふ
になむ。

明治三十四年八月

廣子しるす

以心傳

明治廿六年八月廿九日、伊豆山神社々務所に於て、
幹事及び學生への訓戒

余も今度一同と共に歸京し、教學に従事すべき等なれども。春來學舎開設の際より、病氣を押して事務に従ひし爲。大に身體の健康を損ひ、衰弱を來し。此儘にては、重病をも發すべきに付。十月上旬頃まで、此處に滞在して保養の上歸京すべし。因て暫時の離別なれば、一二訓戒を示す。學生一同、深く心得置くべし。此回の旅行、並に海水浴は、身體を鍛鍊するは勿論の事。智見を開き、經驗を積むの一端ともなりて。學生の爲に、至極の好事なりし。此事の一同無事に障礙なく行はれしは、老夫の尤も満足する所。已來毎歲夏期休學の際には、必ず例として之を行ふべし。天下を以て庭園とし、山河を以て逍遙の處となし、以て豪壯の氣を養ひ、有爲の志を長ずるは、此時機を以て尤も適せりとす。但し、誤りて風流雲水の客となること勿れ。

西歐の教育家は、教育法を分類して、智育德育體育とす。此分類は、高尚の學より云へば、不十分の處あり。されど實際上、目の子に智徳體と別して、其部分に付て、良法を求むる、必ずしも悪からず。我が學舎は、世の所謂智育なるものは、其教を通學々校に譲り。德育體育の二科は、專門道場として之を任ず。故に此兩件は、我が皇國中唯一。又は最上の位置に立たむことを要す。去りながら徳は眞智より發す、世の所謂智育は、才藝を長するを云ふなり、故に聖訓を熟讀し、其教を信奉し、實踐躬行、且くも眞智發得の修業地に在ることを忘るゝこと勿れ。眞智は、苦勤より得るなり、苦勞は眞智を發する動機と知るべし、飽食煖衣して、爲すこと無ければ、懶怠々々、今之が本末輕重を示す。

第一眞智 第二徳行 第三體育 第四智育

眞智徳行は本なり、體育智育は末なり。故に身體に病を受くる時は、才智藝術も廢すべし。眞智を求め、徳行を保つ爲には、軀命も惜むこと勿れ。

九月より入學する學徒も、其父兄より依托あり。此際先進の輩は、後進の模範たるべし。模範とは、學舎の節制通り、規則通りに、其身を修め、行を立つるを云ふなり。

先進にして此覺悟のなき者は、用捨なく退舎を命ずべし。其故は、此覺悟と此責任となき者は、萬事あるそかにして、所謂馬鹿横着を構へ。後進の若干人を率ゐて、相共に墮落する惡魔となればなり。學舎は士君子の志ある者を收容して、其徳器をなさしむる處なり。

毎朝勅語を奉讀し、聖天子の教を拜すべし。

學舎の節制規則は、學生の德育體育に害あるものは、用捨なく嚴に之を禁戒し。又其益あるものは、勉勵して之を行はしむ。

今日の如く、永く國家の太平が打續くと。漸く人心が卑劣となり、柔惰となり。各々其身分相應の根性が出来て、親も知らず、子も識らず、いつとなく其家庭に、一種の習氣を生じ。其子弟の生育と共に發達するものなり。故に華族の子弟は、華族根性となる。役人の子弟は、役人根性となる。農家の子弟は、百姓根性となる。商家の子弟は、町人根性となる。各々遺傳の如く、血統の如く、其根性がおのづから定まりて、其根性通りに業識が働くなり。我が學舎は、決してかゝる各種根性、及び習氣を、其儘に發達せしめず。又かゝる各種の人の子弟の雜處す

るが如きを許さず。即ち我が學舎の家庭は唯士君子の子弟を收容して。士君
 士の根性を養成す。士君子の根性とて、別に六つかしき意義あるに非ず。所謂
 士根性は是れなり、武士根性は是れなり。故に我が學舎の家庭は、全く武士の家庭と
 心得べし。勇武廉潔豪氣を養ふて、苟も士魂を失ふこと勿れ。居常守るべきは、
 正直 廉耻 信義 敬愛
 此の四條目は士たるもの、骨格なり。常々之を心に操て、堅念不忘なれば。自
 然に士根性の定まるものと覺悟すべし。至囑至囑。

識の鍛鍊第一回

識とは我身に感覺知覺する一切の事を云ふなり。佛云、識性虚妄猶如空華と。
 此の識なるものは、一切の境に對し、一切の縁に觸れて、生起するものなれば。其
 境縁の變ずるに従ひて、起滅も常なく、實に虚妄にして、空華の如きに相違なし。
 されど人の生るゝや、且くも境縁を離るゝこと能はず。故に常に恆に此識の起
 滅を、一心に感覺受納して、其變に應じ、其理を盡して、生を衛り命を保つは、亦是れ

心雖より働く
 は智なり識は
 外より觸れて
 起るものなり

人事の肝要なり。但此識の鍛鍊を欠ぐものは、此の識の起滅に惱亂せられて、一
 心を治め得ず。畢生此の識變の奴僕となりて、遂には惡道にも墮るものなり。
 佛が衆生を濟度すると云ふも、此識を濟度することなり。又滅度を取ると云ふ
 も、此識を滅度することなり。又法に正偏の二位を立つ、正位とは心源を云ふ、偏位とは支脈を云ふ、其偏
 位は、此識を云ふなり。是故に一切法、一切事、一切道、一切理、悉く此識變を相手に
 立つる言句なり。是故に此識を惡きものと思ひ僻むこと勿れ。又餘義なきも
 のとして打任すると勿れ。此識は善きものにもあらず。惡きものにもあらず。
 猶此の衆庶の善きものにもあらず、惡きものにもあらず、只是くの如きものにて、
 見るが儘のものなるが如し。水の流るゝ、火の燃ゆると一般なり。治めて以て
 生を利し情を遂ぐ、是故に治むれば、識は識ながらにして、安んじて平靜に復す。
 治めざれば、苦悶煩惱やむ時なし。是れ生あるもの、常なり。此事我のみと思
 ふこと勿れ。又我のみならず、人の常なれば。止むことなき天性なりと思ひて、
 打任すると勿れ。士君子の職は、此識を治めて、生を安むじ自他をして、害惡に陷
 らしめぬことを一向希ふのみなり。是れ統一の學源なり、生命なり。源なきも

の、利澤あることなし、命なきもの、徳行あることなし。
 樂記曰。人生而靜、天之性也。感於物而動、性之欲也。物に感じて動くものは、所謂
 識なり。此識のまゝに従ふを、我れ物に化すと云ふなり。我れ本心を遺失して、
 識の所變に従ひ。即ち境縁に引れて、識らず知らず、化け變るなり。至惡の極に
 して、禽獸の類なり。是故に人は、識の識たる所以を辨知して、之を鍛鍊修治すべ
 し。又其境縁を擇みて、妄に貪求すること勿れ。隨逐すること勿れ。是れを智
 者の事と云ふ、即ち士君子の務なり、
 智とは、我心に明かに覺悟して、自他の境縁を疑惑せざるを云ふなり。自他の境縁とは我が境縁の如く、人の境縁をも知るを云ふなり。譬へば我が智は、人の智を發する善縁となり、我が愚は、人の惡を導く惡縁となること勿れ。猶人の我れに於けるが如し。是故に其心に暗
 さは、無智の證なり。暗昏共に智の通ぜざる相なり。孟子に齊宣王曰、我惛不能
 進、於是矣。願夫子輔吾志、明以教我、云々とあり。即ちみづから無智を自覺して、他
 に教を求む。則ち智を求むるなり。大學の明德の明も、智の徳相に名づく。兎
 に角に、心に明かにして、内外透達上下古今に疑のなき、即ち智の相なり。之を明
 と云ふなり。是等の趣を以て、智と識との分別を知るべし。

右識の解説は、猶長文なれど、明後日の日曜に學生へ口授の爲、其初段を書綴
 りて送り申候。樂記及び孟子も、譜記のまゝ書き入れしものなれば、原書と御
 引合せ、御正しの事。其他にも、義理の通じがたき處は、蓋し闕如にしかず。老
 夫歸京の上、又々親しく學徒に相授け申候。我が學の源底は、全く此識の鍛鍊
 に有之申候間。之に堪へぬものは、速に退學爲致可申。是亦人の子を賊せざ
 る道に御座候。

識の鍛鍊第二回

寒暑も識なり、苦樂も識なり、痛癢も識なり、愛憎好惡も識なり。此識に違順ある
 が爲に、識の鍛鍊を缺ぐものは、畢生此識の奴隸となるなり。境に違順あり、心に
 愛憎を生ずと説くが當然なれども。識の所變より言へば、境縁は無意味にして、
 其違順の實は、全く識の違順なり。是故に花は愛着に落ち、草は嫌惡に生ずとも、
 又は其甚しきを比して、寒山詩に、餓狗嚼骨の比喻あり。能々識の無法無實にし
 て、我が本心を惱亂するを悟るべし。

此識を少壯の頃より鍛錬する事をなさず。其生ずるが儘に放任して、生長せしむるときは。此識覺は次第に增長して、且くも境縁の變に堪へ忍ぶこと能はざるのみならず。其苦痛苦難を避けて、其安樂安逸を求むることに、惟日も足らず。或時は我と我ながら、其淺ましきを悟りて、斯る様にてはと、恥ぢ悔むこともあれど。不覺の識變に逼迫せられて、己が意思もて、制壓すること能はざるに至るなり。

識なるものは、實に不思議に神妙に、おそろしき程のものなり。能く制して癖づくれば、寐起にもおのづから規律ありて、我が分別取捨の外に、起滅するものなり。又苦痛を堪へ忍びて、日を重ね月を重ねると、漸く苦痛を感ぜぬ様になるものなり。之に反して、此識の微細の生滅にも、耐へ得ず。少し渴すれば飲み、少し飢れば食ひ、少し寐むければ寢、少し甚しければわめき、少し勞すれば逸す。箇様になすときは、識はいよゝ／＼募りて、過敏となり。少しの事も、非常に強く感覺する様になりて。一身を持って餘すに至るなり。恐るべし。寒むければ衣を重ね、暑ければ裸體になり、苦は吐き出だし、甘は貪り食ひ。恐怖

の場は、少しも居たまらず、逃れかくれん事を求め。安樂の境には、執著して、其身の大害となるをも知りつゝ、捨て去ること能はず。是れ皆此識に使役せられて、此識を鍛錬するの覺悟なく、用意なきもの、様なり。かゝる者は、心思薄弱にして、一切の境縁に化かされて。一生を夢の如く、醉へるが如く、苦惱苦悶の中に過ぎ終るなり。之を人中の人くづと云ふなり。

斯の如く此識を鍛錬せざるのみならず、惡感惡覺を助け長じて、止まざれば。此業識は段々増長して、耐忍制壓の力は、皆無となり。心中は應仁の亂の如く、又三文風の糸の切れたるが如く。外境界の風のまに／＼吹きまくられて。當途途方もなき心操となるものなり。白隱禪師の俳句に、

おもふまゝ、やらぬが風の命かな

と。誠に識のまゝに打任せぬが命なり。之を引捕へ引締めて、鍛錬すべし。夫れ人は、天地の精靈を十分に、有り丈けに、受け得て生る。故に彼れ禽獸の如く、識に自然の分限分量ありて、甚しき變態なきものに同じからず。されば禽獸走なるが儘に成り果つること能はず。即ち此識變の激烈なる感動の爲には、實

に一心を感動惑亂して。親にも子にも言ふに言はれぬ苦惱を受くるものなり。是故に少壯の頃より此識を鍛鍊して。惡感惡覺を生ぜぬ様に修業すべし。佛曰。外境界風漂蕩心海識浪不斷なりと。つらく此識の生滅を觀するに恰も暴風のたえ間もなく吹きすさみて、狂瀾怒濤を湧起し、濁浪をあげ、妖氣を生じ、一も平易安靜の處なきが如し。是故に少年の頃よりよく教へ諭して。此識を鍛鍊して、動搖に堪へ。漸くちし鎮めて、平地に立ちて、自分の意のまゝに進退するが如くならしむべし。其未だみづから鍛鍊するの力なき幼童は。其父兄たるものが之を制し戒めて。其識變に堪へ忍ぶ様に習性を作るべし。寒氣も氣血を破らざるを度として、寒に堪へしむべし。暑も亦然り。食も、身體を衛養するを度として、苦甘を擇ぶことなからしむべし。決して彼れ幼童の識の分際に打任すると勿れ。是れ子弟教育の第一義なり。根本基礎なり。此事の出來ぬ以上は、一切の徳業は、決して成就するものに非ず。故に此識の鍛鍊は、誠に教學の本と知るべし。或醫書に、父親が子を愛するに過ぐれば、其子は愚人となる。母親が子を愛するに過ぐれば、其子は病弱となるとありし。

灸治は、識の鍛鍊に欠ぐべからず。數多きを好まず、又少きも宜しからず。背に十二穴位が最も可なり。春秋彼岸の後、よき時候に、必ず之をなすべし。此十月は、尤も可なり。光文甫先づ始むべし。學生にも、必ず之をすゝめて行ふべし。此修業に堪へるものには、余は必ず褒美を與ふべし。姓名を記して置くを要す、可成は舍中不殘にすゝむるを可とす。

風日宜しからず、雨日宜しからず、最も平和なる日を撰むべし。土曜日曜午後、五七人宛行ふべし。此事第一に、識の鍛鍊に大効あり。寒暑に堪へ、皮膚の病を去る。即ち惡感を去るなり。身體に少しにても熱氣あらば、行ふべからず。近來の醫者は、識變の大事を知らず。只生理の一端を解して、萬病を化學的に論定す。是れもさる事なれど、善を盡くしたるものにあらざるは勿論なり。さりながら、識の鍛鍊に用なき事は、他の術を非議すること勿れ。苟も識の鍛鍊に害ある者は、大家名醫の説も用ふべからず。但し此事も病を受けたる時は用捨すべし

識の鍛鍊第三回

此書は、著書論文の様に思ひなして、見ること勿れ。元來識の鍛鍊は術なり。之を教ふるものは口授し、學者の手を取りて引廻はす如き心持ならざるべからず。學者は直ちに實驗實修して、二六時中行往坐臥都て放失すること勿れ。古人の所謂換骨の靈法、頓神の妙術も、他なし。只此一法あるのみ。

世の中に放逸無頼にして、己が氣隨氣儘をのみ立ち働くものあり。是れ皆彼れが生立の時に、賢父兄の制するなく、良師友の戒むるなく。己れ知らず識らずの間に、此業識をやり任せて増長し、更に鍛鍊せざるのみならず。惡習をかさね、惡癖をたすけ長じて、其心識を成就せしもの、成り果てなり。斯く成り果ては、所謂惡感惡覺惡智の異熟果を結びて。智慧に發せず、分別も、正當ならず、義理人情も通ぜず。其儘人の形ちを成したる禽獸の類なり。世に洵宮術とか云へるものありて、人の生質を、十二支の禽獸の性に當て、説示すとか、聞及べり。是れおもふに、識を鍛鍊せず、氣質惡癖のまゝに生長せしものを、禽獸に引合せて、濟度

する一法ならむか。淺まし。人苟も良心を失はず、みづから耻ぢ畏るゝの心あらば。生長の後、たとひ三十四十の齡をかさぬるとも。其惡習惡癖を知りて、性善の道に立ちかへる教なきにあらず。彼の洵宮術に限らず、總ての教は病の症を察して、之に投ずる良藥なれば。能く醫戒を守りて、服用する時は。必ず一効あるに相違なし。されど生來に氣質に打任せて、習性を長じ。其性癖を異熟して、或る形を成就したるもの、之を急に攻めて、一朝に功を收めむと欲す。又爲に變情を生じ、異感を引き。或は陰鬱となり、或は偏窟となり、或は慢氣を生じ、種々の變症を經發し。即ち常人の常識態度を失するもの多し。之を形質身體にたとへて云はゞ、捨育てになして、三平二滿の容を成就し。己に既に其形容の定まりたる後、其者みづから省みて、心憂き事に思ひ。たとひ美人と云はれずとも、常人並々にはなりたしと志ざし。急に洗ひみがきて、色つやをよくし、鼻をつまみ、頬を撫て、食を減じ、衣をかへて、風采器量を作りなすが如し。昔の儘の醜態よりは、遙かにまされど。少小の頃より、いつとなく形を整へ、行儀を正して、生長せしもの、おのづからなるには、及ばざること遠し。且つ其修業の難易は、雲泥

なり。

識を鍛錬するには、氣質を知ること肝要なり。大概の悪習悪癖は、氣質の變より生ず。漸々に増長して、終には不具足の形を成すなり。氣質とは、略して云へば、氣のせわしきものあり、悠長のものあり、怒りやすき者あり、喜びやすき者あり、畏るゝ者、悲む者、其常態常度を越ゆるは、都て氣質の偏なり。此氣質の偏が、即ち情の偏となりて、識を動亂して、遂にはみづら我心の生れつきなりと觀念して、改むる心もなきに至る。是れ實におそるべし。故に人々此偏情は、氣質より生ずる識變なることを悟り、みづから制して、鍛錬すべし。

氣質の事を精しく云へば、大凡物に對し、事に應じて、心の動くは氣なり。心氣ありて、動くにあらず。識の物に觸れて、反撥して動く、みづから氣を生ずるなり。孟子曰、志、氣之帥なりと。行かむと動き、退かむと動く、皆氣なり。行かむと欲す、退かむと欲す、志なり。其志ありて行かず、退かざるは、氣の順はざるなり。動かざるなり。故に志は氣に乗じて行ふ、喜怒哀樂、共に氣の働きのなり。識より云へば、氣も志も情も、皆識の所變なり、之をたとへて言はゞ、水の如し。只是れ一水なり、或は熱し、或は冷

く、或は動き、或は激し、波となり、濶となり、泡となり、沫となり、白と見え、青と見え、緑と見ゆ。種々に境縁によりて、變化あれど、只是れ一水なり。識亦是の如きのみ。是故に識を鍛錬すべし。識を鍛錬さへすれば、氣質偏情は、敢て論ずるに足らず。心にかくるに足らず。おのづから正氣正感正情を發するに至るなり。

孫子に、強弱は形なり、勇怯は勢なり。又曰く、三軍は氣を奪ふべしとあり。此勢とは、氣を云ふなり。氣の用も、亦大なり。故に其失も亦大なり。

質は形質なり。強弱剛柔は、悉く質に備はるなり。樹木の種類の、強弱あり、剛柔あり、生來五臟六腑ともに、強健なるものありと雖も、多くは或る一部に、強弱あるなり。是れ尤も素質の變に關せり。其他手足に強弱あり、眼耳に敏鈍あり。大概は形質の相違によりて、自然と性癖を生じ、偏氣を發するなり。遂に人々好惡の情を異にするあるに至る。

腸胃の弱きものは、動もすれば、氣鬱の癖あり。頭腦の弱きものは、退屈の癖あり。或は食を貪り、或は眠を貪り。或は寒を畏れ、或は暑に疚む。皆悉く體質の不全の處ありて、此惡癖を發し。我れ知らず識を妄動して、其病を増長し、其偏質を

助け長ずるなり。是故に常度常態を守りて、食眠寒暑ともに、識を制し、識を鍛錬すべし。此氣質の事を、審にせざれば、幼子を教育する事は、出来ぬなり。又無理をせぬやうに、調子を取りて、飲食衣服行住坐臥の間に、氣を養ひ質を治むべし。一朝一夕の故にあらず。所謂漸を以て進み、漸を以て成るなり。易道より云へば、坤の道なり。察すべし。

氣質の變は、識の感動の變なり。識蘊とは、内は身質より、外は外物の觸著によりて、感覺感動する識が、我れ知らず、心に習染して、一種の心に似たるものが出来る、之を識蘊と云ふなり。故に内外に觸著して、感覺感動せし者、即ち氣質が、いつとなく習性となり、性癖となるものなれば。其惡習惡癖の、彼の識蘊を成就せぬうちに。みづから己が氣質の變を察して、識を鍛錬し、以て徳性を成就すべし。

注意 識の鍛錬を修行するものは、此氣質を見こなすこと肝要なり。所謂氣質も、識の上より云へば、制し惡きものあるに非ず。是れ都て識の感動のみ。たとひ體質の弱きものも、心識の剛健なるものあり。所謂強弱は形なり、勇怯は勢なりと、孫子の云へる、至言なり。是故に識を鍛錬するものは、識の感動に

於て鍛錬すべし。氣質の偏も、修業の善き相手なり、善き道場なり。

氣質の變は、水の流の如く。種々の變をなし、種々の勢をなすも。つまり水の動性が、外物に觸着して、種々の變態をなすに過ぎざるが如し。是故に識を鍛錬するものは、此識に常態なく、境に觸れ、縁に觸れて、變態を現じ。此變態も、觸處に偶發して。事去り時去れば、都ての蹤跡を止めず。時々刻々、選流變動して、新たなること、石火の如く、電光に似たり。

一水、千岳萬溪もろくの艱難を経過し來りて、平地平易に到れば。都て蕩々乎として、平穩無事なるに同じ。識の滅度も亦復如是。

是故に識を鍛錬するものは、平穩を求むることなかれ。無事を求むることなかれ。寧ろ艱苦艱難を以て、識を鍛錬する、隨一の善境となすべし。元來識なるものは、凡夫の思ふが如く、滅度すべからず。大概の凡夫は、境縁を除けば、識は再び生ぜぬものと思へり。是れ大なる間違なり、境縁は無意識なり。

歎けとて月やはものをおもはする、かこち顔なるわが涙かな。
こゝろから紅葉やすらひ立田山、松はしぐれにぬれぬものは。

これやこの行くもかへるも別れては、知るもしらぬも逢阪の關。
わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり。

我が心識の内外の物に觸著して、發作するもの、豈外物身體を除きて、識の根元を斷滅すべけむや。是故に識は剛健に鍛鍊して、いかなる惡境惡縁に觸着するも、動轉すること無く、本心を取失ふことなく。悲苦痛苦の淵に沈むも、脱然として身を洗ふが如く。一切の大難、大患、大憂、至痛、至燒を、現實に認得し。骨を刻み、髓を出だして、識得徹底するを識の滅度とす。是れ決して、外境外縁の事にあらず。全く我が法身の天地を貫き、古今を貫き、至靈至活、至神至妙の、當體の大機大用なり。粉骨碎身も、豈言ふに足らむや。是故に佛は六趣の衆生を以て心とす。我れ實に彼れが如く、又過去世の如く、現在世の如く、來世亦復如是、是を以て能く識の剛健の徳を成就して、人天の師となるなり。疑ふこと勿れ。

昨朝文甫の來書に接す、社中一同無事、勤學修業罷在候由、大に老懷を慰し申候。東京も、近日冷氣を催し候由、學生既に寒氣に侵され候事、全く從來の惡感惡覺の所爲と被存候。有福者の子弟は、業識のまゝに生長して、かゝる薄弱の性と

なる。可嘆く。東京は寒暖變化の甚しき處なり。一日に十度十五度の相違あり。之に耐へるには、觸識を鍛鍊すること急務なり。生て居るものは、時にはクサメ鼻風位は、なすものなり、驚くに足らず。厚き蒲團にくるみて、祖母が傍に寐番をしても、病む時は病むなり。生死有命、腹をすゑて、八甲田山中で凍死する覺悟なれば、豈に敢て畏るゝに足らむや。老夫も満十二歳の冬ふのころ、今日の東京、昔の江戸、城下麻布の藩邸にありて、蒲團一枚を二つに折りふて、俗に云之を身に纏ひて、春まで過せしことあり。其蒲團も、やす物なれば、中綿はちぎれくになりて、游き木綿の二重なる處あり。かゝる境縁に寐起して、一回も風もひかず、病氣もせず。されど今日まで記憶して、忘れぬ程なれば、つらき事は、つらかりしに相違なし。又是れ老夫が少壯の頃、貧にして、不得止にもせよ、識を鍛鍊せし、一の道場なり。

灸治の事、漸く五六名とは、誠に勇氣なく、識變を畏るゝの限なり。勸めて速かに實行ありたし。内藤大森二子、先鋒たるべし。識の鍛鍊は、第一に、觸識を鍛鍊して、觸覺をして強壯ならしめ。第二に、舌識即

ち甘苦を嘗め、第三に、耳識即ち人言を聞て、喜怒を制し。第四に、眼識即ち見て、好惡の心を執せず。第五に、鼻識なり、鼻識は、生れ得て賢なり、又頓なり、深く意を止むるに足らず。箇様に一々分別して、實行するときは、修業の科目、ものづから成就すべし。

賞罰の事

老夫歸京の上は、舍則を守り、勤學怠らず、學友に兄事し、厚く幹事に師事し、又能く識の鍛練に志す、學生は我等老夫婦が引つれて、一日好天氣を撰び、大宮の公園に到りて、諸子を遊戯せしむべし。其時に行狀不正、訓誡を蔑如し、舍則を侵す等の事あるものは、其日一日禁足を申付るなり。此事を、學生一同へ御申付の事。

寢具の事は、蒲團にて可然候、尤も今より重襖をゆるす時は、寒中に至りて、致方なし。今より皮膚を強壯にするの方便、有之度事。元來識の鍛練により、識の剛健の徳を成就し、剛健の働を生ずるときは、其働きて、寒には熱し、暑には冷靜の氣を生ずるなり。識の鍛練も、こゝに到らざれば、役に立ぬなり。先づ

夫までは灸治、又は水浴をすゝむべし。弱虫ばかり、多人數になりては、實に生類の大患なり。人世の大病なり。生て居るものが、内外の境縁に耐へ能はぬ様では、生れて來らざるを勝れりとす。北方には、氷屋の中に住するものさへありと聞けり。人間の生るゝ處て、其程々に、衣食住すれば、それにて生て居らるゝ道理なり。觸識と舌識とが、我が學生の鍛練時代と知るべし。餘り長く書付申候故、跡先も可有之。又要用の事も、漏らせし事もあるべし。

識の鍛練第四回

寒時には、寒に耐へ忍びて、此識を鍛練すべし。熱時には、熱に堪へ忍びて、此識を鍛練すべし。苦痛の時は、苦痛に堪へ忍びて、此識を鍛練すべし。物に對し、即ち境に對して、好惡愛憎の心動けば、此好惡愛憎の識心を制伏して、禮義に復すべし。此等を類推し、二六時中、都て識の鍛練を修業すべし。是れ士道を躡む第一の用意用心なり。此の用意なく、此の用心なく、此修業の出來ぬものは、薄志弱行の輩にして、決して我が士林に列する資質なし、速に貶黜すべし。昔より武士

に二言なし武士は食ねどそら楊枝と云ふ諺あり古武士のいかに用意用心して此誠心を鍛錬せしかは此諺にても知らるゝなり。決してうか／＼ものゝ出来べきことにあらず。人に二言せぬには誠心を鍛錬する事は勿論理非を辨じ、禮儀を守りて、變ぜざるの心得無くては出来ぬなり。

此講録を書する時或人一小冊を持ち参り之を見よとて借し與へたり。書名を見れば幕末の偉人江川坦庵とあり。予が幼年のころ江府にありし時此偉人の名を聞くのみか。芝の新錢座と云ふ所に江川の練兵場あり西洋兵式を教授せり。予もしば／＼此練兵場にて教授を受けしなり。其教授する人は坦庵の門人なり。故に何となく慕はしく牀しく。直ちに其書を手に取りて打開き見るに一種の修養と云ふ一節あり。

坦庵常に門生に語りて曰く成氏の言に平素十分の技術も時に臨みて用をなすは五分にして。若し其の功用八分を得ば天下に敵なしと。實に至言と云ふべし。予思ふに其十分の技術が時に臨み十分の働きをなし能はざるは。畢竟身體に痠弊を發し爲めに手足動搖して意の如くならざるに因れり。茲に人あり卒然猛獸に出會ひ蒼皇銃を執りて發射す。後ち始めて手足の動搖

戰に臨み武
ありは即ち
震はれ大極
なり是れ事

秋冬なり夜
なれば夏及
少壯の頃は
少壯の頃は
少壯の頃は
少壯の頃は

を覺ゆ。是れ痠弊の發射の後ちに發するにあらず。其發射前に生ぜしも氣血上衝せしが爲に之を覺らざるのみ。一獸に遇ふ猶かくの如く然り。況や死生存亡の境其狼狽錯亂は想知するに餘りあり。是を以て予は痠弊の成事を誤るを戒むる深し。故に武を講ずるは狩獵を最上とす。今や昇平日久しく戰場を蹈む能はずと雖も彼の山野を跋涉し猛獸を驅逐す朝暾は目を炫し雨雪は面を撲つ奔走して氣喘ぎ空腹中虚にして體疲る。此苦難に堪へて屈せず是れ皆練武最上の所なり。

江川氏の修養する所は全く非常の境縁に觸れて識を鍛錬するの法なり。昔より武士は必ず此識の鍛錬を修養し即ち死生存亡の境間に立ちほだかり己が思ひのまゝに用捨なく遺憾なく立ち働かむ事を志すなり。かく平生の修業に油斷なく其志の深きが爲に。眞個恩に酬い義に従ひて士道を盡すことが出来る。されば古往今來眞個忠孝の人を求むるに大概は武士なり。朋友に信あり義あり下を恵みて侮らず上を敬して憶せず弱を救ひ強を制す多くは武士の働きなり。此一事は學者文人の能くする所にあらず。元來讀書家萬全能萬全書を求むるものを讀書家と云

なるものは、義理の詮索を是れ事とし。術智を求め、聰明を希ふに急なり。故に意を識の鍛錬に用ひず。恰も物を遺失したるもの、其物を詮索し、之を求むるに、身心を勞苦するが如し。其遺物を見當てるまでは、目前の事物、大概は夢の如し。若し彷彿として、之を求め得れば、又之に執著して、心を去らず。斯く年月を重ねる間に、己れ知らぬ間に、業識茫茫、いつとなく増長して、心田に根株をすゑ、幹木枝葉は、殆ど天を覆ふの勢をなすなり。たま／＼質頭の漢ありて、一朝發憤して、脚跟下に心を付け、此惡荆棘を剪除せむと欲す。急に之を責むれば、有るが如く無きが如く、雲の如く霧の如く、紅紛として把握すべからず。しばらく緩くすると、一時平和の天地の如きも。少しの異境異縁に觸著すれば、怒濤の如く、狂瀾の如く、又燎原の火の如く、忽然として湧出し、熾然として、燃出す。故に古人も、山中の賊を平ぐるは易く、心中の賊を平ぐるは難しと嘆息せり。彼れ讀書家なるもの、偏に聰明を求め、智解智術を求めて、此識の鍛錬をなさず。ほしいまゝに、惡智惡覺を増長せしめし害毒なり。若し少年の頃より、此の識の鍛錬を修業して、眞の士道を、實地に踏まば、何の心中の賊かあらむ。識を鍛錬することを

原田生も早く
此類に墮す
手當をせぬと
るなり

知らざるものは、識の鍛錬は術なり、故に術を學び、武藝を鍛錬するが如く、漸くにして力量を知らず、かく論ずれば、孔顔も、樂も、所あり、獨り孟子は、毅然として、識の鍛錬よ、一理を柄にして、一旦り力量を得しもの、如し、故に曰く、學問の道無他、其放心を求むのみと、一理を柄にして、一旦に識を制せむと欲す。是れ識を以て識を除き、分別取捨して、愛惡の情を去らむと欲す。恰も自己の兩手を握り合せて、拈ぢ合ふが如く、一手に力を入るゝ程に、一手にも力入りて、果ては白汗を流すも、詮なきなり。されば種々に方便を用ひて、調伏するも、遂に心中の賊を、調伏し盡すこと能はず。果ては變な悟りを開きて、生のまに／＼、識のまに／＼なる惡道に墮落し。下等動物の類となるもの、極めて多し。是等は、卅歳已上、四十歳前後の消息なり。可畏ことなり、可愼ことなり。是故に士君子の徳行を修業するものは、讀書家となることなけれ。世の所謂道德家、宗教家なるもの、總て此讀書家の一類なり。看よ、此種類にして、眞面目に其道を修業する輩は、一種の病人の如し。生氣なく、活氣なく、隱憂あるが如く。神經過敏となりて、事物に感動すること異常なり。識の鍛錬を修業するもの、白隱禪師の夜船閑話を見よ、是れ全く觀理度に過ぎ、聰明是れ求めて、久しく鬼窟裡に生計せしもの、成り果てなり。恐るべし。予も久しく此大患にかゝり、此

惡境を惱めり。されど少壯より亂世に生長し、武士の教育を受け、大抵の處は踏潰して通過するの氣概あり。いよ／＼のつ引ならぬ時は、一氣に斷じて。生も死も、一度に捨て、出身の一路を求むるの氣合を合點せしが爲。此大患、此惡境を僅かに出脱することを得たり。是れ皆實驗實修の話なり、容易に看過することなかれ。尋常人が、かゝる大患にかゝる時は、十中八九は、死亡を免かれず。畏るべし。

再昨屢接來書、先づ學事より説くべし、灸點水浴は、觸識を鍛鍊するに於て、適當の方法なり。元來識の鍛鍊は、痛苦に耐へ、惡感を忍ぶ所に在り。是れが漸くして、灸すれば氣を發し。水浴すれば、心地よきに至る。即ち識心剛健にして、寒暑及び一切の境縁に對して、自在を得るの徳が成就するなり。今や此徳を修むるが爲に鍛鍊す、鍛鍊は痛苦に在り、若し最初より痛苦を感ぜぬ者あれば、死人に等し。是故に甚しく痛苦を感ずる者程、其効著るし。之に反して、痛苦を畏れ、惡感を忌み、只管遁れんと欲するものは、已に識覺に、一種の病を生じて有るもの故、此理を論じて、鍛鍊の修業に就かしむべし。元來此の修業の出來ぬものは、決して

統一の學を奉ずること能はざるなり。何となれば統一の學は、自己得手勝手を捨つる學なり。又實行の學なり。實行せざれば、統一の實なし。同一は、理に於て云ふことを得べし。統一は、理を以て云ふを得ず。必ず實行の道なり。虚言は不統一なり、言必ず忠信、行必ず篤敬なるは、統一の道なり。是れ實行の道なり。是故に識を鍛鍊せず、己が識の違順好惡に打任せて、行ふもの。統一學を奉ずる能はざるは、火を觀るよりも明かなり。是故に統一の學を奉じて、人道を行はむと欲するものは、兎にも角にも、識の鍛鍊より實行すべし。識の鍛鍊をなさず、口先計りて、種々の理窟を取り並べるものは、斯道の惡魔なり。速に退治すべし。

宍戸生入學の事、滿十七歳なれば無故障、差許しあるべし。其已上なれば、當人の性行従前宜しからず、父兄其他も、こまりものにも、て餘し候ものは、勿論拒絕ありたし。滿廿歳、即ち丁年以上は、必ず拒絕すべし。大凡丁年已上は、學舎中に在りて、學生の摸範たるべし。先進者たり、誘導者たり。所謂父兄の中の兄たり、故におのづから父兄たるの任あり。其志と其徳とを具するを要す。且我が學舎創

立以來、已に半歳ならむとす、みづから一家の門風あり。先入の子弟は、少小なりとも、おのづから其氣風を受く。然るに今や年長者として誘導者として、放逸の氣あるものゝ來るに逢はば、自然と惡感化を生じて、舍中清淨の氣を混濁す。此事今回の一事にあらず、永く此規模を守りて、我が學舎をして、失墜せしむること勿れ。孔子曰、犬馬皆能有養矣、不敬何以別哉と。是れ子たるものゝ、其父子を孝養する道を云ふのみにあらず。其父母たるものも、其子に對して不敬なるは、犬馬以て子を養ふと別なし。何をか其子を敬すと云ふ、其性善を信じ、其德器を敬し、眞人間に育て、士君子の道に誘ふを云ふなり。吾等今は社友の父兄に代りて、其子弟を教養す。勿不敬、敬して丈夫たらしむる能はざれば、其責は實に吾輩にあるなり。但し丁年前後に到れば、前五識が恣まゝに發達して、已に惡智惡覺を成就す。これを呵責教戒して、其過ちを正し、其惡癖を去るは、専ら意識已上の鍛練に在り。此事容易の事業にあらず。更に誠を投じ、終生志を變ぜざる事、孔門弟子の如にして、僅かに益するを見るなり。孔夫子曰、有顔回者、好學、不遷、怒、不武過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也と。見るべし世の惡子弟を集め來り

て之をして不遷怒、不武過しむることは、決して吾輩の能くすることにあらざることを。故に速に謝絶して、其責任を全うすべし。不然ば折角德器をなすものも、惑亂を受け、魔障にかゝりて。遂には一家風をも、失墜するに至るべし。可慎、可畏。今日の在舍在學の學生が、おひく丁年已上となり、其德器も、他の子弟に對して、模範たるべき時の至るを待ちて、大に擴張すべし。それまでは、決して急効を貪ることなかれ。至囑、至囑。

識の鍛鍊第五回

前回に觸識の鍛鍊を第一にすべき事を教訓す、此觸識に、内觸外觸の別あり、學者必ず知らざるべからず。身中の氣血不和を生じ、若しくは五臟に病を受くる時は、即ち内觸に異例を感ず。従て外觸に不快を感ずるなり。是故に内觸に異例を感ずる時は、身體の疾病あるを自知して、其異例の度合に應じ、みづから用意して、疾病の増長せざる様に保養すべし。抑も生は養ふべし、惜むべからず。保つべし、貪るべからず。飲食、便利、起居、睡眠、行動、いづれか衛生保命の道にあらざる

少しの不例は慎みて養生すれば、必ず治す。醫書に藥せざるは、中醫に當るとあり。近來の惡俗として、己が生を保ち、己が身を衛ふことは等閑になし。此等の事は、醫者の受持の様に思ひ、各々は、己が勝手の欲を遂ぐる事を專一とし。此身體を視ること恰も出來合せの器械の如く、遣ひ捨つるもの多し。たまさかには、其身體を大切にすることも有れど。天命を保ち、父母祖宗の遺徳を聿べ修むる爲にあらざ。つまり一日も此世に生きながらへて、凡夫持前の欲を遂げむことを願ふ輩のみ。誠になさけ無き惡俗なり。

抑も今日の學術は、都ての事物を器械的に説明するを以て智とし達とす。此見より萬事を見こなす時は、身體は尤も精巧の器械にも似たるなるべし。此器械によりて、精神精靈を運出す、智とし達とし。又巧妙の器械を工夫するも、皆悉く此器械の作用に非ざるは無し。若し其調子を狂はせ、其體質を損ずる時は、更に完美完全のものを新調するの餘地あること無し。故に日々此器械を用ふるものは、其手入れを大切にせよ。其取扱ひを大事にせよ。醫者は病氣の既發の後に、我が身を救ふ手傳人と心得て。決して其平生を、名醫妙藥に恃むことなか

れ。名醫妙藥は、火災の時の消火器なり、消防夫なり。されば士たるものは、大概に生理の筋道を心得て、二六時中我が身を保ち養ふことは、第一の勤なり。やがて一家をなし、老を養ひ幼を育するも、みづから其身をためしとして、其事を行ふより、他の術なし。必ずなほざりに心得べからず。

我が學舎の學徒は、士君子の徳行を修するを以て、命とし分とす。されば此一段の説話をなすは無用に似たり。さりながら門を出れば、草茫茫々、茲に世間の人の心術を語りて、魔道を塞ぐも、必ずしも無益の業にあらざるべし。抑々末世末代のためしにや、近頃は士氣亡び、士道衰へて。人を救ひ、世を救ふ杯の志は、且く置き。己が身を守り、己が家を守るの道さへ、知らず顔に打ちすごし。下民の辛苦を察せず、父祖の勤勞を思はず、只甘い物を食ひ、柔か物を衣て、一日くくと此世に生きながらへたし。此の事の叶はぬ程は、生き甲斐なしと。是れ誰れ教ふるとなく、少し分別心の増長せしもの、心底に浮び出づる惡根性なり。此惡根性より、種々の理窟を巧みいだし。友をかたらひ、黨を引いて、私利を目途に、人間を惑亂してやまず。是れいかなる世の廻はり合せにて、斯くも生れ來るものか。一

様の根性になりすまし、上たるものも下たるものも、更に惟むけしきなし。予れ此事を疑ふこと、茲に年久し。願ふに彼の開化とやらに付まるとひ來る天魔のたぐひならむ。諺に佛の高きこと一尺なれば、魔も高きこと一尺。佛の高きこと一丈なれば、魔の高きこと一丈と。此等の例しなるべし、畏るべし、慎むべし。惡感惡覺は、心識を腐らして、遂に疾病を招く。故に良心に安ぜざることを、受け付けぬ様、猛く勇ましく、一頭地を出て、洒々落々と、意氣を引立て、耳識を鍛錬すべし。

低聲耳語は、惡感を引き、惡覺を長ず、自他相共に戒むべし。是故に士君子に秘密語なし、公明を尙び、屋漏にも愧ぢず。事々に禮義に顧るは、只此事の爲なり。識を鍛錬するものは、過去に滯ることなかれ、未來に引かるゝことなかれ。直ちに即今單的の心識を受用して、現實に痛癢を知るべし。臆想すること勿れ、按排すること勿れ。恰も磨ぎ立の劍の、光銜陸離たるが如く、我が心識に點塵をも著けず。是れ能く心識を用ひ、心識を鍛錬するものゝ用意なり。是故に識は鍛錬すべく、又能く修養すべし。識を修養することを知らざれば、眞實の鍛錬は出來

ぬなり。識の修養は、養氣を第一とす。識の動くは氣なり、此氣を養へば、自然と識に力量あり。剛健の徳を成就するに至るなり。

眼は中正に着くべし、上眼は氣を散じ、下眼は氣を屈す、孰れも養氣に大害あり。多言は氣をへらし、寡黙は氣を沈む、或は上氣し、或は鬱氣となる。只に氣を損するのみならず、戒めざれば、必ず病を感ず。

時に大聲を發するは、陰鬱の氣を破り、快活の氣を通ず。識の鍛錬を修業するものは、養氣の一術として、必ず行ふべし。但し晝間晩景をよしとす、夜間は禁ずべし。大音エーオー、母音の五音を順に發聲するもよし、ア、イー、ウ、エ、オー。劍法を學び、氣合の術を修すべし。氣合の術とは、吾を迫害するものに對し、彼れと一氣になりて、其氣先を制するの術なり。氣後れ、又は怖け、又は氣を吞まる等は、此氣合を修せぬものゝ、生死の境に立ちし時の常態なり。かくては、全く死人に同じ。古諺に曰ふ、男子門を出づれば、七人の敵ありと。敵は必ずしも人と人と、殺傷相報いるに限るべからず。能く思慮すべき事なり。

謠曲亂舞は、一週に一回、樂師を學舎に招き、諸生をして傳習せしむべし。是れ又

氣血を調和し、剛氣を養ひ、識の鍛錬に助效あり。樂師の士氣あるものを撰び、又其謠曲は、士風士道に合するものを撰むべし。大概十回以上、十五回を限る。亂舞は、意氣を鍊り、體勢を鍛ふ。武士の戰陣に臨むが如き風采を、自得すべし。大凡氣を鍊り、體を鍛ひて、士君子の道を行はむには、須く第一機を吞却し、第二機を吐出すべし。第一機を吞却し得れば、第二機に於て、不覺の念動なし。古人の所謂先_天爲_心祖_心とは、此事なり。此一件は、老夫日々の勤業として、泥裏に土塊を洗ひ、又雪を擔ひて井を埋む。即ち修業の中途に在り、決して卒業に至らず。實に是れ心識鍛錬の極致なり。此趣は口授師授も及ばざる所、心識の鍛錬を修し盡くして、みづから此事あるを知る。第一機とは、心識初發の感動に名づく。第二機とは、此感動により、一念の動くに名づく。第一機を吞却するの力量ありて、十年廿年熟鍊するにあらざれば、必ず第三機に吞却せらる。故に曰く、更に修せよ三十年と。學者須く用心すべき一件なり。百戰百勝の項王も、虞氏一滴の涙を止むること能はず。故に曰く、慷慨赴_死、易_從容就_義難_と。されば先天に立て、天をして違はざらしむるは易く、後天に身を出して、天の時を奉じ、乾々たること

は難し。是故に古の人、一日爲さざれば、一日食せざるの戒あり。誠に吾徒の師表なり。敬すべし。

陽發すれば、氣を耗らす。隱屈すれば、氣を腐らす。故に發屈は前後の歩の如く、一偏に着在すること勿れ。是れ養氣第一の用心なり。

氣は、音に感じ、聲に動じ易し。故に氣を養ふものは、殊に耳識を鍛錬すべし。又みづから言語を慎み、發音聲調を調ふることに意を用ふべし。

心識の鍛錬を怠るときは、必ず氣の發屈に偏僻不正を生ず。養氣の用心を怠るときは、識に惡感惡覺を生ず。故に識を鍛錬するものは、養氣を以て本とす。養氣は、士氣を養ふを以て本とす。是故に士氣は、須臾も離るべからず、離るれば士亡ぶ。佛曰、堅念不忘_爲本_と、此の謂なり。前講に古の武士は、専ら心識の鍛錬を修業して、士道を踏み、士分を盡くすことを説話す。余曾て常山紀談を讀みて、吾徒の必ず心得置くべき好説話を、拔萃せしことあり。今より時々取して、口授すべし。學は口授に若かず、口授を受けて、罵と其心に會得するを、最上とす。讀書は次なり、其功力を收むる、誠に聽講の半に及ばず。但人に教ふるには、義理の出

處を正し、説話の首尾一貫の宗あるを要す。是を以て古書を引き、古言を誦すること、肝要の目たり。即ち教鞭を執る者は、讀書固より廢すべからず。然るに近來は、學ぶにあらず、教ふるにもあらず。又教學の何物たるをも知らず、只物識りとなり、朋友相識の間に、一頭地を出し、聰明を衒ふが爲に、種々の書籍を通讀して、博學博識を誇るの風あり。是れ恰も俗吏の記録學にも若かず。かゝる弊風は、我學舎にありては、斷然一洗すべし。されば學は師受にしかず、口授にしかず、決して記憶に頼ること勿れ。只實行を顧み、實際に用ふべし。是故に文字を視ることは、草根木皮の如く。言句を視ることは、藥石の如く、鳩毒の如く。文章を視ること、正邪、善惡、奸佞、種々様々の人に接するが如く思ふべし。決して良師に遇ひ、良友に交はるが如く、思ふべからず。古往今來、人間の妄識妄想の、畏るべく敬すべきききを知り、其藥毒の性分を知らむことを要す。乍去是は之れ立志已後の事なり、夫れまでは、常に良師良友に隨ひて、道を問ひ修業するを、士の分とす。抑も速成を欲するは、士の耻づる所なり。老子曰く、其志を弱くして、其骨を強くし、其心を虚にして、其腹を盈たすと。志士は誠に如此あるべし。又只此一句は、心

識鍛鍊の法に合し、養氣の秘訣なり。此秘訣を忘却するときは、一切の讀書、一切の修業も、大害となるなり、慎むべし。

吾が學舎内に在りては、

經書 歴史 地理 兵書 論文 諸子百家は、論文中に合す。

經書中に、儒佛兩典、及び其末書を合す、其他政治、法律、經濟、醫藥、利用厚生の術道に係るもの。

詩歌文章は、大概に看過すべし。癖すれば性情を傷ひ、天真を失ふ。心識を鍛鍊するものは、深く戒むべし。此癖病一たび汝が皮膚に入れば、士氣を喪ひ、逆境に身を出すの氣魄を失ふて、一種廢疾の人となる。かゝる者は、一日も吾學舎内に止まるを得ず。我學舎は、汝をして世を守り、國を守り、身を立て、家を治むることを教ふ。阿片烟を喫却して、其中毒の人となるを許さず。是れ決して老夫の放言にあらず、三十年間、みづから實驗せし説話なり。古言ふ、三たび脈を折て、良醫となると。故に蘆伯玉は、五十にして、四十九年の非を知る。孔夫子も、四十不惑と云へり。汝等切に予が教戒を輕視することなかれ。實に汝等の命根なり。

妙法蓮華經展
延普說

讀書の法は其所讀の書を讀破して其實處を知るを要す。致さるゝことなかれ、讀まるゝことなかれ。實處とは其虚實を云ふなり。孟子曰く、悉く書を信せば、書無きに若かずと。六祖大師曰く、轉法華法華轉と。轉法華は悟なり。法華轉は迷なり。故に曰く、隨處爲主、立所皆眞と。之に因みて、一の面白き説話あり、白隱禪師の荆叢毒藥に載す、

法華開講の語あり、其比喻誠に絶妙なり、或る大盜が、士人の金を奪はむと巧みて、却て瓦礫を擔ひ去りしことを説く。是れ法華轉の迷ひを云ふなり。聰明を恃み、智術を求むるものゝ迷ひを説くなり。其全文を持ち出し來りて、他日講話すべし。

識の鍛鍊も、六識已上に及ぶときは、中々容易の業にあらず。故に十分前五識を鍊り、鍛ひ抜きて、意識の鍛鍊に取かゝるべし。さなくては家屋を建築するに、地盤の軟弱なるが如く、柱石基礎の堅實ならざるが如く。力を盡して經營するも、遂に傾覆を免れず。前五識は、現實に鍛鍊するの機會あり、方法要術あり。此修業にして、未熟なるときは、意識の鍛鍊にとりかゝりても、現識の轉變に引き廻さ

れ、其惡感惡覺に枉惑せられ、不安の念に動かされて、種々勝手の道理を案出するに至るなり。是故に識の鍛鍊は、前五識に於て、全力を注ぐべし。老夫も此要訣を知らず、爲に喪身失命して、螻蟻と等しく、狗猫と等しく、朽廢死滅に歸せむとせり。前講に夜船閑話の話あり、今其要文を引て、白隱禪師も、余と同病、一回危篤に墜入しを證すべし。

山野初め參學の日、誓つて勇猛の修心を憤發し、不退の道情を激起し、精鍊刻苦すること、既に三星霜。(前後五年)對客談話の間。(乍ち一夜)忽然として落節す。從前多少の疑惑。根に和して氷融し。曠劫生死の業。根底に徹して漚滅す。自ら謂へらく。道人を去る事寔に遠からず。(釋迦達摩)難と説き易と説く。古人三十二年。是れ何の捏怪ぞと。怡々踏舞を忘るゝこと數月。向後日用を回顧するに。動靜の二境。全く調和せず。去就の兩邊。總て脱洒ならず。自ら謂へらく。猛く精彩を着け。重て一回捨命し去らむと。こゝに於て牙關を咬定し。双眼睛を睜開し。寢食ともに廢せむとす。既にして未だ期月に亘らざるに。心火逆上し。肺金焦枯して。双脚氷雪の底に浸すが如く。

兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして。舉措恐怖多く。心神困倦し。寐寐種々の境界を見る。兩掖常に汗を生じ。兩眼常に涙を帶ぶ。此に於て遍く明師に投じ、廣く名醫を探るといへども、百藥寸効無し。予此要文を鈔書し、其病症の全く合するものを、自己の胸臆に探りて、一々眼點を下し、其合せざる所は、傍に予が實歴を記入す。是れ實に千人萬人と雖も、異途同歸の惡境なり。かゝる大志を勵み、かゝる精鍊を致し、而して此惡境に墜入るものは、何ぞや。全く前五識の鍛鍊に於て、未熟なるが爲に、此大難にかゝるなり。佛曰、理頓悟事、以漸除と。孔夫子は、七十從心所欲、不踰矩と云へり、此心は心識をいふなり。是故に人の信實を、言句に認むるなかれ。己が安心を、心識に信するなかれ。只此識の鍛鍊に於て、内外本末、輕重の惡差別をなさず。通身一條の生鐵の如く、頭に徹し、尾に徹し、背に透り、骨に透りて、徹底すべし。是れ如實の行なり、出身の路なり。然らざれば、悉く是れ醉生夢死の一類にして、色食通性の動物のみ。

識の鍛鍊第六回

酒を飲みて、意氣を遣ひ、書を読み、才智を弄するは。皆是れ小量、小膽、卑劣の小人なり。士君子たるもの、其下風に立ち交るべからず。然らざれば、其惡氣に侵され、知らず、惡感惡覺を長ずるなり。文字の學、觀理の術は、總て分拆比知の學なり。譬へば一木を持し來りて、之が組織を詮索、檢究するも、必ず畢生の事業あるが如し。先づ根幹、枝葉、花實を分拆し、其一々の部分に就て、之を細別し、其素質を論じ、其彩色の配合變化を驗し、其生長發達の序に及び。猶微細を盡すが爲に、顯微鏡等の種々の器械を用へかゝる時は、此一術も、畢生の業にも、盡す能はざるべし。是故に識心鍛鍊の術は、文字觀理に墮せぬ様に、比知分拆に陥らぬ様に。直に自己の心識をしかと抑へて、實地に修業すべし。古人の道に明かなるは、現實を知るが故なり。今人の道に暗きは、現實を棄て、空想に馳するが故なり。古人は現實に惡臭あるを知る、惡色あるを知る、惡聲あるを知る、惡味あるを知る、惡法あるを知る。而して是等の諸惡は、

悉く人に依て發す、人の形體により、人の行爲によりて、生ずることを知る。是故に此衆の惡を除き去るが爲に、善事を學び、清淨の法を求むるなり。されば心識を鍛鍊するものは、此一大事を、常に一心にかけて、忘却することなかれ。吾れ誓て身に惡臭を發せざるべし、吾れ誓て顔に惡色を顯さざるべし、吾れ誓て口に惡聲を發せざるべし、吾れ誓て人に惡味を供せざるべし、吾れ誓て世に惡業を留めざるべしと。如斯一心に決定すれば、識鍛鍊の修業に於て、最上の道となす。

古書今文と云はず、心識の鍛鍊を説話するものは、總て善書なり。聖教なり。之に反し、心識を染汚し、其惡感惡覺を助長するものは、悉く魔書なり。邪教なり。學者必ず辯せざるべからず。

大學は瑛玉を
攻るが如し
善道は劍を制
するが如し

大學の明明徳、新民、致知、格物、日新、切磋等、總て此心識鍛鍊の法を説くなり。但大學の宗とする所は、明徳を此心の本能とし。此明徳を味ますは、此心識の染汚によるとなし。此染汚の惡習によりて、惡感惡覺を長ず。故に切磋琢磨の功により、此染汚を去つて、其本分の明徳を發揮するを教ふるなり。殊に無上の聖教なりと雖も、高に登り遠に達するには、必ず健足を要す。即ち切磋琢磨の功を收

むるには、必ず先づ心識を鍛鍊し、其力量を得るに若かず。今夫れ心身を鍛鍊し、水火を踏て畏れず。如此なれば、仁義忠孝は、誠に日用の雜事、尋常の茶飯のみ。古人は、仁義忠孝の談なくして、多くは仁義忠孝の人なり。後世は、仁義忠孝の談のみ多くして、仁義忠孝の人を見る稀なり。是れ全く、識の鍛鍊の修業を廢するによれり。禮義廉耻、仁義忠孝の道科を立て、心識生硬、みづから其首も回らし得ぬ生輩に、其實行を責む。恰も訓諫教養を経ざる兵卒を驅て、軍に役し、敵將を討取れと命ずるに異ならず。たとひ必死を期するも、いかてか戰功を收むることを得む。大概は敗亡して、其存するものも、再び軍に臨むの勇氣なし。是れ後世の人心の、漸々道情を失ひ。其道情を失ふ程に、欲情を増長する所以なり。易坤の卦の文言に云ふ、臣の君を弑する、子の父を弑する、一朝一夕の故にあらず、其從來する所漸なりと。古人は生れながらにして、道情に富み。今人は生れながらにして、欲情に深し。今之を驗するに、其從來する所のもの漸なり。而して其原因、心識の鍛鍊を修せしめざるが爲なり。

道情薄弱にして、愛欲の情の深厚なる者は、貧欲慈悲、愛戀を、一味に嘗め。瞋恚勇

猛、悲憤を、一氣に歸す。即ち凹き處に、清濁の流を引て、總て腐敗せしむるが如し。是故に心識を鍛鍊し、士道を修行するものは、忠孝を以て道科となし、此道情を養ふべし。忠孝の情には、魔事を雜へず、惡氣を生ぜず、清く正しく、すがくし。是れ以て士たるもの、心志を定むべき溪なり、即ち凹處なり。一切の善法善道は、之より生ず、忽せにすべからず。

忠孝に兩般なく、古今内外の別有ること無し。されど又ちのづから國振によりて、情味を同らせず。彼れ支那流は學ぶべからず。我國振の、眞率にして虚飾なき、眞に忠臣孝子の情なり。彼國は、萬事を虚文虚禮に取り廻はす國なり。名欲利欲の爲に、名欲利欲を達するが爲に、一種の芝居をする國なり。忠孝も、其芝居の科目となす。三代の後は、文人俗儒、雨後の竹の子の如く、簇々として出て來り、此芝居仕組を案出す。表面に、孔孟道德の看板をかけ、舞臺に仁義忠孝のからくりを備へ。其内實内證は、君臣相共に、利を貪り欲を達する大芝居をなすなり。彼れ文人學者は、其作者たり、脚色者たり。是故に支那三代以後は、政は秦政を繼續し、學は刑名を祖述するもの、是れ其の事實なり。我國も昔王朝の盛時に、其風

此文十善法語
不殺生戒に出づ

を移して、之を行ふ。君臣上下、夢の如く、醉へるが如く、遂に道義の衰へを來せ。終に武門ありて、我が皇國の血脉たる、神武不殺の古道を傳ふ。老子曰、天地不仁、以萬物爲芻狗と。此一句は、誠に神武不殺の宗旨を道破す。涅槃經、大衆問、世尊、世尊有何因緣、得此不壞金剛身、世尊答、我於過去世、爲國王時、護持正法、立有道人、故得此金剛不壞身と。出世の人にして、此言あり。神武不殺の徳、天地の間に充塞するを知るべし。孟子浩然の氣を養ふも、全く此大事を修するのみ。心識を鍛鍊せるものにあらざれば、此心を解せず。

此一段の説話は、老夫好むて異説をなすにあらず。畢竟は識の鍛鍛の修業を、なさず、名聞利養に、心もやはりうつり往きて、遂に忠孝仁義の談に、いやに垢じみたるを、にがしく思ふの餘りに、言ふなり。決して支那三代の後は、其の忠臣孝子なしと云ふにあらず。王朝の古へ振りは、更にも言はず。源平兩氏の徳の衰へざる時、又は徳川初代頃の、君臣主従の有様こそ。人の眞情より出づる、眞忠眞孝なれ。士たる者は、其傳を聞て、心肝に銘ずべし。

心識鍛鍊の修業未熟にして、大學の所謂明々徳より、新民の地に達する能はざる

ものは。誠にやすき吾が統一の學も、實行に艱む節なきにあらざるべし。其故は、未熟未練の者は、人々愛憎取捨の度合を異にするが故に。己れを引き、己れを推して、人に及ぼす時、甚しく異例を生ずること有り。俗に所謂氣に似せて法を説くの類なり。たとへば十圓の金に、命を捨つるものもあり。千萬金を積みて、目にもかけぬ者もあり。君子喻レ義、小人喻レ利。或は衣食に、或は名利に。皆各々其徳習徳癖の儘に委するときは、到底統一の術なきに至るなり。是故に學者、深く識を鍛錬し、其本心の徳を磨き出だし。輕重、本末の理を證得し、苟にも心識の制壓を受くること勿れ。

心識鍛錬の修業を、專一に志すものは。必ず人情に通じ、忠孝の心に厚し。何となれば、心識の制伏しがたし、又其大苦大痛を感ずる時は、耐忍も容易ならぬ事を、親しく其身に證して、之を人の身に察すればなり。父母老親あるものは、自然と父母老親の身に察し。君主ある者は、自然と君主の身に察す。以て天下に及ぼし、廣く斯民を感み、此世を度す。此一念の心が、即ち道情なり、道心なり。故に識を鍛錬するものは、仁を知るなり。さもなくて、氣隨氣儘に任せて、貪欲と共に

生長し。只己が好むものを求め、貪り、己が惡むものを除き去るに、晝夜の分ちも知らず。かゝるものは、禽獸と同じ、其識の使命に隨ひ。君父をおしのけても、爭ひ求めて、みづから利するに至るなり。誠に淺ましき限りと云ふべし。

心識鍛錬の修業は、必ず良師の教へ、良友の助けを求むべし。一家をなしたる後は、切に良妻の忠言に隨ふべし。たとひ賢父兄あるとも、幼童の時は、制壓して之を教育すれど、稍長ずるときは、父母兄弟相互に善を責むるの形となりて。子弟の邪思を長ぜんことを畏るゝが故に、竟に失するもの多し。又是れ止むなき事なり。是故に人の賢父兄たるものは、良師良友を撰びて、其子弟を従はしむべし。良師良友とは、別人にあらざ、みづから心識を鍛錬し、又其術を人に授くるものを云ふなり。

心識を鍛錬するものは、腸胃を健にして、飲食便利をして、停滯あらしむること勿れ。腸胃健にして、些の停滯なきときは、心思爽快なり。心思爽快なれば、おのづから剛氣ありて、外物の刺撃を受けて、惡感を生ぜず。

心識鍛錬の修業をなすものは、老成人に就て、其實驗實證の説話を聽受すべし。

文書に書籍によりて、其方術を求むるは、良師良友なき時の止むを得ざる仕事なり。元來文學に就て、道術を學ぶは、破屋の中に坐して、道中記をよむが如く、地理書を讀むが如く。決して自知自得の境に達すること能はざるなり。是故に眞個に、足に實地を踏まむと欲するものは、必ず先達の人に就き、熟路の人に就き、親しく問ひ、親しく聞きて、其難易を知り、其遠近を知り、現實に一足を踏み入るゝ道途を得て、進行するなり。是故に問ふことを好むものは、已に道を踏みつゝある人なり。眞に學に志ある人なり。彼れ書を讀み文を弄び、人に對すると、一切智を、内外古今の書籍によりて學得したり顔するは、總じて道心道情なき似せものなり。又或は内心に人にまけぬ氣ありて、人の知らぬ事を、書によりて知るを以て、自慢とする小量小機の小人なり。此流のものは、口舌には、小ざかしき事を取並べて云へど。會て士道の何ものたるを知らず、即ち恥を知らざる輩なれば、親むべからず。此等のものと親むと、諸共に夢の如く、醉るが如く、醒たるが如き、智不智の深淵にしづむなり、恐るべし。氣を養ふべし、遣ふべからず。智は磨くべし、弄ぶべからず。

識は愛着を重しとす

心識を鍛鍊するものは、常に、剛氣を養ふて、識におびやかさるゝことなかれ。又だまさるゝことなかれ。識は猶狐狸の如し。彼れに付き廻れば、妖をなし、怪をなして、果ては女の湯もじをかぶつて、をどり廻るに至るなり。夢想國師の歌に、

三十年あまり吾も狐の穴にすむ、今だまさるゝ人はことわり、

と。是れ識心と同居するものゝ、哀むべきを歎くなり。是故に識は、大鐵槌を提げて、眞向より鍛鍊すべし。其所變に隨順して、たぶらかさるゝなかれ。

識におびやかさるゝとは、彼の惡感惡覺の爲に、心のおびへて、大安心、大安樂を得る能はざるを云ふ。大安心、大安樂を得るまでは、識の鍛鍊の修行を怠るべからず。即ち識のおびへの取り切れるまでは、どこ／＼までも、未熟未鍊の處ありと知るべし。たとひ惡夢におびへるも、やはり心識鍛鍊の未熟より來ると知りて、必ず油斷すべからず。去る程に、信の正受老人は、夜間に狼の出づる塚間に端坐して、鍊磨せられし事、崇行録に見ゆ。古賢は豺狼をやとひ來りても、此識を濟度す、是れ眞修なり。

吉 生健富
凶 死病貧

心識の悪感覺は、實に存外のものなり。理外の理と云ふことあり、此悪感覺の如きも其類なり。不吉の言を聞き、不吉の事を見ると、いやに心地わるき感じを生ず。老夫も五十年來、種々様々の境遇を經過し來る。其間幾回か、死生の地を踏み、必死の場に立つ。其鍛磨の功能にや、大事に臨み、従容として、心中一點の雲翳なき境界を證得す。然るに無事平穩の時に、彼の吉凶の沙汰を聞く、其心におびへの氣味あること、今も猶年十二三歳の頃の如し。されば此悪感をさらりと除き去ることは、一世の修業にては、出來ぬものなるべし。但ちびへぬ様に、常に常に剛氣を養ふを第一とす。剛氣充實すれば、おのづから悪感を引かぬ様になるなり。

宗教者流の、凡夫を愚弄するは、皆此識變に付込みて、種々の臆説を作爲し。或は畏怖せしめ、或は快樂を感ぜしめ、或は依頼して剛氣を發せしむ。佛魔同居、龍蛇混雜は、此間の消息なり、恐るべし。

心識の悪感、猶風邪の心地の時に、悪風を感ずると同じ道理なり、浩氣を養ひ得て、天地の間に塞る時、豈又かゝる悪感を引く道理あらむや。是故に士君子は、邪

氣に侵されざる用心、尤も第一なり。浩氣を養ふことは、邪氣を拂ふより始むべし、是又識の鍛鍊の次第なり。是故に古へは、武士の家には、吉凶を云はず、只士道士氣、士風、士禮を重しとす。君命を受けて、其職を行ふ、いかなる惡日も嫌ふべからず。いかなる方位も避くべからず。鬼門的殺、金神も撰ぶ所にあらず。是以て武門の家には、切に吉凶を下するを忌む。家康公の往亡日、秀吉公の竹の門、皆是れ武門の規模なり。其意氣の落落たる、いかなる邪神、惡鬼も、閉息倒退す。元來月日方位の吉凶、八卦占考の類は、悉く邪神、惡鬼の司る所なれば。天神地祇を敬し、無縁の惡鬼を招かざれば、決してかゝる吉凶の差排を受けず。況や士道を守り、士道を行ひ、義を踏み、仁を求むるものをや。かゝる卑劣の術數に心をよするは、多くは淫柔の小人にして。人世の勤苦を知らざる、奸民の、好むて癖する所なり。

予が曾て兒女にかきつけ、與へし兒戀草に、此一段の事を記せり、今之を寫して示すべし。

神佛に祈願するには、只無事を祈るべし。貪欲がましき事、愚痴がましき事は、却

て己が罪を増長し、神佛の恵みを失ふなり。
八卦占考、其他吉凶禍福に涉ることは、たとひ神佛に寄託して、眼前に奇特靈驗あるとも、道を守り正を持して、決して信をよすること勿れ。只仁を行へば福義を行へば吉と、一心に思ひ定めて、造次顛沛にも、忘れざる、是れ大學の謂はゆる止るを知るなり。此心の決定と不決定とが、君子小人の境と知るべし。
士を以て自ら任じ、士道を學び、識の鍛錬を修業するものは、如上の迷妄の邪術を信ずる輩と交はるべからず。又其説に耳をかすべからず。若し此等の説に、一回心をよすると、所謂神經を感動して、惡感覺を習染し、みづから除き去らむと欲するも、容易に麾ること能はず。遂に其惡知惡覺が習性となりて、怪しき境界をも感得し、みづから招きて禍にかゝるなり。老夫生來此等の説に信をよせず、月日、方位、金神、的殺、鬼門の名を聞て、忌避せし事無し。五十年來、種々の事業に、種々の境遇を経て、爲に禍にかゝり、爲に不幸を招きしことを知らず。されば士君子たるものは、斷々乎として、かゝる迷妄の説を排し、邪氣を受け引くべからず、是れ識の鍛錬の修業に於て、第一の用意用心なり。さればたとひ士君子らしき

者、剛氣らしき者、智者らしき者、仁者らしき者も、彼の禍福吉凶の説に、心を動かし、又其術を信ずる輩は、全く識の奴隷にして、鬼窟裡に活計をなす、眞赤な小人たるを知るべし。

古人は、大概識心をあさへて、自己の心と思へり、故に心を鍛ひ、膽を鍊る等の語あり。識は吾が心の一端に相違なけれども、此識の爲に、是心が惱亂せられ、又此識の爲に、是心があひやかさるゝを以て。此識と心と、あつから別あるを自知すべし。若し無分別と云へば、其無分別の心ぐるめに、放下すべし。あまり理數を逐ふて、知解を生ずると、果も無き事となる。是故に宗門にては、八識剌耶に一刀を下し、識心の根元を斷つを以て能事とす。一拳々倒黃鶴樓、一踏々翻鸚鵡洲など云ふ、機境ともに一時に掃蕩するの句あり。されば現實に此識變を知り、此識の惡感惡覺を自知自覺して、之を鍛錬する者は、餘人に非ず、即ち吾か本心なり。孔子曰、七十從心所欲、不踰矩と。
識心は、習慣によりて、第二の性をなす。幼童より制壓せざれば、知らずく惡知

惡覺を長じ。此惡知惡覺が、恰も本心の位に居ずまふに至る。是故に父母たるものは、注意して、惡染汚をなさしむること勿れ。染汚と識とは、俱に生じて俱に長ず。幼時の無意識の心に識別を生ずるものは、全く此染汚なり。性徳と外界の善法と相應して、其心識を鍛鍊し。一切の染汚をして、清淨法たらしむるが、士君子の徳行なり。此外別の子細なし。元來識なるものは、此心の了別識別の徳なり。然るに凡常の輩にありては、おぼろげに生滅轉變して、眼を見張りて、夢みると一般なれば。強く鍛鍊して、満分の功用を現すれば、必ず醒覺して、智光を放つに至るなり。たとへば果物の未熟なるは、必ず惡味なし。其未熟の時に枝を放ち、又は久しく汚物と一所に置きて、腐敗せしむ、遂に毒物と化す。是れ其物の惡なるにあらず、用ふるに法なきの禍なり、察すべし。是の故に識は剛健ならしむべし。識の剛健の徳を養ふには、吾れみづから剛健の人となりて、みづから剛健の徳を養ふべし。是れ以て士道の奧秘にして、修業の極則たり。故に曾て云ふ、勇氣凛々たるべし。女々しき事は、我が家風に於て大禁なり。さまざまに道はあれども、丈夫の吾が行く道は、武士の道。

識を鍛鍊するには、此識を見こなす事、尤も一大事なり。識を一枚に見こなし、佛は、佛識識の識區區字字と名づく、此心心をを識識又種々の識變を見ること、恰も音曲の音色の種々に變化して、窮極無きが如く思ふべし。聲音は、物と物と觸著すれば、發す。此識も亦然なり、縁に觸れ境に感じて、種々の識を生ず。音曲にて、聲音が激越すれば、所謂調子がはづる。識も亦然り、よく常識を收めて、鍛鍊せざるときは、喜怒哀樂の情が、氣隨氣儘に發作して、所謂調子はづれのものとなるなり。是故に聖訓に中庸の説あり。音曲も中聲を得て、而して變化す。若し中聲を得ざれば、音と音と和せず、曲をなさず。是故に金石にても、其性質の緻密にして、偏僻なきものを撰ぶなり。之を鍛ひ之を磨きて、樂器となす。されば強弱中聲、必ず調子に合す。石などは、天然水火に鍛鍊せられてあるなり、よく心をつけて見よ、一切の物、鍛鍊修養の功を積まざるものは、決して器となすに足らず、用ふべからず。是故に人は、只此識を鍛鍊することを、造次顛沛の間にも、遺忘すべからず。恰も一身を水火の中にさし措き、四方八面より、刺撃を受けて、心地よげに、身震ひして立あがり。黃鶴樓を一舉に拳倒し、鸚鵡洲を一踏に踏翻すべし。洒々落々として、天地の間第一人となり、すまして、彼の識心の纏綿を受くること勿れ。之を大丈夫とも、無事の

人とも申すなり。決して他に奇特ありと思ふべからず。欲貪は、境縁に着する識の名なり。甘を欲し、美麗を欲し、逸樂を欲し、名利を欲す、皆欲貪にあらずと云ふ事なし。是れ亦此欲識を制壓して、其度を越えしむることなかれ。恐怖は、境におびへる識の名なり。固より宜しく制すべし。是れ識の鍛錬中に於て、尤も意を注ぐべし。少年は欲貪の心うすく、恐怖の心は強し。青年に至るに及びて、漸く之に反す。即ち恐怖心は薄らぎ、欲貪心は増長す。少壯の時に、少しく道義の觀念ありしものも、老後は大概貪の爲に破られ、眞個五十知命の人は稀なり。識の制伏しがたき、實に如此ものあるなり。故に孔夫子は顔回が好學を稱するに、他事を語らず、只稱す、怒を遷さず、過を二たびせずと。怒を遷さずは、良弓を作るが如し。怒をうつすは、弓を引て逆がへりするが如し。過を二たびせざるは、歩を移して悪路を去るが如し。是れ識に識の鍛錬の法に於て、極致となす。修し盡せば、惡又聚の如き惡感惡覺も、根を絶ち底を拂つて、除却するに至るべし。

古へより學問あり聲名あるもの、或は高踏勇退、隱居獨樂、以て物外に逍遙たる趣をなすもの多し。又家事を家事とせず、交遊を疎外し、縁者を遠離し、一身一己の取廻はしにのみ氣を奪はれ、心を勞するものあり。此等は種々の事情境遇ありて、一概に談ずべからずといへども、大概は、識の鍛錬の修養に於て、未熟未鍊なる所より、其境縁の刺撃に耐へず。反撥して安穩の地を求むるによるなり。其中には、支那文人の、虛文虛喝に憑せられて、高尚を氣取り、神仙妄想の奴隸たるものもあるべし。之を要するに、識の斯人を惑亂すること、殆ど窮極一定の趣なし。是故に識の鍛錬には、全力を用ふべし。精を盡くし根に徹し、如此の妄識妄情は、何を踏へて力を生ずと、一身を引提げて鍛錬すべし。然らざれば、所謂油斷大敵一朝大事に臨みて、思はざる不覺の地に墮することあり。量り知らざる不思議の變に感ずる事あり。平生無事平穩の時は、いろ／＼と逞しき才能智術を振り回はし、理想妄情をよきおもちやに並べ置き、人並に一頭地を出て、事を辨じ世を利せむと欲するものも。些の識の轉變の爲に、大不覺を取り、獨り心中にかゝる拙き事は無き筈じやと、齒がみをなす程の事あるものと知るべし。是れ畢竟

は、少年より識の鍛錬を怠りし報いなり。慎むべし、畏るべし。是故に常に、一身を提げて、一切の境縁におし當て、順逆縦横、何の用捨もなく、何の好き嫌ひもなく、境も縁も一枚になして、立ち働く時は。其中間に、識の生滅動靜種々の變幻あるも、皆醒覺す。此一機此一境を、兩足の下に踏み込みて、何ぞ是れしきの事と、二王立ちに立ちて、身を出だすべし。一回び此氣合ひを合點すれば、戰軍に臨み、骨碎け肉飛び、今や天地も覆滅するかと疑ふ程の死地に投ずるも、決して動著せず。正々堂々たる意氣を含めて、生死を度外に、土の本分を盡すことが出来るなり。是故に識の鍛錬は、こらへ忍ぶ位にては、只是れ修業の習はしにして、眞修にあらず。されど初入の位は、實に堪忍が鍛錬修業の門なり。堪忍力なきものは、とても此修業に、手のつくものにあらず。されば兒孫ある父母祖父母は、其子孫の堪忍力を、第一に修養せしむべし。人の人たる命脈は、全く此堪忍力にあり。況や士道を守り、士徳を修むるものをや。佛の遺教經に、忍之爲徳、持戒苦行、所不能及、能行忍、者爲有力大人とあり。予少小の頃より、種々の艱難辛苦に遭遇せり。十二歳の春、父君に従ひて江府に

來る、弘化四末の十二月五日に生る。滿十歳と四ヶ月にてありしなり。十三歳のとしに、父君の死別に遇ふ、其歳の冬は、寒夜に蒲團一枚を折りて、之に打臥し、翌春にいたる。十四歳の夏、六月歸國す。伯父の家在りて、伯父の命に従ひ、炎天の頃、島に出て、草を取り、糞を運び、米を搗く等、公務の餘暇に、此等の雜事に従事す。十七歳より軍に従ひ、山野に起臥し、飢渴は殆ど此間の常談なり。又瘡疾を患ふること十八歳より頻發して、二十一歳に至る。中間遂に大患に陥る。此等の趣は、吾等のみならず、維新前後に、身を國事に致せしものは、大概同様なり。只古人の業を起し功を立て、一世を利し、一代を救ふものは、勿論。たとひ一郷一村に、功績を遺し留むるものといへども。大概は、少小の時に艱難辛苦せしものに限るなり。貴公子、富家の子弟にては、決して其事に任ずるに耐へず。吾等如きも、其當時に於て、良師の教を聞き、此識の鍛錬に志さば。其力量効績は、今日に十倍百倍せしならむ。只當時は、つらき事、餘義なき事、かゝる境遇は、人の世に免れざる事と、大様あきらめて。此折角の艱難辛苦の境遇を、半睡半醒の中に経過せしは、誠に口惜しき限りなし。但十分の學得は、出來ざりしまても、知らずくの

間に餘義なくも、識を鍛錬せられて。大概の事は驚かず怪まずに。是しきの事は、毎度遭遇せし境致なりと平易に思ひなすに至れり。兎にも角にも、識の鍛錬こそ、一大事なれ。此事の合點の行かぬものは、勿論吾徒にあらず。

茲に少壯の人の爲に、注意することあり。予が知人何百と云ふ數のうちに、戰に死するものは、十が一もなし。大概は三十四前後にて死没す。是れ識の惑亂に堪ぬが爲なり。即ち識に取り殺され、食ひ殺さるゝなり。故に曰く、山中の賊を平ぐるは易く、心中の賊を平ぐるは難しと。予が始め體と徳とを破る敵をせめ亡ぼし、惡魔を降すべしと云ひしは、此事なり。

識の鍛錬は、風雨の時に、小船に乗りて、海上波濤の間を渡るが如く心得べし。風雨に打任する時は、船を破るなり。さればとて、船體の力を量らず、風雨の程も計らず、無理に己が氣力に任せ、逆らひて覆すことあり。元來此身體は、金鐵にあらず。故に其鍛錬も、生理の度をはかりて、中庸を撰ぶべきこと、尤も肝要なり。之を要するに、識は耐忍して使へば、おのづからねばり強くなりて、内觸に何となく手強き感觸を生ず。是れ剛氣の内に含蓄するなり。目を養ふものは、常に瞑し

心氣を養ふものは、常に黙す。耐忍は身心の瞑黙なり。識の剛健の徳を養ふて、一切の境縁に打勝ち、吾生を養ひ、吾體を保ち育す。此外に妙術あるべからず。口の嗜好に適する食味は、必ずしも衛生に適せず。意の嗜好に適する文字、必ずしも徳性を養はず。是故に識を鍛錬するものは、嗜好に着すべからず。其嗜好を、識の所變として、直ちに鍛錬の術を施すべし。

一切諸法の中に於て、文字ほど力量あるものは無く。又功用あるものはなし。而して其禍害を人間に及ぼす事も、其力量功用丈けに甚だし。文明開化の文字は、いかなる不文明不開化の事も、用捨なくおし通して、敢て怪まず。自由の文字は、人を殺し國を亂り。忠義の文字は、暴君をしてます／＼暴逆を逞うせしむ。されば士道を學び、心識の鍛錬を修業するものは、文字に着すべからず。文字に著するの迷ひは、識の惡感覺を増長して、之を極度に達し、醒覺するの期なし。元來人間は、一種の動物中、最上の一類なり。故に少しく識に荒む所あると、彼の禽獸と異ならず。孟子の所謂人の禽獸と異なる所以のものは、幾稀なり、誠に危殆極まる事なり。故に忠と云ひ孝と云ひ、仁と云ひ義と云ひ、道と云ひ徳と云ふも、

此識を程よく治めて、狂ひ荒さまぬ様に律し、人をして生を遂げ死に就かしむるが爲のみ。此外に別に義理も次第もなきなり。たとひ君父臣子と名を付けても、人間同士の名なり。貧富貴賤、士庶、君子小人、杯と稱呼するも、人間同士のの上に差排する名なり。云はく、權平八平、お松お竹と云ふに異なることなし。只横に並べて對等と云ひ、縦に並べて尊卑と云ふのみ。對等如兩手、尊卑如頭尾是故に文字を去り、理窟を去り、種々の名目を去りて、直に此人を見よ。横目、豎鼻、其大體に於て、誰れ彼れの別なく、其憂苦する所を同うし、其欣求する所を同うす。されば只此自他の心識を、自他一枚に見こなして、頭目を救ふが如く、手足を救ふが如く、實地實際に赤心を通じて、此事實を事實に行ふべし。人間に生老病死あることを忘却することなかれ。飢渴痛癢あることを忘却すること勿れ。天災地變、忽ち悲歎の境を現ずることあるを忘却すること勿れ。是れ文字の義にあらず、人間の慰にあらず、即ち天地人の一物一體の事實なり。此一物をおさへ、此一體を通じ、此事實を統一するが、吾學の所立なり。是故に文字を離れて、道を求むるものにして、始めて識の鍛鍊を修し盡くすことを得るなり。是に従事するは、吾學の徒なり。

憶念すべし。

識の鍛鍊を修養するものは、詩文和歌等に、其心を寄すること勿れ。是れに心を寄する時は、識心を一境三昧に止めて、詩境歌境、又は文境に現じ。此現境に著して、遂に士氣を消し、士道を失ふに至るなり。元來識の所變によりて、虛假無實の境を認望し、其境に醉生夢死するは、其事の、人世に大害なきにせよ、士君子の決してなさざる所、孟子の所謂心を放て求むることを知らざる、大不覺者なり。是故に識を鍛鍊するものは、詩愚となるなかれ、文愚となるなかれ、歌愚となるなかれ、古人の所謂書痴となること勿れ。宋の洛雷發の莫哀歌あり、諷誦するに足る。四季折々の氣候、山河處々の風景を賞玩して、心目を樂しましむるものは、詩なく、歌なく、文なくて、却て此天真を證得するなり。古人の名歌名句を朗吟して、其情景に合し、自適逍遙したらむには、みづから刻苦工夫を凝らし、文字を並べ、言句をひねり、下手な藝術を世人に示すの愚に、まさること萬々なり。尤も老年にいたり、人事繁閑の中に於て、識の鍛鍊の一助になすは、必ずしも悪しからず。決して少壯中年の士は、専ら心をよすることなかれ。由來文字言句の業は、大概は